早稻田大學教授

永井一孝著

明治文學史

文獻書院發行

緒言

一、本書は私が多年企圖しつゝあつた國文學史の一部として公にするものである。

一、文學史は、それが既に史といふからは、文學の史的考察を目的とすることは論を俟たない。文學が時世の流に隨つて如何に展開したか、現代の文學は如何なる徑路を經て今日あるを致したかを考察記述すべきである。かの徒らに個々の作品の解題批判を羅列し、妄に作家の傳記逸事を叙述しただけでは、縱令それが年代順に配列されてあつたとしても、未だ完全なる文學史といふことは出來ない。文學史としては、須らくその間の關係を討尋し、その展開の理法を闡明しなければならぬ。作家は時代が生み、作品は作家の個性の發露である以上は作品の解說批判は勿論、作家の閱歷境遇、時代の精神推移をも審かにせねばならぬ。私はかくてかうした方針の下に、この國文學史の編述をば企圖したのである。然しながら、この事たる、なか〳〵容易な業ではない。上代の事は文献の不備によつて事相の正確を期すること難く、現代の事は複雜にして且つ動搖常なきによつて的確なる判斷を下し難い。然し、史としてはどこまでも事實の正確を期さねばならぬ。いかなる解說批判も、正確なる事實の

上に立つて、そこに始めて價値は生ずるのである。史筆を弄するもの、世間往々事實を疎外して得々たるものは無きか。私は之を疑ふ。本書は事實の正確といふ點に深甚の注意を拂つた。

一、本書は、もと早稻田大學出版部發行の「文學講義」に掲載したもの丶一部に訂正增補を加へたものである。著者が最初かの「講義」に國文學史を掲載し始めたのは、「日本文學史」と題したもので今を距る三十五年前、明治二十八年一月であつた。爾來稿を改めること四回、今日も「國文學史」と題して尙連載してゐる。本書は、即ちその第三回目の講義「國文發達史」と題して掲載したものゝ一部に訂正增補を加へたのである。故に、本書はかの第三回目の「講義」とも異なり、又現在連載しつゝあるものとも勿論異なる。講義錄には紙數に制限のあることを、私は常に遺憾に思つた。今、本書を公にするに當つては、いかなる大きさにするのも隨意であることを喜ぶ。然し普く世上に弘布せんとすれば、又妄りに尨大なるを許さぬ事情が存せぬでもない。私はそれやこれやを斟酌して本書を編述した。

一、故に、本書は上述した方針の下から眺めると、自分ながら遺憾に思はれる點が多少無いでもない。就中、作品の解題や作家の傳記などを殆ど全く略述するを餘儀なく

されたことは、その一である。最初計畫してゐた主なる作家の寫眞及び作家の筆蹟などを掲載することの出來なかつたことは、更にその大なる一である。本書が他日改版の機會に接することあらば、それらの寫眞だけなりとも挿入して、作家の俤をしのぶよすがの一端ともならしめようと思ふ。

一、本書は事實の正確を極力企圖したとはいへ、私の微力と繁劇とから生ずる意外の思ひ違ひや誤謬があらうかと、衷心忸怩たるものがある。大方の諸君幸に叱正の勞を惜しまざらんことを希ふ。

昭和四年二月紀元節の日

著　者　識

明治文學史

目次

目次終

明治文學史

早稻田大學教授　永井一孝著

總說

攘夷・開國・また佐幕・勤王と相分れて紛擾を極めた時局は、急轉直下して大權の返上となり、廢藩置縣となつて、明治維新の大業を成した。維新の變革は有史以來未曾有の變動であつた。ひとり七百年の久しい間政權を壟斷した武家政治の顚覆のみではない、天皇親政の下に、土地は公田、人は公民となつて、遠く大化革新の古に復したといふのみではない、ましてや郵便電信の設備がまだるい飛脚三度笠に代り、瓦斯燈電燈が薄暗い行燈に代つたのみではない、我が國のすべてに亙つての大變動であつた。舊い文物制

度風俗習慣は全然破壊せられ舊い道徳も信仰も文學美術もすべて一様に排除せられた。破壊につゞく建設が狂飆の如き勢を以て始まつた。近代文明の曙光と稱せらるるルネツサンスが齎し來つたあらゆる歐羅巴の文明や、血と罪とを以て作り成した佛蘭西大革命の後に生れ出でた電氣と鐵の十九世紀文明をば、悉く收拾して自家薬籠中のものにならしめようとする努力がこゝに起つた。夙に支那の文明を採り、印度の文物を迎へて、東洋の精華を萃めなした我が日本は、更に歐洲の文明をも融合し消化しようとする偉大な事業に、驀然として企圖し着手しようとした。もとよりいつの世にも免れない頑迷な舊態維持の聲は屢ゝ放たれた。それと共に西洋の文明に眩惑せられて一向盲従する輩も少くなかつた。さきの開國論と鎖國論とは内容をこそ異にすれ、その聲を新にして頻りに繰り返される觀があつた。然しながら、乖戻衝突は大局より見れば畢竟さゞ波に過ぎない、幾度か寄せては返すものゝ、やがては膨湃たる巨濤を起して驀然融化の岸へと向ふのである。よしや内容の充實といふ點より見れば未だしい所はあらうとも、よしや過渡時代の稱は免れることが出來なくても、融化の外形だけは略ゝ完成に近づいた。歐米の學者が史上の奇蹟を以て呼ぶのも理といはねばならぬ。われ等の祖先は嘗て支那の文明を撮合し、印度の文化を攝取し、大化革新を成し遂げて、

自ら驚歎の眼を瞠つたこともあつた。されど、之を明治の改新に比する時は、その規模の小さかつたことを今更ながら駭かざるを得ない。

然らば更に當代文學の狀態如何を考へるに、もとより文學が社會事象の反映である以上、その隆盛が遠く天平時代に於ける藝術全盛期を凌駕すべきことを豫想される。然しながら、天平時代が大化革新の後約八十年で始めて來つた如く、すべて文學美術等の精神的文明は物質的文明よりも後れるのが常である。明治の文學も未だ新日本に恰當した新國民文學を樹立するまでには發達してゐない。即ち明治の文學は未だ歐洲文藝の模倣に彷徨してゐる。新文明が過渡時代、と稱せられるよりも、なほ強い意義に於いて過渡時代にあるものである。飜案時代、飜譯時代、とも稱すべきであらう。かつて我が漢詩界は、唐より宋、宋より明と、杜甫・李白や李于鱗・王世貞・の故國より、その新調を傳へられる毎に殆ど二百年の後に於いて始めて其の格調を新にした。江村北海は其の著「日本詩史」に於いて、詩體の毎に氣運に從つて進遷することを說いて、「我が邦漢土と相距ること萬里、劃するに大海を以てす、是を以て氣運每に彼に衰へて此に盛なるもの、亦勢の免れざるところ、その後るゝ大抵二百年、胡ぞ其の然るを知る。「懷風」「凌雲」の二集收むるところの五言四韻世以て律詩となすものは非なり、その詩對偶備はれりと

雖も、音律未だ諧はず、これ古詩漸く變じて近體となりしもの、齊・梁・陳・隋漸く其の作多し。我邦その氣運を承くるもの、その年代を稽ふるに、文武天皇大寶元年は唐の中宗嗣聖十四年たり、上梁の武帝天監元年を距ること二百年、弘仁・天長は初唐に髣髴たり、天曆・應和は元白を祟尙し、竝に百年の後に皿𨓏す。五山詩學の盛、明の中世に當る。彼に在りては李何李王復古を前後に唱へ、此に在りては南宋北元專ら一時に傳播す。その宋元の際を距ること亦二百年なり。我が元祿は、明の嘉靖を距つること亦復二百年なれば、七子の詩當に我が邦に行はるべし云々」と。またいふ「是に係つて之を論ずれば、それ或は今に繼ぐもの數百年と雖も知るべきなり」といつてゐる。數百年の後をも豫めトし得たのは、桃源の夢の濃かな舊日本であつた。漢土との間を劃するに、さながら萬里の大海を以てした如き昔のことであつた。今や文明の力は殆どその隔てを除き去つた。トルストイの故國からも、モウパッサンの故國からも、メーテルリングの故國からも、イブセンの故國からも、オスカーワイルドの故國からも何等の障碍なく、其の作品や其の主義や其の評論は滔々として浸入して來る。昨日の歐洲大陸に於ける運動は今日はすでに我が日本の運動と成る。かれの一起一伏は相踵いで我にも波及して來る。此に北海を拉し來つて明治の文壇に立たしめても、如何で明治の推移をば豫言する事が

出來やう。かくの如き紛亂を極めた現象は過去に於いても存せず、世界に於いても類例を求め得ざるものであらう。

抑〻明治の文學は、この外國文學との接觸がなくても、當然その樣式と内容とを新にすべき理由を有してゐた。明治維新の變革はあらゆる方面に及んでゐるが、その中の最も顯著な一は封建制度の打破に伴つて起つた階級制度の撤廢である。帶刀は禁ぜられて武士は名目のみの士族といふ稱を得、人交はりも出來なかつた穢多非人といふ部族もなくなつて、四民平等の世となつた。かゝる場合に於いて歴史の示す所の事例は、多く質に優れる貴族の鍛錬陶冶せられた文明が蹂躙せられて、新に勃興した平民の粗野陋劣なものが之に代はることである。即ち平民がその數を恃んで社會の上位に立つ時は、國民一般の品位を退轉せしめ趣味を卑俗ならしめるが常である。然るに、幸ひにも我が國にあつては、平民は其の位置を向上せしめると共に、品性も亦いよ／＼健全に且つ高尚である事を得た。こゝに於いて、さきに江戸時代に於いて趣味と好尚とを全く異にして、貴族文學・平民文學と相睽離した二樣の文學は、こゝに合して一となり、更に健實な發展を遂ぐるに至つた。貴族文學の流弊である窮屈な法格にも囚へられず、陳套沈滯にも陷る事がなくして、その高雅と純正とを殘し、平民文學の習俗である陋俗

や荒唐の域からして、よく新機軸や自由の創意を存することを得た。雅と俗と保守と進歩とはその特長を損ぜられる事なしに、互に文藝の向上に貢するを得た。

階級制度の破壞はやがて職業世襲制度の打破である。その祖先が自己の境遇により、才能によつて選擇した職業は、その家の子弟たる以上好むと好まざるとに論なく必ず繼承すべきものであつた。これを文藝の上にうつし見る時は、師道の株守であつた。師の主張作風をばひたすらに墨守して毫厘も之に違ふまいと期した。先例の踏襲、典型の崇拜は實に個性の滅却である。個性を沒却して、いかで眞の意味に於ける文藝を期待することが出來やう。父子の相傳といひ、師弟の相承といひ、かくの如くにして得る所のものは藝術の形骸に過ぎない。描き出す所はたゞ概念的の美のみ、善といひ惡といふ大まかな類型のみ、血もなく肉もない傀儡に止まる。剩へ、その背後には武士道といふ大なる勢力が存してゐて、喜怒にも哀樂にも顏の皺一つをも動かさず從容自若たるを要求し、感情を排して義理を重んずべく要求したではないか。然るに今や其の權威は輕くなつて來た。世襲制度の破壞はまた個性の發展に對する障碍を除き去つた。自立せよ、自重せよ、向上せよ、勇往邁進せよとは、解放せられた個性の聲であつた。粉本の間や典型の間に孜々として疲れた眼が、いき／＼した自然に對し人生に對して

注がれると、今更に驚かされると共に蹶然として起たずに居られやうか。筆を鼓して其の想を新にし其の辭を新にせんとするのであつた。支那人の口吻を模するに力め、漢詩漢文を以て最高の藝術となしたものが、我が國民思想をさながらに歌ひ、その言辭を『萬葉』『古今』の死語廢語に取らで、直に現代語に取る新體詩の起つたのもこれが爲であつた。特殊の性格指示を要求する今日、なほ更に細緻な心理描寫を歐洲から學んだ以上は、類型の描寫を以て足れりとした八文字屋本の氣質物をば、誰が顧みるものがあらうぞ。

内にあつてかやうに解放された文藝は、外國文學の思想と提携するに至つて、始めてその價値と位置とを自覺することとなつた。かの平安朝にあつた紫式部の物語を以て正史以外の價値ありとし、江戸時代にあつて本居宣長がその意を闡明してもののあはれてふ說を唱道した以外には、鎌倉時代といはず、室町時代といはず、文學はすべて教化の具、勸善懲惡の手段としてのみ人生に意義あるものと考へられた。政治道德宗教教育等の羈絆をうけて、之が隷屬たるべく強ひられた。實用を離れ世道人心を離れては文藝の事はまた言ふべからずといへる支那文學思想は、つねに纏綿する所であつた。これ等の見を全然打破した警鐘は『小說神髓』であつた。ひとり小說のみならず、すべて

の文學は教育政治を外にして、なほ意義あり價値あることを知らしめた。そして其の由て來る所は英文學の思想であつた。その後更に進んでは、シヤフツベリ等の善美一致論の反動として起つた文學至上論や、詩人の絶對自由を實社會に於いても許容せよといふ天才神聖論も紹介せられ批議せらるゝに至つた。是に於いて、文學は昔日の如く世外の徒・風流の輩・が消閑の技でもなく、遊蕩兒輩の筆のすさびでもない。男子畢生の事業、誰かまた戲作と稱して、かの赤本・黑本・と同一視するものがあらうぞ。すでに戲作の滅びた以上、戲作者といふ者も存する筈がない。神社の納手拭に麗々しくその名を書して世に賣らうとしたのは昔のこと、賣藥・袋物商・として、下駄屋・差配人・として始めて社會に於ける地位を與へられたのは江戸時代のこと、今は文學者として堂々と社會に濶歩するやうになつた。山林に遁れて風月を友とし、市井の間に隱れて脂下りの煙管の煙に浮世を茶にする態度とは、全然その類を異にした。進んで公衆を導き、社會に新思想を鼓吹しようとする先覺者を以て任ずるに至つた。道樂であつた文學は職業となつた。遊民であつた文學者は社會的奮闘の勇者となつた。明治の文學が力の强いのは、かういふ點から出でてゐる。

遊戲もしくは實用の桎梏のもとにあつた文學は、興味の中心を技巧に置き事件の變

化に置いたものであつた。作家は自ら傀儡師として幾多人間の行動を操り、造化翁たとつて小宇宙を左右に旋轉せしめた。すべてが空想から割り出されたのである。時と處との限定のない荒唐無稽な事件と人物との出入に外ならぬのであつた。神威佛力か、さなくば幽靈の怨念か、弱きを助け強きを挫ぐ俠客かを齎し來つて、始めて事件の局を結ぶのであつた。かういふ夢幻境裏にあつた文學を、現實の疆域にひき下したのが實に明治の文學であつた。時にも處にも、人物にも、最も的確に實在のものたることを烙印し、而もこれらの間にも他と紛れない特殊の色と匂とを現はし始めた。舊文學は多くあり得べからざる人生に於ける危機の狀態を選んで興奮激越の心理を扱つたといふべく、明治文學は日常平靜の際に於ける知情意の歷史を作り出すものといふべきであらう。隨つて、描寫の態度、敍述の手法は、誇張から脫れ、作意から脫れ、技巧から脫れて、一に自然といふ事に歸した。その自然といふ態度の前には、人生の暗黑面をさながらに寫し出した。幾重にも襲ねられた文明の衣の下にも、あさましい野獸性が昔のままに潛んでゐることも明かにした。肉慾に就いても赤裸々に暴露するに至つた。われらは肉慾を題材としたものに西鶴のあることを知つてゐる、されどそれは人生の眞相を闡明しようとしての業ではなかつた。また春水といふもののあるのをも知つて

ゐる。しかしその筆は挑撥的といふことを主としたものであつた。然るに、明治の文學はすべて人生の根柢の如何なるものたるかを明かにしようとしてゐる。その結果として、現代社會組織の缺陷や、文明の虛僞や、道德の矛盾をもあらはにするに至つた。かつて、我等は平賀源内の嘲罵の絕叫をも聞いたことがある。然しながら彼は唯、自己の憤懣の情を折にふれ物について發するに過ぎなかつた。明治の作家はその私念の小なるものを沒却して、湛然たる心に映ぜる人生を觀んと欲するものであつた。無解剖といひ、排理想といふは、皆小主觀を棄てんがためである。平淡の心といひ、嚴肅の態度といふは、科學の眞理を他の方面から齎らし來たさんとするためである。戲作家の態度を離れ得ないで文學を遊戲視した明治の初期、尊重しながらもなほ遊戲として扱つた中頃の傾向は、つひにこゝに落ちつくことを得た。所謂自然主義が卽ちこれである。

この傾向は實に歐洲に於いて十九世紀の後半から盛になり來つたものであるが、歐洲文壇の推移がこれに達するまでには幾多の起伏を經驗したのである。その要素の複雜は到底他の時代に於いては之を見ことが出來ぬものである。それが發展の跡も之をロマンチシズムの反動として考へねば、つひに理解し得ざる所である。そしてそのロマンチシズムは少くともルネッサンスの昔に遡らねばならぬ。試に思へ、かの中

古暗黑時代の反動として起つた十五世紀のルネツサンスは人間の自覺となり、藝術の解放となつて縱横にその狂熱の情を迸發せしめた。その何等の拘束のない奔放の極は明晰中庸均齊などの智的趣味の上に立つて典型を遠く希臘羅馬の古文學に求める十八世紀のクラシシズムとなつた。更にその末が衒俗に陷り模倣に趨り千篇一律となつた時、かの佛蘭西大革命に際して一轉化するに至つた。歐洲十八世紀の階級制度に對する反動は極端までの平等主義を起し、これを文藝にしては形式の打破、常套の破毀となり、現實を離れた時と處とを求め、日常に見るべからざる不可思議の境を求め、また法式を外にして熱烈な情緒を欲するロマンチシズムとなつた。その趨勢は殆ど一世紀に亙つたが、更にその要素中の自然描寫の傾向を推し進ませたものが、また理想主義に對する寫實主義と結びついて、自然主義となつたのである。されば自然主義はロマンチシズムの連續として見るべく、また現實推重の點から、智的觀察の點から、その反動として見るべきである。

かく反動につぐに反動を以てしてクラシシズムから自然主義に移るまで前後三百年、ロマンチシズムから自然主義に轉ずる迄殆ど百年の歷史を經たのである。然るに、我が國にあつては、その最も複雜を以て稱せられるロマンチシズムから自然主義に達

する徑程を、僅に十數年の間にくりかへしたのである。明治文學が紛亂を極めるといふ一面の理は實にこゝに存してゐる。蓋し明治は四十五年を數へたけれど、その初の三十年は歐洲文學を人爲的に取り入れたに過ぎぬ。自然の趨勢が彼と軌を同じうしたのは後の十五年間である。維新後の十年は我が國民が物質的文明の建設に忙殺せられた時期であつた。その師たる亞米利加が既に功利に趨る以上、ひたすら其の後塵を拜する我が國に於いて、いかで精神上について顧盼する暇があらう。奈良の大佛をも鑄潰して大砲を作らうとし、增上寺の五重塔をも燒き拂はうとし、奇籍珍書も高閣に束ねられるといふ世の有樣である。文學美術に對して悠々翫賞することは到底望み難い業であつた。もし幸に翫賞の徒があるとすれば、江戶時代の餘瀝を舐るもののみであつた。また幸に歐洲文學の書を繙く者があるとすれば、たゞ新奇を需めるの徒か、さもなければ、政治意見を盛る器として之を見るの輩のみであつた。明治十六年に『小說神髓』が出でて、始めて文學を文學として論議し、文學上の主義といふ事も所謂文藝家の口にする所となつた。されど、『神髓』の主張する所は一に寫實主義であつた。これを歐洲文壇の推移と比較する時、彼の寫實主義はロマンチシズムの後を襲ぐものであつたのに、我にあつては却てそれに先つといふ奇なる現象が認られる。これといふのも、畢竟

文學必然の結果にあらで、人爲を以て外から導いた故である。一言を以て之をいへば模倣であるからであつた。

その模倣が漸く模倣の域を離れかけた時、外發の文學の狀態が漸く内發的に發達し始めた時、たとひ大局から論ずれば、なほ模倣の域にさまよつてゐるものとはいへ、兎に角に歐洲文壇に於ける如き順當な徑程を歷はじめた。こゝに於いて、理解とまた期待とを以て歐洲文學に接し、その思想の侵入を受けることが出來た。日清戰役後の數年間に亙つて、我が國のロマンチシズムが起つた。熱烈な宗教的氣運や、感傷的傾向や、美的生活の叫びや、皆現實に慊焉たらず、さてはまた理想を求め得ざる悶えの聲であつた。三十年頃から三十七八年頃までの短い期間は、やがて歐洲にあつては十八世紀の末から十九世記後半に至るまでの閱歷に比すべきものであつた。更にその傾向は日露戰役を樞軸として一廻轉をなした。彼にあつて然る如く、現實を中心とした文藝が自然主義の名目の下に起つた。佛蘭西に於いて大いに發達した其の文藝は直に我に移植せられ、またかつ戰ひかつ握手した露西亞に於いて特殊の發展をなした其の作品は相踵いでこの趨勢を刺激した。かく自然主義の勃興と共に、更に奇なる現象を見ることが出來た。自然主義の終結に近づくに及んで、神祕主義・象徵主義が現實の過重から出

でたといはれるのが歐洲の二十世紀以來の狀態であるのに、我にあつてはその勃興の始から直に是等の主義が隨伴するのであつた。されば幾多の思想が渾然として殆ど一時に幷び起る程に、その推移の迅速なる、起伏の激甚なる殆ど端倪すべからざるものがあつた。十九世紀後の歐洲文壇の複雜すらなほ人を驚かすに足つたのに、これは更に甚しさを加へたのであつた。

明治文學の思潮の要素を考へると、また忘るべからざる一面がある。それは歐洲文學思想と合流し、また合流せんとする東洋固有の思想である。この固有思想は、歐洲思想が殆ど軌を脫して縱橫し、我が國民性の遺れられる每に、爆然その勢を發して穩健の途に立ち歸らしめた。明治文學が彼に學びて强烈・複雜・穠艷・の積極的趣味を飼めながら、他に於いて清雅・沖澹・幽玄・の消極的風尚を持することが出來たのは、これがためである。

羅馬字採用を主張するの聲高く、果ては東西人種の雜婚をも唱道し、或は基督教主義を以て歐化を鼓吹した時代についで、日本主義の反動は起つた。國粹保存の論は盛になつた。かくて、元祿文學の回顧となり、西鶴は復活し、近松は論議せられた。當時論議の聲の大かつた性格劇の發展は、近松から得る所が尠くなかつた。尋いで「萬葉」以後の

古文學も世に出でた。俳句は蕪村を中心として天明調、やがて大江丸を經ては一茶の復活をも見るに至つた。自然主義の漸く喧傳せられる當初に於いて川柳點も復活した。自然主義のやゝ停滯する頃に及んでは、文化文政に於ける江戸の趣味が憧憬せられた。口語詩を說き散文詩を唱へる人の口の端に、長唄や常盤津がくりかへされた。

かくも全然その趣を異にした思想の相交錯することが、世界のどこの國またいつの時代に存して居らうぞ。歐洲の文壇にも東洋思想を取り入れる趨勢はあるが、到底比較すべき程度には達してゐない。我にこれあるがために輕薄な盲動や附和雷同の痛ましい經驗も嘗めなければならなかつた。取捨の暇がなくて利と共に害をも受けねばならぬ不幸にも遭遇した。要するに明治文學の歷史は、かくの如くにして生じた幾多無量の曲折波瀾が、我が國民性の上に立つべき眞の新文學建設に落ちつく徑路を示すものである。故に明治の文學の委曲を知らうとする者は、この兩思潮の交涉の跡に考へて、四期に分つて說くを要する。

第一期、維新から十七年頃まで。その前半は德川文學を繼承した戲作、また新文學の基礎を築くための新文明の宣傳。後半は政治文學及び歐洲文學の飜譯。

第二期、十八年頃から二十七八年頃まで。明治に於ける新文學の覺醒期で、紅葉露

件・を中心とした寫實主義の流行。國粹保存の論議が大いに行はれて、元祿文學の復活と歴史小説の勃興。新俳句の唱道。

第三期、日清戰後から三十六年頃まで。寫實主義の遊戲的・概念的から一回轉した心理小説・悲慘小説・深刻小説・の流行に始まり、傾向小説・宗教小説・社會小説・の出現。また評論に於ける時代精神論・日本主義論・が大いに唱へられて、つひに本能滿足論・美的生活論・を起すに至る氣運。さきにいつたロマンチシズムの時代・感傷的に哲學的に思潮の動搖した時期。

第四期、日露戰役から四十五年まで。獨歩等の自覺せざる自然主義の作物から、抱月等の主唱、花袋等の主義を持しての創作の續出。更に象徴主義・神祕主義・に遷らうとする推移。概して自然主義全盛の時期。劇と小説とを中心とした時期。

第一期　舊習破壞時代

第一章　新文明の宣傳

明治六年十一月東京守田座に於いて、一の新狂言が演ぜられた。　それは當時の人々が耳新にする文明開化の意を童幼にも理解せしめ、また電信機・蒸氣船・や新聞紙の功用を示さうとするものであつた。　實に維新後十年の間は、この文明開化を實現するに忙しく、種々の手段が講ぜられた。　その深い意味を知らぬながらも、たゞ文明開化に憧憬した。　その憧憬の前には一度設立せられた皇學校も假學校も廢せられた。江戸時代に於ける漢學最高の府であつた昌平黌も大學東校と稱せられて、西洋醫學の研究所となつた。　蕃書取調所から洋書取調所となり、ついで開成所となつた西洋學の研究所のみはひとり榮えて、二年には大學南校となつた。　十年にはそれを基礎として東京大學の設立を見るに至つた。　されど、世の趨勢がかくの如く成り行くには、先覺者の起つて之を導くものがなくてはならぬ。　三田翁福澤諭吉は實にその第一人であつた。　慶應義塾の前身は、すでに安政五年江戸の藩邸に開かれた家塾に於いて之を見ることが出來

る。規模大を加へるに及んで、慶應三年芝の新錢座に移したが、この時には堂々として高く世に標榜する所があつた。曰く、「抑、洋學の以て洋學たる所や、天然に胚胎したる物理を格致し、人道を訓誨し身世を營求するの業にして、眞實無妄細大備具せざるはなく、人として學ばざる可らざるの要務なれば、之を天然の學と謂うて可ならんか」と。さらば、その洋學を研究するには何處の語を以てしたかといふに、我が國文明の指導者たる亞米利加の用語、即ち英語であつた。德川時代に於てその勢を專らにした蘭語は、その母國が歐洲に於いて國勢の不振を來すと共に、日本の語學界にても地位を英語に奪はれたのである。蘭學の大家前野良澤を出した豐前中津濱に生れた諭吉その人も、最初は長崎に、次には大阪の緒方洪庵に、蘭學を學んだのである。然しながら、炯眼は早くも英語の世界語たるを見、「英蘭對譯字書」を唯一の便として、鋭意英語の研究に力め、つひに堂に上ることを得た。この英語を以て亞米利加の學風を唱へる義塾は、もとより功利實用を主とするものであつた。しかし、その學を弘布するためには幾多の困難と戰はねばならぬ、生命すら危難に瀕したこともあつた。されど、不撓不屈の精神は、よくその業を全うした。明治元年五月上野戰爭の日、砲聲遙に芝の森を搖がす折にも、なほ英書ウェランドの經濟書を講じてやまなかつたといふが如きは、よくその熱誠を窺ふべ

き美談ではないか。かくて、維新の後も制すべき勁敵はその周圍にあつた。廟堂の地に戀眷する官僚萬能の主義。昔ながらに輕躁浮薄な民衆の奴隷根性。これを打破するために自ら平民の典型を以て任じ、獨立自尊の氣風を鼓吹した。その一生を擧げて一度も官途に就かず、育英と著述とに力めたのはこれが爲めであつた。

諭吉が著述は塾の經營と共に維新以前から公にされた。國中多數の人民を眞實の開國主義に引き入れようとする一事は、實にこの洋學者の本領であつた。西洋文明のためにしようといふ抱負を以て、幾多の書を公にしたのである。中にも文久元年第二回の洋行として幕使に隨伴し、英佛蘭獨露等の文明に接して歸るや、その見聞を錄した『西洋事情』は我が混沌たる時代に於ける一道の光明であつた。人は始めて歐洲の歴史地理を知り、政治的制度を知ることが出來た。維新當時の法令の如きも、之に負ふ所が少くなかつたといはれてゐる。その書を著はすには、いかにして幼稚な民衆を啓發すべきかと、種々の工夫を凝らした。『窮理圖解』は自ら悟り人に語るに物理の原則よりよきはなしと考へて、種々の物理書の中から拔萃したものであつた。『世界國盡』は寺小屋の手本なる「江戶方角」や「都路」に倣つて、世界の地理歴史を知ることが江戶の方角を知る如く

ならしめようとして著はしたものであつた。

新しい思想を盛るには、また新しい器を要する。粗放な漢文と古雅な和文とは、到底新しい思想を表出するに適しない。平民を以て任じた諭吉は、また明晰平易な一平民文體を創めた。その師洪庵は常に説いていつた「洋書の譯に難字難文を用ゐるは、徒に讀者を苦しむるに過ぎぬ、文字は知る限りを以てせよ、譯書の詮索は無用の業」と。この趣旨を奉じ、また蓮如上人御文章の風體を範とし、行文の都合次第に俗語をも漢語をも遠慮なく使用した。「今より次第に漢學を廢する用意專一なるべし、その用意とは文章を書くに難しき漢字をば成るべく用ひざるやう心掛くる事なり」とは、明治文體創始の卓見である。「應有の材料云々」と記して心平かならず「有合の品」と改めて始めて滿足した事もあつたといふ。『世界國盡』すべて七五の調を以て行き、平淡な地理や歴史の叙述中時に詩趣の掬すべき所があつて、よく吟誦するに足りる。これぞ後の新體詩の先蹤ともいへよう。これが諭吉の功の文學史上に特筆しなければならぬ所以である。

義塾の學風を實利とすれば、これに道徳修養の色調を深くし、諭吉の主張を急進とすれば漸進の態度を以て漢學の特長をも沒却しなかつたものは、中村敬宇の同人社である。その社は明治六年に建設せられたが、それに先つて、敬宇には「西國立志編」の著があ

つた。敬宇はもと幕儒の出で、夙に英國に留學して、その國民の健全著實な點に矚目する所があつたが、歸來人心の舊染を去るを焦眉の急として、まづこの著を公にした。これは敬宇の英國を去る時、友人フリーランドの贈つたスマイルスのセルフヘルプを飜譯したものである。その流暢雄健な譯筆は一方ならず世にもてはやされて、かの『西洋事情』または內田正雄の『輿地誌略』と共に發售數萬部に及び明治時代に於ける三大出版の一と稱せられた。ついで『自由の理』『西洋品行論』等を公にした。これ等の書を見、その人格の高潔を聞いて、慕ひ集るものの多きを加ふるに及んで同人社の開校を見るに至つた。その導く所は一に實踐躬行であつた。かくて明治の新文明も功利實益から一步を進めて、道德修養の精神界の改善に著手したことが認められる。

義塾・同人社を二大私塾として、その他箕作秋坪・鳴門二郎吉・福地源一郎・尺振八等も各塾を開いて生徒を收容した。多きは三百、少きも數十を下らなかつた。政府でもまた敎育の方針を確立し、三年には府縣に小學校を設け、五年には大中小學の規則を定めるに至つた。政府はまた資を供して種々の書を飜譯せしめて刊行し、民間の著述家と相俟つて、文明の福音を說き、世界的知識を啓發した。『經濟原論』『泰西通鑑』『西洋新書』『修身論』またさきの『輿地誌略』の如きは、それである。

かゝる間に、新島襄は京都に同志社を設立した、時は八年。襄は維新前に國禁を犯して米國に渡り、神學を研究して歸朝するや、眞の文明は宗教を基礎とせねばならぬことを思ひ、基督教を世に傳へようとした。その努力の結果は十年の後に始めて現はれたが、兎に角に明治文明も漸く心靈上の問題を考へることが出來得る程の餘裕を生じたのである。精神的活動もこゝに緒を開き、やがて來るべき新文學も、その氣運をこゝに釀成することを得た。これは一に先覺者の賜である。

明治の新文明の基礎は、また他の方面からも築きあげられた。新聞雜誌の刊行が一般民衆をして文明開化を解せしめた功は、意表に出づるものがあつた。徳川時代には新聞といふものがなかつた、強ひて類似のものを求めるならば、市井の出來事を巷々に讀賣した瓦版が、その一つか。また、文久二年に洋書取調所に於いて、瓜哇バタビヤにて發行した蘭字新聞を飜譯せる官板バタビア新聞といふのがあつた。これらが今日の新聞紙の體裁を成したものともいへる。次いで米國諸新聞の飜譯、香港・寧波の支那新聞に訓點を施して飜刻したものが、相踵いで出でた。これ等は時に應じて出でたものであつたが、その定期刊行の形を取つたのは、岸田吟香が横濱に於いて出した「新聞紙」と題するものである。内容は西洋新聞の飜譯。當時は未だ活字がなかつたから、吟香等

自ら版下を書いて木版に刻したが、半紙五六枚の小冊子の形であつた。慶應二年には英國人ベーリーの「萬國新聞紙」が出で、柳川春三の「西洋雜誌」が出た。後者は雜誌刊行の先驅。春三はまた明治元年に「中外新聞」をも出した。この年太政官から今の官報の基をなした「太政官日誌」が出版せられ、又「遠近新聞」「新聞事略」「もしほ草」「內外新聞」等が出た。その中にあつて最も振つたのは、福地櫻痴の「江湖新聞」であつた。櫻痴がこれを創刊したのは、かつて幕使に隨行して英國にあつた時新聞の勢力のよく輿論を左右するを見て、之に倣はうと期したのである。幕府は仆れたけれど、薩長は第二の幕府を作らうとする、これ維新の目的に背く、これを矯めざるべからずといふ主義を以て時事を論じた。されど、未だ活字も活版もない世のかなしさには、木版に彫つて馬連摺とし、半紙二ツ切を十枚か十二枚に綴つたもので、內容も雜報があり、寄書があり、論文があり、草稿は皆櫻痴の手から出でて、淨書の如きは勿論時には自ら版下をも書き、三日若しくは四日毎に發兌するの有樣であつた。しかも發兌部數の多いことを以て稱せられた。已に當時の政府のなす所を喜ばない所から、幕府の脫走兵の勝利を喜び、或は戰況の虛報、政治上の虛聞を作爲して記載したので、發行を禁止さるるに至つた。なほ累は他にも及んで、諸新聞の發行禁止となつたが、やがて時世の要求に間もなくその解禁となり、

また鉛活字の製造も出來て、愈、健實な發達を遂ぐるに至つた。三年十二月「横濱每日新聞」が洋紙活字版を以て日刊の發行を創め始めて新聞紙の體裁を完うした。五年には「東京日々」「郵便報知」六年に「朝野」八年に「曙」が出でて、所謂五大新聞が相對峙することとなつた。記者にはまた論客政治家の選良がこれに當ることとなつた。福地櫻痴・岸田吟香・末松靑萍・栗本鋤雲・矢野文雄・藤田茂吉・大内靑巒・末廣鐵腸・成島柳北等がそれであつた。

櫻痴と柳北とは當時の雙璧、互に相下らなかつた。櫻痴が新聞發達に貢獻した功績の一は社說欄を創めたことである。櫻痴が七年に「東京日々新聞」に入社して、公然署名して社說を載せた以前には、新聞紙上たゞ論說の欄があるばかり、多くは社外の論客の手になることとて、個々別々全然主義を異にしたものが並び載せられてゐる狀態であつた。櫻痴が一度「吾曹子云々」と叫んで一世を驚かしたのは新聞の價値を高めたものといはねばならぬ。柳北は朱學に通じ、將軍家定及び家茂の侍講となつたこともあつたが、また日新の學にも通じて居た。櫻痴は幕士の出で、安積艮齋の塾に學び、また英學をもよくした。二人は行跡の相似た上に、縱橫の奇才をも同じくした。たゞ櫻痴の文は達意を主とし、柳北のは洗煉を旨とした。櫻痴は平家物語風の文辭をよくし、柳北は

漢文の規矩の中に洒脱滑稽を寓するのであつた。柳北が「朝野新聞」を主宰するや、その雜報に得意の筆を揮つて奇警な諷刺を盡し、その末に漢詩を載せた。一度捨てられようとした漢詩は、かくしてこゝに新聞紙上重要なものゝ一となつた。

これ等時事問題に就いて論議する大新聞以外、所謂小新聞があつた。通俗を旨とし、漢字にはすべて振假名を附ける。早くから二三種あつたが、皆中途にして廢刊の厄に逢つた。然るに、七年に「讀賣新聞」、八年に「平假名繪入新聞」及び「かなよみ」等出でて、一般に歡迎せられた。中にも「繪入新聞」の喝采を博したのは、落合芳幾等の挿繪また前田香雪の興味ある雜報とによるのであつた。殊に、香雪が「金之助話」とて事實を基として脚色した小說から、はしなくも新聞小說の一體が創まつた。同紙上に西南の役に於ける薩人澤本彥右衛門が勇敢な最後を記載したのを、十一年新富座に於いて劇に脚色して演じたことや、また岸田吟香が臺灣の役に戰況を視察して其の記事を「東京日々」に連載したことや、或は十年の戰役に其の詳細な戰況を各紙上に揭載したことなどは、皆新聞紙を盛にしたもので、或は販路を廣め、或は文藝の趣味を豐富にした。而も、その文藝の趣味は未だ德川文學を繼承した戯作者をして筆を取らしめるより外はなかつた。明治文學は新聞紙によつて創まり、戯作者は新聞紙によつて復活した。その詳細の狀は

章を改めて記述しよう。

西洋雜誌に始まつた雜誌は、未だ新聞紙と同一樣の事を載するに過ぎなかつた。七年「明六雜誌」の出づるに及んで、始めて其の內容を具備するに至つた。この雜誌は森有禮を主として、西村茂樹・加藤弘之・中村正直・福澤諭吉・箕作秋坪・等、當時の思想界の先覺者を網羅して社員とした明六社の機關雜誌で、學術の講演會と相俟つて、新文明の宣傳を任とした。史學語學の研究雜誌「洋々社談」も出で、同人社からは「文學雜誌」が出で、やがて柳北の「花月雜誌」森春濤の「新文詩」の如きものも出でた。「花月雜誌」は柳北が萬丈の氣を吐くの地、縱橫の筆致を示した。諸家の寄稿の詩文に悉く朱墨を加へ、或はその選擇を嚴にした。かくては販路に障りあるべしと人の說けるに答ふるやう、「こは明治文壇の指南車を以て擬するもの、大家の作を載するは其の旨趣を實現せんためなるが、もし愚劣なるものを載せずば賣れずといはゞ、一部も賣れずともよし」と。その抱負の程を見るべきである。「柳橋新誌」を讀むもの、蓋し之を繙いて相照し見るの要があらう。「新文詩」が載する所の詩文の作家は皆名流、流派の別なく之を載せ、作家又之に列せざるを恥とする程であつた。漢詩はかくて再び勢をなし得た。新思想の鼓吹に忙はしい雜誌界も、かういふ趣味を顧みる餘裕を生じ、また「團々珍聞」の如き滑稽諷刺に專ら

る雜誌をも出すに至つた。かく新文明宣傳の功を全うした新聞雜誌に萠芽を發した明治文學は前述の漢詩文と續きものゝ人情小説とのみであつたらうか。なほ他に全然趣を異にする西洋文學の曙光をも認めることが出來た。

第二章　舊文學の殘影

新聞小說のつゞき物によつて再び手腕を揮ふことを得るまでは、前代から遺存してゐる戲作者は、手紙などの代筆によつて漸く其の日を送つてゐた。さなくば長篇の草雙紙の未完結のものを嗣出するを以て唯一の業とした。それも單に過去の好評の惰力によつて、正月と盆との二期に書肆を賑はすに過ぎなかつた。種員の『白縫譚』は明治十六年に至つて完結され、二世春水の『西國奇談』も八年に至つて完結された。仙果の「八犬傳犬ノ草紙」も六十篇にて完結したが、明治以前に已に五十編を出してゐたものであつた。かくの如き補綴をのみ事としたのは、作家その人に馬琴や種彥の名手がないにもよるが、猶時勢の然らしめる所といはねばならぬ。かゝる輩にとつては新聞の小說は此の上もない擅場であつた。日々その紙面を異にする性質上、また讀者の興味を繫ぐ手段として、局面の變化を多からしめることを要した。草雙紙は實にこれを得意とするものである。彼等が進んで筆を鼓したのは、たゞ衣食の資を得ようとするのではなかつた。故に、一度「東京日々」の條野採菊・「平假名繪入」の三世種彥即ち高畠藍泉・二世春

水郎ち染崎延房、或は「團々珍聞」の梅亭金鵞の作を見れば、いかに御家騷動の題村によつて、その脚色を複雜にし、その趣向を錯綜せしめたかを知ることが出來る。然しながら、さういふ草雙紙系のもの〻外に中本の趣を傳へた他の優れた作者もあつた。假名垣魯文なぞもそれである。また新聞小說ではないが「復古夢物語」「近世櫻田新聞」「春雨文庫」等を著はした實錄體の一派もあつた。これらは維新前後の事件を脚色したもので、もと婦女童幼の娛樂を目的とする所から、また草雙紙の趣向を假りるのであつた。

魯文は實に戲作者の殿將で、その閱歷を顧ると、同時に當時の戲作者の典型をも明かにすることが出來る。文政十二年に江戶の貧しい魚屋に生れた魯文は、幼くして或諸藩御用達の家に丁稚の身となつた。そのいろはを習ひ覺えるや否や、拾ひ讀みに京山の「頼朝評判記」を讀んで、その筋を母に語り聞かせた彼は、奉公の後にも一九・三馬の書を手に放たず、僅かの小遣錢を得ると必ず合卷物を購つた。いつか戲作者を以て身を立てようと志し、私にその道の修養に力めた。京窓露繭や米羅坊等一に俳諧を學び、千穐庵諸持に狂歌を學び、やがてこれ等の勸に從つて狂言作者で戲作者を兼ねた花笠魯介の門に入り、英魯文と號した。時は天保十年、その處女作を「政談青砥碑」といふ。之より戲作者を氣取り、三馬・京傳・の蹤をふまうとて遊里に出入し、常盤津清元の稽古所に潜り込

みはては主人の戒をも意にとめで、出奔するに至つた。かくて諸所を流浪し、漸くに江戸に歸り、『亞米利加口說ヤンレ節』等の糊附本に糊口の資を得、また美音を自慢に讀賣して歩いた。それがはからずも世の喝采を博し、合卷物の注文をも受けるやうになつた。湯島の寓居に談笑諷諫滑稽道場御誂案文認所江戸作者鈍亭魯文の看板を掲げたといふのは、その頃のことである。かくて、彼は漸くその名を知られるにつれて、常に戲作者狂言作者と交り、その會合に出入して、三題噺・與畫合・に浮身を窶すと共に、また家にあつて雜書に目をさらして學ぶ所があつた。慶應三年に福澤諭吉の『世界國盡』を滑稽化して、『苦界文盡』を著はしたが、明治に入つては『窮理圖解』によつて『胡瓜圖解』を作つた。また『安愚樂（アグラ）鍋』といふのは、半解の文明開化を口にする手合が、牛屋の店に鍋を圍みてのをかしさを諷したものである。然しながら、彼の傑作は『西洋膝栗毛』にとゞめをさすべきであらう。

『西洋膝栗毛』はかの『西洋事情』を基とし、當時佛蘭西博覽會見物から歸つた富田砂筵の談話を聞き、また岡丈紀の飜譯によつて地理人情の敍述を加へ、彌次・北八・の三世の孫等が英國渡航の滑稽を以て一篇の趣向をなした。しかしながら、かの一九の『膝栗毛』の如く、たゞ酒落のめし、酒落散らすそれとはやゝ趣を異にして、中に微かながらも諷刺

の動くもののあることが出來る。　西洋心醉の徒が朧げな知識を以て文明人と自任して舊弊を罵るをかしさ、歐洲文物の燦たる狀態に眩惑されて呆然自失し、やがて盲從阿附する狼狽の愚狀、渾然たる維新後の時世がさながらに浮動してゐる趣がある。恐らくは、魯文はこれを以て新時代の來れるをも知らで、なほ舊習に囚へられた徒を嘲つたものであらうが、その人はすでに全然舊趣味に生きてゐるもの、故に滑稽も卑陋にして一九輩の後を襲ふに足りるのみであつた。

六七年の頃「横濱毎日新聞」の雜報記者として筆を取つたが、八年「假名讀賣新聞」を創刊して、つねに輕妙な才筆を以て讀者を喜ばせた。　更に紙上に「猫々奇聞」とて藝妓の噂を載せてから、大いにもてはやされた。　十一年「いろは新聞」を創め、十九年には「今日新聞」の主筆となつて、續き物を作つた。　後「東京繪入新聞」に轉じたが、間もなく老を養はんために、名納會を催して文壇を退いた。　これは二十三年のことである。　後四年で死んだが、遺骸を菩提寺に送つて見ると、すでに石碑の以前から建てられてあつたのを發見した。　彼は飽くまでも戲作者氣質を發揮したものといふべきであらう。　魯文の後にはまた中本の趣を傳へるものがない。　南新二の作の如き、到底比するに足らぬ。　魯文の弟子齋藤綠雨のみが、その長所を取つたものと思はれる。

魯文を以て小說界に於ける舊時代趣味の殿將なりとすれば、古河默阿彌は脚本界に於ける舊思想を繼承した作者の殿將といはれよう。默阿彌は五代鶴屋南北の門人、通稱を吉村新七といふ。天保六年河原崎座に作者見習となり、九年に勝諺藏の名を以て番附に載せられた。十二年柴晉輔と改名、十四年立作者となつて二代目河竹新七と名乘つた。その優秀な技倆は早くから認められたが、名聲の廣く世に布くに至つたのは、名優市川小團治と相提携してからのことである。小團治は默阿彌の才能に服して、その脚本を仕活かさうとし、默阿彌は小團治の藝風を會得して、またその體格に適したものを作り出さうとした。兩々相俟つてよく看客を醉はしめるものがあつた。小團治の歿後、團十郎のためにも、或は左團次のためにも、その名をなさしめた。明治十四年『島衛月白浪』(シマチドリツキノシラナミ)を脚色して、上場した時、默阿彌と改名して退隱を披露した。然しながら、なほ劇界の事情は其の沈默を許さず、死に至るまで五十八種の著述をなさしめた。その作前後合はせて二百種の多きに上つてゐる。

　その傑作の尤にして、而もその特色を最もよく發揮した代表の作は、『村井長庵巧破傘』一に『勸善懲惡覗機關』(ノゾキカラクリ)と題するものがそれであつた。文久二年小團治によつて守田座に於いて上演せられた。江戸の町醫者村井長庵といふ惡漢が質商伊勢屋五兵衞の

養子千太郎の吉原の遊女小夜衣と深い契のあるを知り、之を欺いて金を奪ひ、また妹婿を殺して其の娘の身の代を盗み、その罪をば浪人藤懸道十郎に負はする樣に仕組み、遂に藤懸をして獄死せしめる。また娘を尋ねて來た妹をば、流石に自ら手を下しかねて友人の惡漢三次に託して殺害させる。千太郎は其の放埒が露はれて勘當せられようとする時、忠義の番頭久八が已の罪と稱し逐はれて紙屑屋となる。そのうち圖らずも藤懸妻子が貧苦の間にあるに邂逅する、これは父が舊恩を受けた人であつた。また貝阪忠藏といつて藤懸の家來筋のものも來會はせ、長庵の惡事を知つてゐる由にて奉行所に出訴する。久八は千太郎と小夜衣とが心中しようとする所に行き逢ひ、その刀を奪はうとして誤つて之を刺し殺し、驚いて奉行所に自首する。偶〻三次は長庵の妹を殺してから良心の呵責にあひ、つひに堪へかねてまた奉行所に自首する。この時長庵は既に捕縛されてゐたが、强情にて罪に伏せず、久八の忠義の由を聞くに及んで良心覺醒し、その罪の次第を白狀する。藤懸の妻子は仇討を願つたが、法律の許さゞる所とあつて聽かれず、奉行の情を以て斬首の折の繩取を許される。久八は罪無く、また千太郎と兄弟なることが明かになり、伊勢屋の家督を嗣ぐに至る。

こゝに梗概をしるしたのは、これによつて默阿彌のすべての作を髣髴せしめようが

ためである。作の別名が勸善懲惡を以て題する如く、實に勸懲の趣旨を以て作られたものである。これは舊時代の劇が悉く取る所の脚色であつた。善人榮え惡人亡びるは又陳套の趣向のみ。默阿彌をして其の名をなさしめるに當らない。しかも其の作が大いに世に喝釆せられたのは必ず據つて來る所があらう。默阿彌にあつては、その勸懲は他の作家がなす如き理想のものではない。彼にあつては實際社會に見る所の事實であつた。彼が觀察する所の世相には、その理が明白に現はれてゐた。他の作家がたゞ耳から口にするが如きではなく、かれ自ら長い閲歷の後に悟入したものであつた。加ふるに、その人となりや謹嚴篤實、義理を重んじ、人情を缺かず、かの放埒な狂言作者中には稀に見る所であつた。故に、その勸懲も他の作の如く、形骸を殘すものではなくて、生々として活躍するものであつた。安政三年「鼠小紋東君新形」とて義賊鼠小僧治郎吉を主人公とした作があつた。これを手はじめに、幾多の盜賊物を脚色して、はては白波作者の名を受けるに至つたが、その白波物は皆凶惡無道の徒が折に觸れて翻然悟る所あつて改心し、思はずも人をして性は善と叫ばしめる。

　默阿彌が結構布置の才は、殆ど天稟に出づるといはれた。その才は觀察の精緻を以てなほ養はれた。彼は寒中綿頭巾に面を覆つて兩國邊を徘徊し、到る處に奇警な眼を

開いた。その中流の人情世態に通曉したことが從來の劇に於いて免れ難い荒唐無稽から脫せしめた。その時代物にも不自然の跡は殆ど見ることが出來ぬ、まして得意の生世話物に至つては、世相人情をさながらに活躍せしめる所がある。げにその修練によつて一層堂に入つた技倆は些々たる一小事實を捉へても直ちに眼前に一大活動を描き成すのであつた。自らいへるやう、昔からこれはよき筋と思ふと、机に向ひさへすれば、自然に想が湧くのであると。かの『霜夜鐘十字辻筮』に於ける脚色は、一浪人の貧しげなものが、乳呑子を懷に抱へながら筆賣りに來て、妻に死に別れた憐れな身の上を語るのを聞いて稿を起したといふこと。『勸善懲惡孝子譽』は、横濱で一四人が子を酷く叱りつけるのを見て趣向を凝したといはれてゐる。

默阿彌は決して他の筋を取らなかつた。いはく「それより優れば彼を辱しめ、劣れば我が辱となる」と。されど、また廣く材料を自己の觀察以外、書籍或は講釋等にも求めた。『村井長庵』は『大岡政談』に取り『三人吉三廓初買』は梅暮里谷峨の『契情買二筋道』の文里に據り『江戸櫻清水淸玄』は講釋種なる黑手組助六を加味したものであつた。

默阿彌の作は『狂言百種』の中に十一種載せられて居る。皆得意の世話物である。要するに、その趣味は前時代の舊いものである、たとひ舊劇の刷新をば力めたもの丶、明治

の新時代の鑑賞を得ようとは思はれなかつた。しかし、その脚色の才に至つては、永く範を垂るべきものである。

舊文學はたゞに小說と脚本とに止らぬ。和歌もあり、俳句もあり、漢詩もあり、漢文もあつた。さりながら、皆德川時代の作家の餘瀝を舐るに過ぎなかつた。今こゝに之を敍するよりは、寧ろやがて起るべき各文學革新に繫いで見るのが、却て便宜のよいことと思はれる。機を得て、更に揭げることとしよう。

第三章　新文學の曙光

明治十年の西南戰爭は、我が政治界また思想界に於いて、重要なる影響を與へたものであつた。雨降つて地固まるといふが、この事變があつて、ともすれば再び結ばうとする封建の夢は全く覺めはてた。新文明の下に立つて、明治新政府の勢力も承認せられた。新舊思想の間に首鼠兩端を學んだ民衆の歸嚮も定まつた。かくして歐化の熱は高まつて來た。さきに物質的文明の輸入にのみ孜々として力めたものは、更に進んで彼のすべてを移植せずば止まざらんとする。政體も、制度も、はては言語迄も彼に據らうとする傾向を生じた。民權自由の聲が土佐の一角に於いて板垣退助の口から出るや否、これに共鳴せる者が少くなかつた。これ等を主唱者として、急進なる政治論は頻りに喧傳せられた。中井兆民の譯したルツソーの『民約論』は彼等が無二の寶典となつた。さきの文明開化の呼號は、いつしか自由民權と代つたのである。文學界の中心も十年を中心として、この氣運と共に大なる轉廻を行つた。採菊も魯文も以前程の名聲を博することが出來なくなつた。草雙紙風の續き物のみが新聞紙上に威を專にする

ことが出來なくなつた。「鬼啾々」「自由の凱歌」「西洋血潮の荒波」等が、「繪入自由」「繪入朝野」「自由の燈」などの新聞雜誌に連載され始めた。これ等は佛蘭西革命か、さなくば露西亞虛無黨の陰謀などの血腥き記事で、皆西洋小說の飜譯または飜案であつた。別に脚色の複雜なこともなく、趣向の奇拔なこともないのに、たゞ題材に對する興味のみによつて、新聞の販路も廣まつたといふ。それほどに時勢は變はり行くのであつた。

十七年藤田鳴鶴は『文明東漸史』を著はした。その名の示す如く、西洋文明が幕末より我が國に輸入し來つた終始を敍したものであるが、一種の脚色を構へて、之に貢獻した志士の傳を述べた點が、單なる文明史論ともいひ難い。さりとて政治小說といふ程でもない、たゞ小說的趣向を加味したものともいはうか。これを先驅として漸次政治小說の體を具するものが出で始めた。その主なるものを擧げると、柴東海散士の「佳人之奇遇」矢野龍溪の「經國美談」末廣鐵腸の「雪中梅」須藤南翠の『綠簑談』「新粧の佳人」などである。就中、靑年の讀者に大いに歡ばれたのは「經國美談」であつた。これは希臘聯邦の一なるシェーブスが、國步艱難の中に處して、よく他の强邦を壓し、つひに覇を唱ふるに至つた顚末を敍したものである。愛國の士エパミノンダスが同志の士ペロピグスと共に、一身を犧牲に供してやまぬ決心、また幾たび蹉躓しても屈せず言論と武力とによつ

て強きを挫ぐ努力は、殊に之を讀むものをして、顧みて我が國の現狀を見、國家を泰山の安きに置くは我が任のみと、自らエパミノングスを以て擬し、ペロビダスを以て擬せしめた。蓋し、『經國美談』の著者は、讀者をしてその念を抱かしめることを竊に期したのであらう。

東海散士の『佳人の奇遇』は近代世界歴史を背景にして、亡國の民東海の遊子が諸國を漫遊して、北米の獨立を見、自由の狀を見て、感慨禁ぜず私に再擧を計畫するに至ることを敍した。しかも趣向の複雜を求めて、明・西班牙・波蘭・土耳其・埃及・等の亡國の志士を出入せしめ、また紅一點愛蘭の貴夫人幽蘭女史を配した。東海散士その人は會津の遺臣で亡國の感を抱けるもののともいはう。書中に敍する所が直に散士の感慨を寓したものと見得ることはまた論をまたぬ。これ等の書は多く漢文調で、なほ朗々唱すべき筆致も乏しく無い。併しその他の書はつひに此の二書には及ばなかつた。

當時政治小說を通じて注意せられるのは、主人公の主人公として立つ所以は、その行動によるのではなくて、その言論によることであつた。或は同志と共に議論風發、或は公會幾千の面前に滔々の辯、これによつて讀者の血を躍らしめるのである。而も何んぞ知らん、それは主人公の聲ではなくて、まことは作者その人の政見であらうとは。讀者

はもとより藝術を解する暇なき人々であつた、その眼中にはたゞ政治があるばかりであつた。故に、この時の政治小說とは、畢竟かういふ意味に於いて、始めて小說たることを知らねばならぬ。かのルツソーの名もロマンチック文學の唱道せられた時、自然主義文學の紹介せられた時には、いつも新しい藝術の開祖としてのみ示された。然しながら、この頃に於いては『民約論』の譯者たる兆民に、果して文學者として說く暇があつたらうか。彼に『維氏美學』の譯はあつても、兩者の間は殆ど沒交渉に終つてゐる。されば政治小說はたゞ歷史的意義に於いてのみ一顧の價値がある、作そのものゝ價値の如きは深く之を窮めずともよいのである。

この時西洋小說の飜譯も世に出ではじめた。しかし、それも果して小說として愛賞しての飜譯であらうか。否、當時の飜譯者の眼中には、作の文學的價値の如きは深く考へられなかつた。たゞ主人公が政治家であればよい、その內容が政治に關するものであればよい、歐米の政治界の狀況・政治家・殊に野にあつて叫ぶ志士の描寫があれば更によかつた。もしそれ、革命の際腥風の間に身を挺して自由のために戰ふ如きものであれば、その作の拙陋なのをも避ける暇がなかつた。かういふ渴望を癒すには英國のリットン・ヂスレリーの政治小說こそ恰好のものであつた。さてはこれ等を取つて飜譯す

るものは概ね政論家か新聞記者かであつた。即ち純文學としての飜譯は未だ出でなくて、これも政治小說と同樣政論の副產物であつた。飜譯の動機は如何あらうと、兎に角に我が國に移植せられた上は影響なくてはならぬ。その文辭は蕪雜であつても、文體は粗大な漢文直譯であつても、原作の味も色も匂も失はれてゐても、かの淺薄な草雙紙や卑陋な中本にまさることは萬々であつた。わが新文學の曙光は、かくの如くにして放たれたともいはう。これよりさき、西洋の書籍の飜譯せられ紹介せられたものは甚だ多くあつたが、かういふ文學書の飜譯せられる氣運に向つたのは、また國民の知識の進步を證するものとも見られる。

十二年に『花柳春話』が『アーネスト・マルトラバース』の飜譯として世に公にせられた。リットンの原著で、織田純一郞の譯であつた。漢文直譯體の文章で、巧妙といふことは出來ないが、始めてかゝる書に接した讀書界は、爭つて之を稱贊した。この書は明治に於ける飜譯小說の始祖として記憶せねばならぬ。これよりさき、六年の頃渡邊溫と云ふ人の『通俗伊蘇普物語』はあれども、それは寧ろ童幼のための訓話に過ぎなかつたから、これを以て第一者とすべきであらう。

それに踵いで陸續公にせられた飜譯小說は、關直彥にデスレリーの原作『春鶯囀』があ

り、坪内雄藏にリツトンの原作『慨世士傳』があり、藤田鳴鶴に同じくリツトンの原作『繫思談』があつた。井上勤にも『ジュール、ヴェルヌの原作『月世界旅行』がある。その他、牛山鶴堂の『梅蕾餘薫』尾崎學堂の『經世偉勳』服部誠一の『二十世紀』等があつた。

この種の飜譯小說は二十一年に公にせられた『谷間の姬百合』で終結した。原作はベルサ・クレーの『ドラ・ソルン』で、譯者は政客末松靑萍であつた。從來譯されたものは、その原作の多くは歷史また政治、時に科學を主としたもので、事件の推移によつて興を繫ぐに過ぎなかつたが、この著に至つては人情の描寫・心理の解剖・の見るに足るものがあつた。しかし、二十一年といへば既に新文學の革新があつて後の作であるから、その選擇が從來のに異なる所のあるのも當然である。こゝにはたゞ政客の飜譯小說として、年代をしばらく不問に附していふのである。その序にいふ、「姬百合』を作る所以は、徒に花月を嘲弄し讀者の眼を娛まさんとするにあらず、彼の成人夫妻の事歷、以て門葉素訓甚だ相懸隔するもの漫に伉儷の約を結ぶは、終生の不幸を免れざることを示すなり。二女遭遇の異同は、以て處女躬行の柳綠琉璃楊に供するなり。凡そ如此の類は、皆世の風教に關するもの云々」と。されば、この譯者は原作を解するに敎訓を以てしたので、毫も純文學の見地に立つものではなかつた。或は知らず、これも歐化主義の反動時代に

出されたので、かう見られたのであらうか。

劇の飜譯は、十六年に坪内雄藏のシェークスピヤの『ジュリヤス・シーザー』の譯、『自由の太刀餘波の切味』『該撒奇談』があつた。沙翁の他の作を選ばないで之を取つたのは、比較的平明であつて當時の人に解されるからであらうが、また政治小說の流行と其の傾向を一にしたものである。詩にはロングフェローなどの譯が試みられた『新體詩鈔』がある。これは十五年に刊行された。外山、山・矢田部良吉・井上哲次郎・の合著で、詩十九篇を錄してゐる。中十四篇は英詩の譯であつた。ロングフェローの外、テニスン・ブルームフィールド、カムペル・グレー・シェークスピヤ・キングスレー等の原作に係る。創作は僅かに五篇に過ぎないが、よく範を英詩に取つて、その風格を模倣してゐる。井上哲次郎は其の序に於いて「漢詩は支那の詩、和歌は過去の文學に過ぎず。新日本の國民がその情思を敍するには、現代語を以て西洋の詩形を取るべきである」といつてゐる。されば、その詩形は七五の句を一行とし、一定の數行を以て一節とし、數節を聯ねて一篇を成すのであつた。或は長歌、或は古詩とも匹敵すべく、短歌・發句・の短きとは雲泥の差があつた。詠ずる所もまた人生を敍し哲理を寓するものもあつた。しかし、これも新體詩といふ一體を創めた歷史的功績以外には作としての價値を認めることが出來ない。この『詩鈔』はひとり詩界

の革新ばかりでなく、一般文學界に亙つての革新であるべきに、なほ文學の眞の意義には觸れることなく、たゞ形について云々するのみであつた爲に、文壇の革新をば遂げることが出來なかつた。それは實に『小說神髓』の出づるを待つて始めて期すべきであつた。

第二期　國會開設前後

第一章　逍遙と四迷

『慨世士傳』の序に、坪内逍遙はかういふことを書いた。この飜譯は、一は小說稗史の主旨のあるところを知らしめる爲である、かの地の小說は人情を描き出すことを專にして、勸懲といふことは賓位に置くのであると。また『八犬傳』を評しては、かの八犬士は皆道德の權化、人情を主とする小說の主人公としては到底不適當であるといひ、更に春水が精細の筆の能く人情の底を穿つことを推讃した。是等の言は未だその小說論の片鱗で、これを堂々と論じて寫實の主義を鼓吹したのが『小說神髓』である。この書の刊行せられたのは明治十八年五月、この時を以て眞の意味に於ける明治文學の幕は開かれた。書は上下二卷の小冊子、量に於いてこそ少いが、その影響の大なる、たゞに小說壇上の革新にとゞまらず、延いては文壇のすべてを覺醒する曉鐘であつた。『新體詩抄』の、時を以てすれば三年を先つとはいへ、その結果はわづかに詩界の一波をあげるに止るが如きものとは、もとより同日の談ではない。

著者はまづ作者と讀者とを情眠から喚び覺さうとした。小說を以て教育の一方便のやうにいひながら、實際には殺伐慘酷、また猥雜の物語をのみ愛で喜び、他の苦しい筋は目にとめぬが當時の讀者の態度であつた。されば、一面に李笠翁の語を金科玉條として意を勸懲に發するを小說の主眼と心得、道德の鑄型のうちに脚色を凝さうとしながらも時好に媚びて殘忍の稗史を編み猥雜の情史を綴るのが、流行の大與論の奴隷たる當時の戲作者の態度であつた。この時に當つて、『小說神髓』の著書は或は小說の變遷・種類・またその裨益を說き、或は脚色の法則・敍事法・を敍し、主人公の設置の論にも及んでゐるが、最も力を盡したのは、小說の主體は人情の小說・模寫の小說・に存する理を闡明するにあつた。これが同時に勸懲主義や政治小說の缺陷の打破となつた。小說の主腦は人情なり、世態風俗これに次ぐとは第一の宣言。されば、小說家は人情の奧を穿ち心の中の內幕を洩す所なく周密精到に描き出さねばならぬ。また小說家は心理學者の如きものである。己が意匠を以て强ひて人情に悖戾した否心理學の理に戾つた人物を作れば既に人間世界のものでない、心理を重んじ、篇中の人物を活世界の人と見なして、その感情を寫し出すにおのが意匠を以て善惡邪正を豫め作り設けることなく、唯傍觀して有りのまゝに模寫すべきである。小說は常に模擬を以て其の全體の根據と

し人情を模擬し、世態を模擬し、ひたすら模擬する所のものをば眞に逼らしめようと力めるものである。かくの如き客觀的描寫をなした小說には、求めずして誹刺諷誡の法が備はり、暗に人を敎化するの力がある。もしこの意を以て現世の情態を寫し出したならば、現世の風潮を示し時好の赴く所を知らしめ、輿情の傾斜を察せしむる一活歷史をなすのである。かの奬誡の型に囚へられる小說の如きは、所詮この理を知らぬ故であると。

これ等の論は今日より見れば不備の點もあるべき筈、寫實主義の唱道に忙しくして他の主義の特長を顧みざる點もあらう。さばれ當時にあつては東西小說の比較研究を經て詩學上から論述した我國未發の卓見であつた。まして我が小說を改良進步せしめ、竟には歐洲のノベルを凌駕し繪畫音樂詩歌と共に美術の壇頭に煥然たる光を放たしめようとする努力から成つたものである。その唱道はいかで空しからう。果然、寫實主義は一世を風靡するに至つた。四迷の「浮雲」もこれから出で、後の硯友社の活躍もまたこれに發した。殊に硯友社同人が徒に文學を愛玩するにあらで、一身をその研鑽に捧げるが如き態度にあつたのは、實にこれに動かされたものであつた。

さうはいふものゝ、この論も「神髓」の縷說のみでは、まださまでの效果を舉げることは

出來なかつたらう。 逍遙はまたその主義を創作に試みて、寫實小說の範を世に示した。その年の六月に第一冊を公にした「一讀三歎當世書生氣質」といふのが卽ちそれである。翌年一月までに、淸朝四號刷半紙二十枚ほどの小冊子として、每週一冊位づゝ刊行せられたが、この書の發行は如何ばかり世人を驚かした事であらうか。 特に堂々たる文學士と肩書した春の屋おぼろの署名は、從來世人が賤しいものと見なして來た戲作と照し合せて、如何に奇異の感を與へたことであらう。 更に、その內容を繙いて、淺薄な政治小說とも異なり、陳腐な人情本の亞流とも異なることの著しいのに驚いたであらう。敎育ある人の手によつて敎育ある士の翫賞すべき書は作られたのである。 人々が歡迎したのも道理である。 東京のとある一英學塾の書生の狀態を敍するのが主であつて、またその氣質の異なるに隨つて開拓するところの運命も亦異なることを示すのであつた。 著者は更に人間の習癖行爲の變遷、たとへば輕躁の人も年を經て沈着になり、放蕩のものも老實のものとなることを敍述しようとした。 然しながら、また他の一面には維新の際に離散した父子兄妹の邂逅するといふ顚末を以て興味を多からしめようとした。 で、その脚色に忙はしくて、筆が遂に企圖を全うすることが出來なかつたかの觀がないでもない。

そはとまれ逍遙のこの著は材を自己の見聞する所に取り、人物もまた一々に現實のものを寫してあるので、當代書生の狀態はその委曲を盡し得て『神髓』の所謂一活歷史にして、當代の風潮時好を示すものであつた。さばれ『神髓』に說く所のすべては、未だ實現せらるゝに至らなかつた。性格の描寫の如きも、その名の示すやうに氣質は明かに描き出されたらうが、特殊の性情に至つては未だしい所が多く、また奇遇といふやうな脚色が事件の變化に重きを置き過ぎたことを語つてゐる。文章が馬琴を模倣した七五調、わざとらしい三馬まがひの滑稽戲作の態度はつひに全然脫することが出來なかつた。さりながら、世評はその缺陷を問はないで、或は實利の書にあらざるを難じ、或は文學士たる者がかゝる書を著はすことを難じ、或は著者の實歷なりとして責めたが、高田半峯が情理を盡した批評を得て、その眞價は世に認められた。寫實主義を普及せしめた點、小說は紳士の筆にして恥づるなき事業たるを敎へた點に於いて、この作は永久に生くべきものである。

逍遙はまた矢つぎ早やに『妹と背鏡』を出し、『內地雜居未來の夢』を出した。後者は內地雜居も已に許され國會も已に開かれた體に描き出して、諷する所があつた。前者は婚姻に關する事件を取つて漸く鍛錬せられた寫實の筆を揮つた。然し、これ等も未だ

「神髓」に說くところの理想を實現することが出來たとはいへない。 それが實現は「浮雲」の刊行をまつて始めて期待すべきであつた。 著者は長谷川辰之助で、號を二葉亭四迷といつた。「神髓」が世に出でて新しい文學思想が人々に解せられ、模寫小說、寫實主義の名が人の口の端に上る時、彼は外國語學校に於いて露西亞語を學び、教授グレー氏の感化をうけて、ゴンチャローフ・ゴーゴリ・ドストエフスキー・ベリンスキー・ヤドブロリューボフ・ヘルチェン等の論集を讀んでゐたが、文壇の風雲を見て意大いに動き、或はゴーゴリの飜譯、或はベリンスキーの美論の飜譯、さてはツルゲネフの『父と子』の飜譯をなし、更に進んで、ツルゲネフ等の取るところの態度を當時の社會に試みようとした。『浮雲』はその結果であつたが第一編を逍遙と合作の名目の下に出した。 時は明治二十年である。 翌年第二編、翌々年第三編を出して完結した。

叔母お政の家に寄寓する官吏内海文三は、學問はあれど世才に乏しく、之が爲に免職の身となる。 お政はさきには娘お勢の聟にもと思つて優待したが、急に打つて變つて冷遇する。 たゞ文三の心はお勢に繫がれて、耐へ忍んでゐる。 お勢は明治の新教育を受けた者で、事毎にお政と衝突してゐるが、殊に母の文三に對する仕向が氣に入らないで、文三を庇護し勝ちである。 さりとて文三に心あつての業でもない、また文三の友人

で文三とは全然性格を異にして官界に羽振のよい本田に許すのでもない。文三はそれを曲解してひとり煩悶する。

『浮雲』の敍する所はたゞこれだけである。兄妹父子の奇遇があるのでもない。社會の風俗を廣く寫してゐるのでもない。事件は園田一家に起つた日常の小波瀾、人はわづかに四五人の小人數。しかも新舊兩思想の衝突、お政とお勢とによつて代表された兩思想の衝突が、當時にあつては破天荒と思はれる程の深さを以て寫し出された。お勢の性格描寫の如きも『神髓』に於いて極言せられて『書生氣質』に於いて實現せられなかつたものを、殆ど遺憾なく成し得てゐる。

新舊兩思想の衝突は、魯文等もすでに捉へ得た題目であつた。されど、それとこれとは雲泥も啻ならぬ差違がある。その差は主として露西亞文學の影響によつて然りといふべきであらう。切實に人生を見、深みと强みとを有し、殆ど後の自然主義と軌を同じくする態度は、或は當時の文壇より二十年を先つてゐるとも見るべきであらう。實に當時の最も進んだ藝術論といへども、なほ娛樂本位にとゞまり、その描寫も人情といふ外に出でなかつた際に、『浮雲』の著者は文學の基礎は人生にありと見て、人々が徒らに文體の末に焦心する時に、ダーヴヰンの『種源論』を耽讀して深い冥想に沈んで居たの

である。

さうはいふものゝ、これにも亦時勢の影は爭ふことが出來ぬ。森嚴な態度を有しながらも筆の上には所々になほ輕浮な辭を弄した跡が見られる。これは、作者が江戸に生れて江戸の教養を受けたことが、累を成して居るのであらう。純な客觀的描寫を欲しながら說明に過ぎるのも一つの缺點、事情もあらうが同一の態度を以て終始することが出來なかつたのもまた一つの缺點。缺點は尠くないが、兎に角明治の小說壇を通じての有數の大作である。さりながら、「父と子」の飜譯も「虛無黨形氣」と題する必要があつた當時には、この作の眞價も認められずして、人はたゞ逍遙と合作の名を以て持囃すに過ぎなかつた。その文體の他に異なるの甚しきに注意を拂ふに過ぎなかつた。

內容を新にした「浮雲」は形式に於いても全く戲作のそれと異ならしめることを要した。言文一致體を以て敍したことがそれである。これも、ゴンチャローンの文章を學んで得なかつたものと著者自らがいへる如く、露西亞の文章から思ひ附いたのであるが、また速記術が行はれて若林玵藏が圓朝の「牡丹燈籠」を速記して出版したのが、自ら言文一致體を採る一因となつた。たゞ圓朝のは「でござります」といふ敬語を以てせるのを、「浮雲」には「だ」といふ調を以てした。そのだ調で全文を行り、また會話と地の文との行

を改めて書いたといふことも目新しい試みであつた。この時他の方面から、ですの調の言文一致體が起つた。山田美妙齋の試みであつた。四迷と美妙とはもと朋友の間柄、しかもこの言文一致の創始については、その間に何等の交渉があつての事ではない、一に時勢の然らしめた所であつた。そのです調はやがて紅葉のである調と移り行く。されど、大膽な試作の先驅は『浮雲』にあつたと見るべきであらう。たゞ世に發表した點は、美妙齋の方が一年先であつた。

四迷と逍遙との二人の提携は、つひに文壇をば寫實主義の旗下に席卷するに至つた。逍遙が二十二年に發表した短篇小說「細君」の如きも、寫實小說の好箇たる模範を示すものであつた。『神髓』がいふ所の意見は、こゝに至つて自己の手によつて實現せられたのである。しかもその穩健な思想は後の家庭小說のために蒙を啓いたものともいふべきである。

第二章　東西思想の交錯

文學思想の革新は成つた。新文學は愈〻その需ふ所を知ることが出來た。さりながら、これも要するに西洋思想の模倣に過ぎなかつた。「小説神髓」はすべて彼の藝術論を我に擬せようとするものであつた。「浮雲」の態度も概していへば露西亞文學の模倣であつた。かくして西洋心醉の狀態は今もなほ依然として息まない。然しながら、今は昨に於けるやうに、徒らに皮相の潤に彷徨するものではなかつた。かの文明の眞相を解し、その核心を把持しようとする趨向を生ずるに至つた。德富蘇峰は肥後の國から「新日本の青年」の草稿を懷にして來り、大いに青年の爲に呼號するところがあつた。嗟呼我黨の好青年よ、好男兒よ、若し卿の一歩を轉じて泰西の自活社會に入らば、願くは卿の二歩を轉じて泰西の道德社會に入れ、若し物質的の文明を望まば、更に眼を擧げて精神的の文明を望め、泰西の文明を我邦に扶植せんと欲するものは、必ず先づその眞面目を看破せざる可らず、その眞面目を看破するものは、必ずまづ精神的の文明に眼孔を注がざる可らずと。かくて新青年の覺悟については、青年の大敵は青年が恆に徹愛する

所の老人輩である。新日本は決してこれ等の徒に委ぬべきものではない。われ等はまづ歴史習慣の羈絆から脱して、獨立自信以て新日本を精神的文明の王國となすべきであると。かくて蘇峯は民友社を組織して、雜誌「國民の友」を發刊した。時に明治二十年。更にまた「國民新聞」を起して、二者相俟つて、この精神的歐化主義と藩閥政府に對抗する平民主義とを宣傳した。そして歐洲文明の眞相を會得するには文學によるを便とするので、民友社は一面には放膽の筆を取り、一種の民友社調と名づくべき文體を以て、縱横に社會百般の事相を論議し批判する外に、西洋文學の紹介にも力を盡した。これが文壇の氣運と相合して新文學の勃興に貢獻することは多大であつた。「國民の友」紙上に文學欄を設けたことや、春秋二期の文學附録に新進作家の作を載せたことは、重なる一二の例に過ぎぬ。試に蘇峯を主筆とせる社中を見れば、山路愛山・竹越三叉・宮崎湖處子・矢崎嵯峨の家・德富蘆花・國木田獨歩等の錚々たる士を網羅し、殊に客員としては森鷗外・森田思軒・二葉亭四迷・山田美妙・内田不知庵・石橋忍月等の當時種々の方面に於いて名聲錚々たる者を集めてゐた。されば、思想界・文學界に活動する雄々しさ、「柵草紙」が出づるまでは、獨り天下の覇を稱するものであつた。

思軒の飜譯壇に於ける名聲も「國民の友」によつて獲得することが出來た。思軒は最

初ヂッケンスや、ジュールヴェルヌ・等をも譯したが、ユーゴーの作『瞽使者』『探偵ユーベル』を出すに及んで、唯一の佛文學紹介者として推稱せられた。もとより思軒のは英譯よりした重譯、また文章も少なからぬ苦心の餘に成るとはいへ漢文調を多く取り入れて漢七歐三の評もあつた如く、到底流暢典雅な佛文學の情趣をうつし出すことは出來なかつた。然しながら佛文學の片影はかくして世に示された。事は二十年から二十二年に至る二三年間である。

露西亞文學の面影も「國民の友」に於いて見ることが出來た。四迷が二十一年に出したツルゲネフの短篇小說の飜譯「あひびき」がそれである。創作以上の創作と稱せられたほどの靈妙な譯筆、よく使ひこなした俗語の間に一道の新しさが動いて、如何にも若い人々の胸を躍らしむるものがある。その郊外の景は直に武藏野の地にあるかと思はれる位に我にうつしてゐる。獨步の如きもこれによつて始めて自然を觀る眼を開くことを得たといつてゐる。譯者は同じ年に雜誌「都の花」に『めぐりあひ』を載せた。これもまたツルゲネフの作で、入神の筆、清新の調、よく飜譯界の氣運を動かすに足りるものがあつた。

獨逸文學もまた「國民の友」に於いて紹介せられた。その衝に當つたのは森鷗外であ

る。鷗外の活動の始まつた二十一年に、東京大學に獨逸文學科が創設せられた。當時は未だ獨逸文學專攻のものはなかつたが、鷗外は醫者であつてまた獨文學に堪能なので、『國民の友』誌上に或は獨詩を飜譯し、或は文壇の趨勢を論じ、或は小說の創作をも試みた。後に落合直文市村瓚次郞等と『柵草紙』を發刊して益〻縱橫の筆を揮つた。その前後に譯せるものは、ハックレンデルの『黃綬章』『二夜』、クライストの『惡因緣』『地震』、シュピンの『埋木』、フレンチェルの『女丈夫』等があり、また獨譯によつて重譯したものに、露のトルストイの『瑞西館』、米のアーヴィングの『新浦島』等がある。中でも『埋木』の譯は、悲慘な藝術家の最期を敍して、うたゝ人を動かすものがあつた。

鷗外はまた二十三年に創作『舞姬』を『國民の友』に載せた。『柵草紙』には『うたかたの記』『新著百種』には『文使』を載せた。三篇共にその題材を同じくして、日本靑年と獨逸少女との戀物語を敍してゐる。當時瀰漫せる客觀藝術に對して、眞面目な主觀藝術の旗幟を樹立したものである。殊に『舞姬』は心理描寫などがよく精緻を極めた。たゞ、その創作も、その情趣が宛ら獨逸文學に接する感があつて、當時には褒貶相半ばした。

矢崎嵯峨の舍の諸作も屢〻『國民の友』に揭げられた。『流轉』の如きは其の一である。その他『夢幻境』の如き、或は『大和錦』所載の『薄命のすゞ子』の如き、『都の花』所載の『初戀』の

如き、皆喧傳せられた傑作であつた。可憐の趣、哀傷の風情、抒情詩めいてゐるのが、若い讀者の心を誘ひ動すものがあつた。

山田美妙齋の『蝴蝶』も「國民の友」に載せられた。我が文壇に於いて始めての裸體畫の挿繪が物議を釀した時にも、この雜誌はその論難の衝に當つた。新體詩の創作論議・も、これが殆ど唯一の壇場であつた。當時已に文學雜誌は外にもあつたが、その覇を爭ふに足るべきものはなかつたのである。敵國はこれを他に求めねばならなかつた。

新文學の勃興を以てひとり「國民の友」一派の精神的歐化主義の然らしめる所とのみするものは、未だ他の一面を忘れるもの丶短見といはねばならぬ。それが活動に與つて力のあつたものは、また雜誌「日本人」であつたことを記憶すべきである。これは三宅雪嶺・井上圓了・志賀矧川・棚橋一郎等の結社で、政教社といふもの丶機關雜誌であつて、その發刊は「國民の友」よりも遲れること一年であつた。かの精神的歐化主義に對し、これは國粹の保存を以て主義とした。誌上言を極めて、我には我の國粹があり特長がある、然るに之を棄却して顧みず、ひたすら歐洲文明を讃美し渴仰するの餘、つひにその缺陷をも併せ取つて得々然たるものは愚であると呼號した。

かの第一期に於いて見られた皮相的模倣は、この頃にもなほ依然たるものがあつた。

時の外務大臣伊藤博文公が鹿鳴館に假裝舞踏會を開いたなどは、その高潮に達したものともいはれよう。或は國語の改造を說き、或は人種改良を說く聲なども高かつた。されば、當然一轉回の來り、反動の起るべきであつた。ましてさらいふ趨勢を助長すべき條件が他の方面にも存してゐた。十七年頃から、官界に於いては、獨逸思想が盛んに輸入せられることとなつた。これは英米の自由を尊ぶに反して制度立法を重んじ、國家的精神を重んずるものであつた。我が憲法制定に關して國家的主義は墺のスタイン博士から注入せられ、また國體が我に似てゐるといふ點を以て獨逸の政治を模範とすることとなつた。十八年に森有禮は文部大臣として、國民教育は國家に忠良なる臣民を作るにあり、そして之を作るは軍事教育によると宣言した。からいふ氣運がいつとなく起り始めた時多年の宿望たる條約改正をなす準備として、法典の編纂が必要になり、隨つて過去に於ける法律習慣の研究が必要となつた。かゝる中に、條約改正は失敗に歸した。世はこゝに歐化主義を嫌忌するに至つた。かの新島襄の活動によつて漸く世に普及して來つた基督教も、異教なり我が國體に反すとの言下に、壓迫を受けるに至つた。

美術に於いても亦同一の色調を帶びて來た。東京大學の教授フェノロサは日本美術

研究の結果、わが國固有美術の優秀にして、決して歐米のそれに劣らざるを推奬し、大いに特長を發揮すべきことを唱道した。陋雜な石版畫にもせよ、洋畫といへば珍重して措かなかつた國民は、西洋人の口からこの言を聽いて、呆然たるものがあつた。他に教へられて始めて自國の美術の進歩淵源の深遠なのに驚いた。後に、美術取調委員が歐洲視察の結果議定した事項も、美術を教へるには、まづ固有の技を基礎とし、その成るに及んで他の長を取るといふのであつた。嘗ては顧みられなかつた古美術も、かくして再び世に出づる事となつた。古文學も亦研究を迫られ、玩賞を強ひらるゝに至つた。國學院も設立せられ、大學には國文學科が置かれた。國文學復興の聲はかくして愈高まつて行つた。これに多大の貢獻をなしたのは落合直文・小中村義象・の「日本文學全書」の刊行であつた。これは「竹取」「伊勢」「源氏」等の諸物語を始め、日記・軍記類・を飜刻したもので、當時稀有のものを網羅した。價は至廉、頭註は簡明、從來の珍籍も容易に手にすることが出來た。更に佐々木信綱も同一體裁を以て「萬葉」をはじめ「八代集」等を「日本歌學全書」と題して覆刻した。かくて奈良・平安・の古典が文學として廣く講究せられるに至つた。古文學の回顧はまた近世文學にも及んだ。第一期の戲作者が模範とする所は一九か三馬か、さなくば馬琴・春水・であつた。然るに、今は溯つて西鶴に至り、近松に

至り、八文字屋本にも至つた。實に西洋の藝術論によつて寫實主義が唱へられる時、その作品を元祿文學に於いて見出さうとは、思ひも寄らぬ所であつたらう。一度はたゞ驚愕の眼を瞠つたものゝ、その價値を認めるに及んでは、趨り赴くの徒が少くなかつた。硯友社、殊に紅葉の活動また露伴の飛躍は、こゝに始まつた。

かくの如き國粹保存の運動「日本人」にはじまり尋いで新聞「日本」にまた「東洋學會雜誌」及び「明治學會叢誌」によつて呼號せられたこの運動は、之を反動と見るにもせよ、國民の自覺と見るにもせよ、決して頑冥無智な保守ではなかつた。勿論、これは我が特性を發揮するにあつた。然しながら、過去を回顧すると共に他の長所を攝取して、初めて眞の改善を期待すべきである。「國民の友」と「日本人」とが代表する兩思想が相融和して、眞の新しい文學は成るべきである。明治文學に於ける東西思想融和の第一歩はここに現出した。

試に見よ、二十三年東京專門學校に文學科が置かれ、二十四年に「早稻田文學」は發刊せられたが、その取るところの方針は我が文學を圓滿ならしめる第一の方便は和漢洋三文學の調和を計るにありとし、東西古今を問はず、文學の精華を選拔して釋義詳註するを主とした。また見よ、國文學の復興と共に漢文學も或は飜刻に或は註解に、頻りに振

ひ起るの狀を呈した。漢詩壇また森槐南をはじめ國分青厓本田種竹・小川岐山・岩溪裳川・落合東郭・野口寧齋・大江敬香・等があり、之に專らならずと雖も、堪能を以て稱せられる者に末松青萍・志賀矧川・等があつた。しかも之等を通覽するに、或は詩は志をいふとして守舊の態度を取るものもあれど、更に進んで改新の實を擧げんことを期待するものも少くなかつた。日はく、從來の漢詩は作家自身の述懷のみ、新文明の今日は宜しく詩材を廣く漁るの要がある、故に敍事詩を盛んにせよ、また西詩の材料及び趣味をも加味せよ、また更に西詩の飜譯をなせと。東西融和の蹤は詩壇の上にも之を認めることが出來た。古文學の復興が、退歩を示すにあらずして、新文學に資する所の多かつたのは畢竟この故であつた。

第三章　硯友社派と露伴

「小說神髓」が世に出づるに先つこと二月、卽ち明治十八年の春に、一の文學的結社が成立した。尾崎紅葉・山田美妙齋・石橋思案・丸岡九華等を社友とせる硯友社といふのがそれである。多くは大學豫備門において西洋思想に親しむ人達であつた。かくて同年五月に至つて、小說を主として美文・韻文・詩歌・俳諧・一口話・繪さがし・謎々・までを載する回覽雜誌「我樂多文庫」を發行した。半紙二十枚か二十五枚位を綴つて、紅葉が社員の原稿を淨書したのであつた。その初編披露の序にいふ「筆の林に閑居して不善はなさぬ君子等の快樂一派と、和歌・詩文・の上品より、小說・狂文・狂詩・狂歌・句・四面に堅き角を去り、端歌・都々逸・の心意氣一切無差別書きあつめ、「我樂多文庫」の名にし負ふ諸彥も我も樂の多き冊子を月々に編して、而して讀書餘間の憂晴し、噫是天下無上の快樂、倶にせんとの有志の君達、珠玉を空しく祕め給はず、價をまたず沽らんかな沽らんかなとのたまへば、我もいはん、買はん哉買はん哉」と。上に敍べた二葉亭四迷の態度が藝術を以て人生の眞を描くにありとすれば、後の硯友社は藝術の爲の藝術を樹立せんとするものであつた。

その後半のみを掲げたに過ぎない披露の序にも、已にその傾向の存せることは見られるであらう。手書は第八號まで繼續した。九號に至つて活字を用ゐることとなつたが、なほ禁賣の印を捺した。時は十九年の十一月であつた。公然と發賣したのは二十一年の三月、一册の價は僅に二錢。その頃には社員も增加して、二十二年の末には川上眉山・嚴谷漣・江見水蔭・廣津柳浪・等も數へられた。「文庫」そのもの丶價値は大ならずとするも、これが文壇に雄飛する寫實小說の諸家を出した搖籃であつたことを記憶せねばならぬ。

これより先に、美妙齋は硯友社を脫して別途の發展を策した。二十年に雜誌「以良都女」を出し、二十一年に「都の花」を出し同年更に短篇小說集『夏木立』を出した。所載六篇のうち、殊に世に推稱せられたのは『武藏野』であつた。武藏野の荒漠たる地の出來事、新田家の悲劇を敍して、しかも歐洲趣味の橫溢せる、さながら讀者をして彼の敍事詩を誦する感があらしめた。世人が驚きの叫はその內容にもよれど、寧ろ形式に於いて發せられた。それは『浮雲』と似て非なる言文一致體を採つたことである。一體美妙齋は言文一致に對しては早くより一箇の意見を有してゐた。チョーサー傳を讀んで、俗文を以て今の英文の基を成した蹟を思ひ、チャンバーレンの文明と言文一致との關係に關する

論文を讀んで動かされ、或は物集高見の著書『言文一致』中に『源氏物語』『平家物語』を口譯せるを見て刺激せられ、遂に十九年「風琴調」一節を出した。これは『浮雲』と同じ形式のだ調であつた。後更に工夫の末、ですといふ調を採つたのが『夏木立』である。その文には歐文の色調を帶びることが多く、また好んで擬人法の詞藻を用ゐた。

かくして二十二年には『蝴蝶』『ぬれ衣』『いちご姫』を出した。この中でも『蝴蝶』は當時の批評界に動揺を來さしめたものであつた。『蝴蝶』一篇、時は平家滅亡の際平家に宮仕する可憐な一少女蝴蝶が、忠義の一念のためには相思相戀の間なる夫をも殺害し、而もその苦衷もあだとなる悲惨な運命を敍し、戀と義理との衝突を說いたものである。さばれ作者の筆の運びは、その煩悶をも懊惱をも淡々としてうつし去り、すべてを抽象的敍述を以て行るに過ぎなかつた。これも亦新奇な言文一致體によつて喝采を博したといはゞいふべき程のものであつた。美妙齋の言文一致か、言文一致の美妙齋かの時評も道理ある言であつた。

『蝴蝶』の出づるや、美妙齋が退社後に於ける硯友社の盟主であつた紅葉は『二人比丘尼色懺悔』を「新著百種」の第一篇として出した。これは畢竟紅葉が美妙齋に對して宣した挑戰であつた。故に推敲また推敲を重ねた苦心の作で、決して「我樂多文庫」に掲げた

『江島土産貝屏風』や『風流京人形』等の如き、片々たる戲作ではなかつた。時はいつ、處はいづこ とも知らぬ山里の草の庵の一夜、終宵語りあかす主客二人の尼、共にその發心のもとはといへば、戀ひ慕ふ若武者があへない最期故と、しかも二人の戀人は同じ人なるを知つて今更に新しい愁に泣く、これが、一篇の脚色であつた。そして著者はかういふ哀れに悲しい物語をうつし出すに、絢爛華麗な文辭を以てした。かくて俗にも雅にもあらぬ一種獨特の折衷體が創められた。紅葉の苦心はこゝに注がれた。美妙齋の言文一致は斬新とはいふものゝ未だ生硬を免れぬ、精緻はあるが冗漫に過ぎる。紅葉はまづ文體の取捨に迷つた末、その愛讀せる西鶴、淡島寒月の慫慂によつてその趣味を悟了せる西鶴の筆致を學んだ。たゞ印象を深くすべき言辭のみを取つて、意を言外に寓する。されど頻りに用ゐられた種々の記號、それはまた歐化主義の面影を示するものではなからうか。文體に於いて模範となつた西鶴は、また寫實の態度に就いても敎へる所があつた。されば『色懺悔』に見るが如き抒情詩的趣味・傳奇的趣味に彷徨せる紅葉は、まづ現代社會の事相に觀察の眼を開くに至つた。「國民の友」『讀賣新聞』『都の花』等に於いて發表せる小說、卽ち『拈華微笑』『此のぬし』『夏痩』『新色懺悔』『二人女房』『伽羅枕』『おぼろ舟』『三人妻』『心の闇』などが、それである。時は二十三年から二十七年ごろまでの間。

中にも、二十四年に「讀賣新聞」に出した「伽羅枕」は、最もよく西鶴模倣時代の作品を代表するものであつた。旗本の水野石見が京在番の折、祇園の藝子小鶴に生ませた遺子お仙が、十二歳の時から島原の育ち、十四に太夫の突出し、十五に全盛の根引流れ流れて吉原に歸咲きの佐太夫或時は水戸の士の捕手に附狙はれるのを庇護し、或時は通ひ來る父子をあやなすなど、擒縱自在の手管や意氣の數々を盡した擧句は、妾となり、癩病者の看護婦となり、はては一念發起しての剃髪二十八から六十二歳の今年まで清淨無垢の寡居、谷中の某寺に一基の石塔を建てゝ三十四名の遊客の亡魂を祭るといふ老婆の懺悔話。花柳の巷の寮閑氣や、金にも姿にも屈せぬ傾城氣質など、數へ來れば西鶴が「好色一代女」の飜案か改作かと思はれる程によく似てゐる。

されど、西鶴には無意識ながらも、深く人生を觀察して、その眞を剔抉しようとするものがあつた。然るに、紅葉にあつては唯その題材の漁るべき方面を示し、その文辭の模すべきを示すに過ぎなかつた。深刻な洞察や、苛酷と思はれる諷刺は、何處にも見出すことが出來ない。「二人女房」の如きも、美しくて虚榮にあこがれる姉娘と、醜くて眞實な妹娘との成行きを記して、前者は官吏の家に嫁いで一時の榮華も夢の間にて沈淪の身となり、後者は職工の妻となつて平和の家庭に樂しい日を送るといふ對照を以

て筆を結んだ如きは、到底西鶴の着想と一致すべきものではない。二十七年に出した『紫』は、醫學生が開業試驗に應ずる苦心を敍したものであるが、その結末は首尾よく及第して病院を開くことになつて居る。著者自らいへるやう、もし落第の煩悶を描かうとするが如き事あらば、それは露西亞小說の態度のみと。紅葉は遂に露西亞風の作者ではなかつた、否全く之を欲しなかつた。早くからゾラの作を讀んでその描寫の範とすべきを說きながら、ゾラたるを得ず、更に西鶴を學んで西鶴たることも出來なかつたのは何故であらうか。

紅葉は江戶の地に生れ、江戶に敎養せられた新江戶子であつた。隨つて、その才筆は江戶の輕妙、その描く所は江戶子氣質であつた。意氣とか、婀娜とか、粹とか、俠とかは、その好んでうつすところ、かの『伽羅枕』の佐太夫はこれ等を具象化したものではないか。その外、妾・遊女・等を寫すことの多かつたのも、亦これが故であつた。また、紅葉は江戶の人の如く世間の道德知識に滿足し、藝術をその上に立てゝ之に遊ばうとするものであつた。故に、その文學は通俗の文學、その小說は同情の小說、人情の小說であつた。『色懺悔』に序して、この小說は淚を以て主眼とすといへるは、唯かの作にのみ就いていふべき言でない。『紫』が喜びを以て篇を結んだのも、これが爲であつた。女性の描寫の多いの

も、この故であつた。またしても女物語とは『伽羅枕』だけの起筆ではなかつた。その女性は實際の觀察によつて、實世間から索め出でたものであつた。然し多くは優にやさしい女、運命に服從し犧牲の念に富んでゐる女であつた。『三人妻』は紳商葛城某の三人の妾によつて、三人三色の趣を出さうとするもの、意地を以て鳴る江戸張りの藝者も、大家に仕へて美貌を以て自ら高うする娘も、二十四歳までも道德堅固に構へた琴の師匠も、葛城の毒手にかゝつては、皆止むなき運命として唯々とし從ふのであつた。『朧舟』のお藤は貧ゆゑに妾となつて親に盡し、『むき玉子』のお喜代は繪師のモデルとなつて家のためにした。中にも『心の闇』のお条は女性として寫された中でも最も傑出したといはれるもの、而も個性が明かに現はれてゐるとはいはれない。要するに、婦人の通性を示すといふに外ならぬ。されば、紅葉は寫實を標榜するとすれば、餘りに洞察の眼が鈍すぎた。性格の奧にわけ入ることもせず、人心の機微に觸れることをも能くしなかつた。畢竟深く省察する必要のない外裝と皮相の人心の發現とを描くに過ぎなかつた。隨つて、紅葉は事件の興味對照の興味を忘れなかつた。これが新聞小說に着々成功して、『紅白毒饅頭』の如き、その方面に於ける佳作を成し得た所以である。

蓋し、紅葉の努力の大半は、文辭の彫琢に注がれてゐたのである。『三人妻』の如きは一

句一語をも苟もせず絢爛の極に達した。最早や行きつまりである、他に方面を轉ずるより外はあるまいとまで言はれた。「二人女房」は言文一致の試作であつた。これも美妙齋に對し、二葉亭に對して、別途に出でようと欲した鏤心の業であつた。ですにもあらず、だにもあらぬである調に落ちつくまでには、種々の洗煉を經たものであつた。

紅葉を中心とせる硯友社の同人の作は、殆どすべてが皆同一の傾向を有してゐた。その重なものに就いていへば、思案には「乙女心」「京鹿子」があつた。されど、その得意の壇場は「我樂多文庫」に掲ぐるところの滑稽諷刺の小品であつた。柳浪は「二おもて」「殘菊」「いとし子」『絲の亂れ』「五枚姿繪」などを相踵いで出した。硯友社中にあつては最も深く人生を觀ようとするもの後の深刻小說としての基礎はすでに開かれてゐた。眉山は『黃菊白菊』「墨染櫻」等の作があつた。その他の小品にも傑れたものが多く、その文致の輕妙なことは、よく紅葉と駢馳するに足りると評せられた。漣山人は「妹背貝」「片絲友禪染」等のもてはやされた作があつたが、二十四年に「こがね丸」を出すや、その得意の境を開拓し得て、爾來少年文學に力を注ぐに至つた。要するに、これ等は皆文章上の技巧に腐心するもの、その唱道するところの寫實主義の如きも、その實あがらず、たゞ淺薄なもの、皮相のものたるに過ぎなかつた。

もしそれ紅葉を以て西鶴の才を模し得たものとすれば、西鶴の氣を倣ひ得たものは幸田露伴でなければならぬ。

露伴の作は明治二十三年に「都の花」に載せた『露團々』に始まり、『一刹那』を經て、その秋に「新著百種」に『風流佛』を掲げた。露伴の名はこの篇によつて定まり、『奇男兒』『對髑髏』一名『緣外緣』を出し、『一口劍』を出すに及んでその名愈、高く、二十五年「尾花集」に『五重塔』を出すや大いに批評界を搖がし、紅葉と共に文壇に覇を稱するに至つた。紅葉の『伽羅枕』と共に「讀賣新聞」紙上に『ひげ男』を草する時などは、如何に人々をしてその勝負を期待せしめたか。紅露の名が頻りに對照して說かれたのは、この時頃から始まつた。されど、露伴は掲載して數回に達するや、その豪放な起筆を以て人々を驚かしたまゝ、飄然去つて赤城の山中に隱れた。その外、露伴はよく谷中の庵室に閑居して禪に參してゐた事もあつた。『五重塔』は實にその折の作である。作家その人の脫俗の趣は、また髣髴としてその作の到る所に現はれてゐる。

これよりさき、露伴は西鶴を愛讀して措かなかつた。遂にその研究を具して「國民の友」誌上に載せた。馬琴が西鶴を以て無學無識として嘲罵した以來、殆ど顧られなかつた故人の眞面目は、こゝに始めて明らかにされた。西鶴の復活についてその論文が責

するところの多かつたのは勿論であつた。露伴は西鶴に私淑するの餘、まづその筆致を模倣した。その長く連續して絶えようとして絶えざる如き紆餘曲折を極めた文脈が、それである。更にその風趣をも摸するに至つた。風趣とは何ぞ、西鶴の作中に横溢せる意氣である、不羈放膽の氣骨である、自由活躍の精神である。それが躍をよく示すものは『五重塔』に若くものはない、そしてこれは露伴が作中の雄篇である。

江戸の棟梁に川越源太といつた江戸子の番匠があつたが、谷中の感應寺の五重塔建立をうけ負ふ事となつた。その時、源太の下に使はれる大工の渾名をばのつそりといふ十兵衛が、源太と競爭してそれを成し遂げようとする。人々はあの愚者がと呆れ、その不義理を嘲る中に、源太の侠骨なる、潔く承諾して更に助力しようとまでもする。然るに、十兵衛は才拙くて技倆未だ世に顯はれず璞玉たること多年、されば今こそ獨力手腕を示すべき時ぞと思へば、なか／＼その親切をもきゝ入れない。或は源太の子分に白刄を以て迫られる事があつても恐れず、おのが配下の大工の冷笑をも顧みず、つひに五重塔をば落成させる。しかし落成が近づいた一夜、夜叉王何に怒つたのか、暴風暴雨江戸の寺や社を大方毀損した中に、十兵衛が死を決して守つてゐた塔のみは破れず損せず、巍然として高く聳えてゐる。風雨の中に十兵衛の名折にもと人知れず心配して

塔の邊を見めぐりした義俠の源太も、眞からその技倆を認め、人々も今更に驚いた。

この小説ははじめ「國會新聞」に揭げられたが、二回分を書き終るや自ら郵便函に投函する例であつたが、月の夜など仰いで谷中の塔を見ると心動いて興會禁ぜず、この最期の脚色などはかくして成つたものであると、作家はいつてゐる。かの暴風雨の敍述の如きは、文壇稀に見るの大文字、これのみにてもその價を定むるに足りるものである。

この作に現はれた十兵衞は、五重塔建立のためには、自己の身命をも犧牲に供して惜まぬ者である。親方に對する義理も、おのれが藝に對する一念のためには、何等の意味をも有してゐなかつた。かくの如きは、ひとり十兵衞のみならず、「血紅星」の皆非居士が眞の詩を詠じ出さうとする努力、「風流佛」の佛像を彫刻しようとする苦心に見ることが出來る。否、これは露伴の作を一貫する中樞觀念であり、根本思想であつた。

この藝術に對する熾烈な愛、それがある以上は、何を以てか涙の伴ふ女々しい戀を描くの要があらうぞ。されば、「五重塔」の中にも、遂に一の戀愛を見出すことが出來ない。「風流佛」の中なる戀愛の如きも、戀愛そのものが主たるものではなくして、所詮は藝術に對する愛の一支流に過ぎない。この藝術に對する愛の極致は何か。これぞ藝術の不滅永遠の生命を認める事である。「五重塔」はさしもの風雨にも板一枚破られず釘一つ

ゆるまたかつた。天の力よりも、自然の力よりも、人の力よりも、より强く大きいものには藝術である。藝術に對する信仰、信念、こゝに始めてその作は理想小說と稱せざるを得ない。いかに人々は高遠なものとしてその思想を仰いだらう。知らず、或はたゞ仰ぎ見て、その眞意を解し得なかつたのではなからうか。人々が幽玄を以て稱したのは、多く文辭の上でなかつたらうか。當時一般讀書界からは、やはり紅葉の方がもてはやされた。たゞ文壇上の階級からだけは、紅葉の文・露伴の想・といふことが屢〻說かれた。

紅葉は人心の機微に觸れることを能くなさなかつた。しかし露伴は幽玄な人物の機微をも穿たうとした。また幽靈、或はものゝ前兆などの超自然についても、敍する所があつた。これは佛典に參することの深いその人の、さもあるべきことであつたらう。一面からいへば、露伴は抒情詩人の態度があつた。さりとて同じ態度を取らうとする美妙齋にかの『對髑髏』をなさしめたなら、果してこの深さを有することが出來たであらうか。とにかくに、露伴の作は詩趣に富む、筆おのづから高調に達するところ、渾然玉の如きものを生じた。『風流佛』に於いて專心一意我を忘れて佛像を彫刻し、また鑿一鑿毎に裝飾の花を除去する節の如き、朗々誦すべきである。

露伴が敍する人物には、また他の異なるものゝあるを忘れてはならぬ。『五重塔』の源

太の如きは即ち好個の代表者。彼は一度は十兵衛の仕向の甚しさに怒を帶びたが、その宏量は却て之に助力しようとする。この意氣地は實に元祿の濶達の精神、西鶴が描く得意の性格であつた。さきには自ら紅葉の江戸氣質と合せしめたが、こゝに露伴を得て武士を描かしめた。かの「奇男兒」の中なる義士喜劍の如きは、やがてその一例に過ぎない。かやうな、いはゞ偏僻の人物の描寫に力める露伴は、紅葉と歩をあはせて女物語を作ることは到底出來得ざることである。たまに女を描けば、紅葉に於けるが如き可憐の女ではなく、世にすねはてゝ神を怖れず佛を崇めぬ「對髑髏」のお妙の如きものであつた。

要するに紅葉は女の通有性を現はし、露伴は男の通有性を現はした。二者共に眞の意味に於いて個性を發現することが出來なかつた。紅葉は客觀の眼を以て實社會を觀んと欲し、露伴は主觀の懷に入つて理想世界を現はさうとする。二者相背くの遠さ全然相反するものともいはう。しかしその源は一つ。寫實主義のもとに、西鶴の讃美と模倣とをなしたものである。

第四章　寫實小說の反動

紅露が西鶴から出でて寫實の旗幟を揭ぐるにさきだち同じく範を元祿文學に取りながら、西鶴に赴かないで其磧に趣つたものに饗庭篁村があつた。篁村は前期の半から新泉居士・太阿居士の名を以て「讀賣新聞」紙上、次いでは「朝日新聞」紙上に、輕快の筆を揮つて、或は隨筆或は短篇小說を出した。二十二年に出版した『むら竹』はそれ等の合集である。同年單行本として世に出した『當世商人氣質』はまたその傑作の一。商人が成功する方法は一に着實にあるのみといふ着想を敍したに過ぎない。たゞ隨處に奇警な觀察と巧妙な諷刺とが見られる。題して當世といへど、宛として八文字屋本中のもの。實に篁村の作は明治の事象の中から江戶の風貌を漁り出して、之を諧謔の筆に寓する所があつて、他の模倣を許し難いものがある。故に明治の事象を明治の事象として寫し出さうとするに當つては、失敗に終ることが多くあつた。『堀出し物』の如きはその一である。

篁村が鷹揚な態度、悠々迫らざる態度を持するにひきかへて、常に快罵・善罵・嘲罵の數

數を盡し、或は諷刺家と呼ばれ、或は皮肉家と稱せられたものは齋藤綠雨であつた。綠雨は魯文の門下から出でて、夙に江東みどりの名は、華麗の文辭と共に世に知られた。後には正直正太夫と名乘つて、諷刺の筆を縱横に走らせた。二十四年に『かくれんぼ』『門三味線』『油地獄』などの作を出した。『かくれんぼ』の如きは、藝妓と若々しい息子との間に起つた可憐な戀物語を敍したものであるが、なほ皮肉の觀察はこゝにも溢れてゐる。硯友社の戀愛小說が例の才子佳人を少々向きを變へたばかりなのに慊らず、また當時行はれた戀愛神聖論に反抗したものだと作者自身はいつてゐる。その態度の發展した所が後の『覿面』となり『雨蛙』となり、隨筆『霰酒』となつた。共に小說としては何等優れた結構を有してはゐないが、その奔放自在の筆は犀利冷酷の眼と共に、眞に肺肝を衝くに足りるものがある。

また舊文學を繼承したものに須藤南翠があつた。さきには政治小說家として世に知られたが、これも寫實の色調をその作品に寓するに至つた。『朧月夜』『照日葵』『こぼれ松葉』等は相應の喝采を博し得たものである。

かくの如く、寫實小說の勢が、旺盛を極めた時には、末廣鐵腸に『南洋大波瀾』といふ規模の大なる政治小說があつたけれども、さまでに迎へられず、矢野龍溪に『浮城物語』とて科

學趣味を加へた冒險小說があつたけれども、到底昔日の『經國美談』の名聲を再びすることとは出來なかつた。紅露の壘を摩せんとするが如きに至つては、『浮城物語』の空想と同一樣といはねばならぬ。その外、宮崎三昧に『桂姬』『塙團右衞門』の作、依田學海に『楠木十津川』の著があるが、いかで大勢を動かすことが出來やう。蓋し、寫實小說の敵は外にあらで、蕭墻の間に潛在してゐた。まこと寫實小說の取材の範圍や狹く、觀察は淺く、その描寫は作者の周圍散步の間を出でない。その標榜する所は、世態人情の眞相を把持して、さながらに之を描き出さうとするにあつたが、作家の眼は永く現實に對して凝視することが出來ず、いち早くも小主觀に囚へられるのであつた。當時評論界を動搖せしめた沒我論、沒理想論、『早稻田文學』に『柵草紙』に鷗外と逍遙とが或は沙翁を中心とし、或はハルマトンの美學を基礎として論難辯駁數ケ月に亙つた主張も、寫實派の作家にあつてはもとより風馬牛であつた。彼等は事を主とし人を客とする戲作者の態度から脫却せることを以て、此上ない誇としてゐた。もしその執る所の態度を評すれば、人の性情を活寫するが爲に、人を主として事を客とし、事によつて性情を寫さうが爲に、事を先にして人を後にする域に、辛うじて達したに過ぎなかつた。されば、論ずる者は、人を因とし事を緣として因緣果をなし、果また緣をなして終に大團圓に至るべき最高

境域あることを示して、之に導かうとした。ひとりこれのみならず、寫實小說が纖弱狹小の戀愛談をくりかへすを苦々しく思ふの聲は頻に放たれて、種々の要求は提供せられた。曰はく、社會問題を材料として、人智の啓發と風敎とに益せよと。曰はく、宇宙人生に關する自己の理想を發揮せよ、舊理想に安んぜず新理想を描寫せよと。曰はく、文壇に高遠の思想なきは、他界に對する觀念が今の作家に乏しきによる、故にまづ理學を超越せる世界を認むべきであると。されど、この高遠な理想は、それを主情派の詩歌に求むべく、社會問題に接觸することは後の觀念小說や社會小說に待たねばならなかつた。その二十四年頃、ひたすら辭句の洗煉に心を苦めてゐた寫實小說家は、その千篇一律の戀愛小說に飽かれるを知りながらも、如何ともすることが出來なかつた。求めて與へられなかつた讀者は、寫實以外の小說と見れば、その巧拙はともあれ、まづその新しさを迎へようとする狀態にあつた。こゝに無名の士の起つべき時は來た。

思軒の下に「報知新聞」紙上に『三日月』を出した村上浪六は、はじめ紅葉か露伴の變名と思はれてゐたが、漸くその名を知られて一躍大家の列に數へられ、一作出づる每に讀者は爭つて之に趨つた。

『三日月』の主人公三日月次郎吉は、正德享保に男を賣つた町奴、旗本といはず、大名とい

はず、義俠の爲には打挫き打拉ぐ勇者、白刄の中に圍まれて泰然自若杯を手にする膽力、よき買手御座候はゞ何時にても此の命賣り申候、但し現金取引の事、晦日ばらひは前以て御斷り申置候と、黑々と認めた帷子着ながす濶達姿、子分の罪を身に負ひての切腹、大老が情ある扱ひに、琵琶の悲曲を聽きながら天晴な最期を遂げた。事に變化があり、筆に氣慨があつて、文壇また類を見難きものであつた。之に次いで『井筒女之助』を出した。戰國の世、書劍を荷つて四方に說けども用ゐられぬ境若狹が、憂憤の餘やさしの姿をそのまゝに髮を唐輪に結ひ、栗月毛の名馬に跨つて往來し、刺客の影と附き纏ふをも靜に抑へて大いに爲すあらんとした一奇士の生涯、剛毅と優雅とを打つて一團とせる一個の美丈夫を描き出した。その外『奴の小萬』『鬼奴』『破太鼓』『夜嵐』『深見笠』『髯の自休』など、陸續として世に公にせられた。これ等皆、人も變り、時も變つてゐるけれど、すべてが意氣と俠氣との權化。いづれ三日月次郎吉が種々に假扮したもの。そもそも意氣と俠氣とは、我が國民にはいつの世にも共鳴すべき或ものを有してゐる。識者から見れば、よしや低きに過ぎるものはあつても、偏する所はあつても、このものゝある所は胸裏おのづから躍るべきものがある。浪六の作が人意に投じたのは、卽ちこれが爲に外ならなかつた。況んや、その筆致の奇なる、當時鏤刻に過ぎた文章に接しがちのものは、

歡び迎へて句々靈活字々躍動の評を下すに足りるとさへいふものゝあるに至つては猶更の事であつた。

されど、その作品はたゞ類型を敍するに止まる。さきには人を主とし事を從とする境域に達した我が小說壇は、再び事を主とする讀本の昔に歸つたのである。その事も俠骨を活動せしめる一點に限られてゐるから、毎篇殆ど同一樣で、內容の乏しい、そして深みのないものであつた。されば、撥鬢小說の名は、つねに識者が苦笑の種であつた。その頃「早稻田文學」誌上に、小說學校撥鬢科の敎則と題して、「本科の作家とならうとする者は、筆先にて人を殺すこと練馬大根を切るが如く心得べき事。總じて死・自殺・血・美女・意氣地・磊落・不羈などいふ想像をたえず念頭に蓄ふべき事。總じて寬濶なる事・すごい事・すばらしい事・强い事・に心を注ぎ、兼ねてやさしい事・あはれな事・に留心すべき事。所詮剛柔の二面を常住の心得と致すべき事。鬼の目に涙・一寸の蟲にも五分の魂・武士は喰はねど高楊枝・柔能く剛を制す・などいふ諺を、毎朝百遍宛唱へてよく服膺すべき事。」などの項を揭載した。所謂撥鬢小說の特質と缺點とは、能くこの諷刺に見ることが出來やう。かゝる小說は一時珍奇を求める輩にこそ持囃されることはあれ、到底永續すべきものでないことはまた論を待たぬ。その一篇を讀めば、他は裕に之を忖度するこ

とが出來る。讀書社會にはいつしか倦怠の色が見えはじめた。

一たび歩を舊き物語風讀本風の小說に讓つた我が小說壇は、趣味の低落が更に加はつて、なほ人を後にして事を先にする傾向を助長するに至つた。激甚な事件の變化、局面の變化は頻りに渴仰せられた。探偵小說の流行はかくして起つた。殺人、強盗、詐欺あらゆる罪惡を犯した姦惡の徒は、巧に跡を晦して世に紳士として時めいてゐる。冤罪を以て獄死したものの遺孤は餓に瀕して泣き、相續すべき財産を奪はれた子女は陋巷の月にさまよつてゐる。烱眼はやくも之を看破した探偵は、身を賭して死生の間を出入し、科學の利用、巧妙な變裝假扮を以て、終にその舊惡を暴露するに至る。黒岩涙香の『鐵假面』『非小說』『大金塊』『死美人』『人耶鬼耶』は、その代表の作であつた。涙香は材を西洋の探偵小說に取つたけれど、その作は飜譯にあらず、抄譯にあらず、たゞその輪廓を借り來つて、一般讀者の意に投ずるやうに脚色した。これ等の作が一世を風靡したのは、實に二十六七年の頃であつた。その頃內田不知庵が露のドストエフスキーの傑作『罪と罰』を飜譯して出すや、その譯筆の妙を稱するは批評界の一隅に過ぎず、その作の深刻と心理的描寫の精緻とを悅ぶは識者の一部に過ぎず、他は探偵小說として興味を寄するのみであつた。

然しながら、この趣勢も、もとより永くは續かなかつた。人はこの低級の趣味に甘んずることが出來なくなつた。されど、墮落の底に沈淪せる小說壇には、直に之に代るべき高雅なものを見出すことも出來なかつた。沈滯又沈滯、つひに歸着する所を知らぬさばれ、一道の光明は放たれた。歷史小說の興起を促すの聲がそれである。歷史小說は卑猥殘酷ならぬ意味に於いて、健全小說として期待せられた。多趣にして多量な點に於いて長篇小說として期待せられた。更に進んでは、スコツトが路易十一世を寫した如くに、織田信長を描き、獅子王リチヤルドを畫ける如くに、不識庵謙信を寫すものゝ出づることを希望した。なほ一步を進んでは、當代の人情、風俗、理想及び人物の影を見るに足りるものを欲し、過去の理想及び感想とその理想及び感想が造化天道と相因緣するの形跡を見ることを欲した。

當時に於いて、かゝる企圖の說かれるには、實に據る所があつた。さきに二十一二年頃に起つた古史古典に對する回顧は、空なる歐化主義の反動または淡たる好古好奇の念に驅れて起つたに過ぎなかつた。故に、歷史の硏究も、史材の蒐集と考證とに止まつて、たゞ過去の形骸を求めるのであつた。然るに、今は過去の實質內容をも探知しようとするに至つた。ひとり社會表面の事象に止まらず、なほ深きに入つて歷史的人物を

個人として解剖し觀察しようとするに至つた。歷史を通じて人生を觀ようとするの傾向にまで至つた。民友社の「十二文豪」博文館の「世界百傑傳」の如きは、その潮流に於いて揚げられた一波にすぎない。これよりさき、雜誌に「史海」があつた。それによつて代表せられた一派は、常にマコーレーの所謂圓滿な史家を以て任じ、詩歌と哲學とを兼ね、小說と論文とを併せ有しようとした。乾燥無味な史實の穿鑿を避けて、趣味の橫溢を主とした。かくの如くば、そのもの已に歷史小說を距ること一步の間である。讀書社會は、この新しい讀物に向つて、歡呼の聲を放つた。小說壇の不振の一因は慥にここに存してゐる。されど、この趨向は一面にはまた小說家の努力を促した。さきに歷史小說を促す議の盛んであることを敍べたが、そは畢竟これあるが爲であつた。更に顧みると『小說神髓』が極力稗史を斥け馬琴輩の小說の人情に戾る點を指摘してから、小說といへば寫實小說に限るやうに思はれたが、また傳奇小說の必ずしも寫實小說に劣らざるの理を知り、『八犬傳』『水滸傳』以上の傑作長篇が西洋文學に存するを知り、これに倣つて沈滯した小說壇の振作を計らうともした。廿六年に「讀賣新聞」は懸賞を以て歷史小說を募集した。應募者の多い中で、選に當たのは高山樗牛の『瀧口入道』であつた。材を『平家物語』に取り、さしも時めいた平家が衰微に歸する悲劇を背景として、瀧口入道

が苦衷横笛が果敢ない戀の最期を敍した。勿論この前後に三昧學海の作もあつた。村井弦齋に『小弓御所』『衣笠城』『櫻の御所』等の作もあつた。なほその外にも、塚原澁柿園があり、遲塚麗水があるが、當時の讀者は多く弦齋の作の平易なのを歡び迎へた。

併し、これ等の歴史小說が、果して期待した如き結果を得たかといふに、到底その半をすら實現することが出來なかつた。かの『瀧口入道』も、たゞ人物を歴史に假り來つたといふのみで、當時期待せられた如く過去の人間と天道とが關係因果した面影を髣髴せしめるには遠いものであつた。その結構脚色は單調に陷つて、たゞその詞藻の誦すべきがあるのみである。歴史的抒情詩とも稱すべきもので終つた。學海・三昧・等の作は正史野史に拘泥し、風俗言語史實に囚はれ、時代を描き出すべき資料の末に齷齪して、歴史小說の本領を忘却してゐた。

かくの如くにして、唯一の頼みとした歴史小說も、徒に喝望の聲を大いにせしめたのみで終を告げた。過去に卽して人生を視ようとする態度を押し擴めて、現實に就いて人生を観ようとするに至つて、心理小說觀念小說を起し、小說壇は再び活躍することとなつた。

第五章　劇界の動搖

默阿彌によつて代表せられた舊劇は、勿論舊思想舊趣味の發現であつた。維新後太平の餘澤を樂むに及び、社會の優勝者は漸く耳目を慰むべき娛樂を要求した。然しながら、そこには一難事が横つてゐた。今の上流社會は多く薩長の武士、さなくとも勤王や維新の事業に奔走した磊落粗暴の徒で、到底さきの上流社會に於いて喜ばれた典雅な能樂に滿足する者ではなかつた。新時代の中流以下の人士も、亦すでに相應の新教育を受けたものとて、劇場を以て耳學問視した舊平民と好尙を同じくすべきものでもなかつた。隨つて荒唐無稽な歌舞伎劇に滿足することが出來ない。要するに、上流にもせよ、中流にもせよ、新時代の人の頭に印せられたものは現實であり、實利實益であつた。過去の夢幻を破壞しつくして、新しい現實を築き上げた彼等は、過去を演ずる劇にもなほ現代の事象を見出さなくては滿足しなかつた。加之、西洋劇に關する知識の弘布は、顧みてわが劇の蕪雜陋猥を見、その缺點を認知するに至つた。こゝに於いてか、劇の改良は各方面から企圖せられた。

當時俳優もその地位を高めて、以前の河原乞食でなくなつた。みづから社會を教訓し指導する者を以て擬した。教導職の稱呼が、常に彼等の口頭に上つた。これは米國前大統領グランドが來訪の節、新富座に於いてわが演劇を觀覽に供したが如き、依田學海によつて團十郎・宗十郎・菊五郎・が松田大書記官邸に於いて伊藤伯爵に面接した如き、更に聖上陛下が井上伯爵邸に臨幸の際親しく團十郎・菊五郎・等の演技を見そなはされた如き出來事があつた爲である。

上覽劇の前一年、卽ち明治十九年に於いて、早くも演劇改良會が組織せられた。末松青萍の主唱に係り、藤田鳴鶴・外山正一・が之を輔け、矢田部尙今・矢野龍溪・福地櫻痴・等も亦同志として贊同した。その企圖することが、大凡三つ、從來の演劇の陋習を改良して好演劇を實際に出さうとすること、演劇脚本の著作をして榮譽ある業たらしめること、構造を完全にして演劇その他音樂會・唱歌會・等の用に供すべき一演技場を設立しようとすることとであつた。やがて演藝矯風會が起り、次いでその後身として演藝協會が起り、美妙・篁村・思軒・鷗外・紅葉・南翠・逍遙・等を始め當時知名の文士は皆これに携はり、俳優も亦參加し、脚本と實技との二方面から大いに爲すところがあらうと企圖した。されど、その計畫は、要するに改良會と大同小異である。これ等を中心として、雜誌に、新聞に、演劇

に關する論議が見えざるはなかつた。所詮は、劇を以て大なる綜合美術と見るのではなくて、娛樂本位に立てようとする論に過ぎなかつた。然しながら、紛々たる改良論を通覽すれば、自ら二方面に分れてゐた。一は舊劇の趣味の低下を向上せしめようとするもの、猥雜と殘忍と野鄙とを避けて高尙にして優雅なるものを出し、そして題目を忠孝節義に取らうとするもの、卽ち道德的標準を以てする論。その主張の餘弊は詩趣の缺如となり忠と義との傀儡を出さうとした。詩と實際に於ける善惡との別を辨ずることが出來なかつた。一は舞臺の上のすべてを現實化せんとするもの、科白から衣裳の末までも誇張せられた形迹のあるものを斥け、チヨボ·合方·ツケ·などの技藝に必要のないものを排し、西洋劇の如くならしめようとする技藝に關する論。前者を理想の論といふべくば、これは寫實の議。これも亦幾多の謬見を有するものであつた。我が國の劇が元來準樂劇から發達したことを忘れてゐるもので、又徒に寫實模倣の枝葉の末に迷ふものであつた。これ等の論議の出づるのは、畢竟する所、かの歐化主義の趨勢を逐ふものであつた。

劇の改良論者は本末を轉倒して區々たる點にのみ着眼した。この謬見を矯正しようとしたのが逍遙であつた。曰はく末技を云々するを止めよ、まづ事象の眞を寫して

劇の本領を發揮せよと。鷗外も亦、改良論者が劇場の建築を前にして脚本の改善を後にするを見るや、劇場の簡古素樸にあるべきことを唱へた。更にまた、實際主義の演劇の境に入るを喜べど、極端な模實主義の之を侵して理想的妙處を滅亡せんことを慨いた。こゝに於いて、氏はその弟の劇評家三木竹二と共に、カルデロンの『ザラメヤ村長』を譯して『調高(シラベハタカシ)矣洋絃一曲』と題し、レッシングの『エミリヤガロチ』を譯して『折薔薇』と題して出した。前者はその舞臺に適合することの沙翁に劣らざると、結構が邦人の嗜好に適する爲に譯したもので、隨つて白も我が語調をまなび、グレスホォは團十郎、ホアンは菊五郎、大尉は左團次の慣熟の語勢に近かしめるなどの用意を取つた。その譯し振りについて論難の聲も聞えたが、當時の狀態は未だ實演することが不可能であつた。

兎に角、折角企てられた演劇改良の案は、種々の點に於いて缺陷を殘した。演藝矯風會の事業として殘したものは、篁村・南翠が二三の作に過ぎなかつた。然しながら、その努力、その理想に趨り寫實に赴きし論議は、こゝに一種の史劇即ち活劇を得て始めてその終結を告ぐることが出來た。これは實に當時勃然として起つて、つひに一代の風潮を形づくつた歷史研究と相接觸した爲である。ひとりこれのみならず、當時の劇の觀賞家たる顯官紳士の上流社會は、多く地方の出身であつて、一攫千金の富豪の徒も多く

は地方から移住した者であつたので、江戸の町人の家庭の狀態を描寫した世話物に對しては、さまでの感興を惹き起さなかつた。この故に、活歷の主唱された以前已に史劇卽ち時代物はいちはやくも動き始めて、默阿彌の如きもその最も得意とした世話物殊に白浪物の筆を封じて、史劇の筆を執らねばならなかつた。たどたどしい史實の知識を以てした默阿彌にひきかへて、進んで正史に根據を置く劇を作り活歷流行の素因を成したものは學海であつた。學海はもと漢學の出で、漢文の風格は殆どその堂に入るものであつたが、夙に演劇の嗜み深く、小永井小舟と共に「新評劇曲十種」の著があつた。又從來行はれるところの俗曲を改作しようとする意があつた。俗曲は、舊幕の頃には、もと士君子の翫ぶものではなかつた。故に俗曲には忌むべき花柳の景情を歌つたものが多い。これを改善せねばならぬといふのが彼等の主張であつた。劇に對してもこの主張を以てし、一に道德的標準を高めようとし、加ふるに史實に忠であらうとした。曰はく、劇の演技は出來得る限り實際に近からしめ、その根本の事實は飽くまでも歷史に據り、たゞ許容せられた範圍に於いてのみ許多の脚色を點綴すべきものであると。

學海はこの主張を實現しようが爲に、まづ筆を鼓して『吉野拾遺名歌譽』を作つた。その附記した所を見れば、曰はく「戯曲は男女の情態を描きて情義二ながら得しむるを主

となし、傍弓馬衣冠の故實を示し、又言語を述ぶるに雅にして耳に遠からず、俗にして野鄙猥褻に入らざるを旨とす。又殺伐慘酷なる形を示さず、又悲痛哀嘆に過ぎて衰弱狼狽の狀を現さず、哀むと雖勇壯奮烈の意を寓し、武勇を示すと雖酷薄粗暴の所爲を見する事なし」と。學海はまた『文覺上人勸進帳』と『拾遺後日連枝楠』とを同一の主張と作意との下に作つた。但し、これは川尻寶岑との合作に係るものである。前者は『那智瀧誓文覺』と改題して、その作の成れる年卽ち二十二年に上場した。全然『源平盛衰記』に據つたもので、殊に勸進帳を讀む場と院宣を傳へる場とは正史をさながらに取つてゐる。之を從來現はれた袈裟の貞節を脚色した戲曲に對比して見ると、たゞ盛遠が陽に袈裟を慕つたなどといふ踏襲のない點が、當時作者の苦心の存する所として認められた。或は全篇の大綱は源氏の盛衰を示すにありといへるが如きは、飣餖の拙を見ると評せられた。それは兎も角も、劇場外のもの〻作が上場せられた嚆矢として記憶すべきものである。その外題を改め、作者をも竹柴其水と稱したことの如きは、當時の狀態としては止むを得ざることであつた。

學海の改良意見は兎もするとかくの如く枝葉の末に趨り、その作も史劇としては性格の描寫もなく、輕快な趣味もなく、たゞ敍事を以て足れりとする風があつた。要する

に、脚本界は改良論に動かされるところが多かつたけれども、その效果は貧弱なものであつた。然るに、こゝに舞臺の人には識見と技能とを以て一代の雄と稱せられた團十郎があつた。思ふに、團十郎ほど當時の社會の好尚を體現し得たものはなからう。その骨相・風采・は已に一代の理想的人物即ち當時に於ける國家料理の人物を現はすに適してゐた。かの含蓄のあり暗示力のある藝風は、多くの俳優が區々屑々の末技に心を苦しめるのとは雲泥の差があつた。この藝風をよく會得したものは默阿彌であつた。その藝の簡撲洒脱豪宕富貴の態に適するを知つてゐた。また濃艶輕快下卑の趣の缺如して居ることをも知つてゐた。この特性を發揮せしめるには、史上の人物が最も好適なることをも知つてゐた。加ふるに、社會の好尚が時代物にあるを顧みて、過去の人物を假り來つて、之に盛るに團十郎の藝風の特異な點を以てした。かくの如くにして成つた史劇には、いかで眞の意味に於ける史的人物の活躍を期待することが出來やう。平民の作者たるその人には、充分に新思想の上に立つべき新時代物は作り得なかつた。故に、その洗煉せられた舞臺的效果の操縱以外には、團十郎の技倆を以て作の缺陷を充すに過ぎなかつた。かくてかれは、かの改良論に動かさるゝや、まづ意味のない故實調となり、考古的大道具の工夫に終るのであつた。すでに十六年の頃、菊五郎が、小說石魂

録』を上場するや、北條時代の風俗に就いて穿鑿するところがあつたといふ。その風が學海に至つて極點に達したのである。而も團十郎はかの改良論に耳を傾けるに至り、默阿彌の作に多く期待することの謬れるを悟り、改良論者の作をも上演しようとした。されど、學海をはじめ、それ等の作は實際上場の脚本としては不完全な點が多く、遂にその意を伸べることが出來なかつた。活歷といふ藝風の活動は、政論家にしてまた幕府滅亡論』の著者として知られた櫻痴との提携によつて盛んになつた。櫻痴は演劇の改良に就いては、學海の如き急激な歩武を進めようとする者ではなかつた。いはゞ漸進の態度を取つてゐた。もし學海の作が上場せられたのを演劇史上に於ける珍奇な現象とすれば、これは尙進んで歌舞伎座の立作者として脚本の作をなすに至つたことを驚かねばならぬ。こゝに始めて我が演劇史に横はれる固陋な習俗を破り脚本家も補綴を以て足れりとする窮狀から脱して、一の堂々たる文學者として待遇せらるゝに至つた。俳優の頤使に唯々諾々としてゐたものも、今は進んで俳優を役し、自己の作意を實現させるやうになつた。然らば櫻痴の作は如何。彼に『春日局』『關原誉凱歌』『大久保彥左衞門』『日蓮記』の好評嘖々たるものがあつた。これ等以外、なほ幾多の作があつたとはいへ、その多くは櫻痴の演劇に於ける理想を實現したものではなかつた。すでに

その意見が漸進的であつたこの作家は、まづ主として團十郎の藝風に適合することに力めた。新舊劇の折衷、そこにその立脚地を定めた。幾多の非難は隨つて起らざるを得なかつた。曰はく、これ性格劇を距ること餘りに遠しと。曰はく、これ舊劇の特長なる夢幻的妙味を全然廢絶するものと。その描く所の人物は、殆ど同一樣の性格、卽ち類型的で、その成敗の因果は餘りに單純に、餘りに獨斷的であつた。要するに、櫻痴の史劇は史上の人物によつて人生を示さうとするものではなくて、只團十郎の型に適合する小なる範圍に人生を拘束しようとするのであつた。されど櫻痴はよく團十郎を生かして用ゐた。當時の民衆の意に投ずべき團十郎の特性を利用した。題材としては忠臣義士節婦烈女を取り來つた。この點に於いては頗る成功せるものであつた。しかもこれは默阿彌が團十郎の藝風特技を餘すところなく發揮せしめたに反して、その範圍を狹くしたものと稱せられた。かくして彼は團十郎を窮地に陷れたものともいはれた。團十郎の藝が同一軌に出でて變化に乏しいものと成り、無技巧ともいふべき肚藝も、つひに一般觀客に了解せられず、漸くその平板枯淡に倦まるゝや、櫻痴の作も隨つて世に迎へられなくなつた。さきの活歷又は寫實主義の反動として、再び舊樣の趣味依然たる歌舞伎劇に歸らうとした。一たび皮相的寫實主義に迷つた我が演劇界は、迷

ひ迷つて再び故の棲處に歸らうとする。十年の努力もつひに空しからうとする。この危機を見て默する能はず、椽大の筆を鼓して「早稻田文學」誌上に過去に於ける史劇の變遷を敍して、近松・出雲・から五瓶・南北・に及び、更に近くは默阿彌から學海・櫻痴・に至り、縱横評論して、わが舊劇の特長と缺點とを擧げて「夢幻劇論」を成したのが逍遙であつた。これは實に二十六年から二十七年に亙る大議論であつた。氏は近松から默阿彌までの傳奇的史劇を總稱して、これを夢幻劇といつてゐる。その作意が現實を離れて夢幻に似てゐるからといふのである。荒唐な脚色、妄誕な事件、不自然な人物、不條理な結構、散漫な關係、若しくはその變相と矛盾とに富めるが爲に旨の一致を缺ける、事業の意表に出づる、事物の誇張せられてゐることは、皆夢中の幻相でなからうか。これを以て舊史劇の缺陷とすれば、その長所たる點は背理の裏に潜んでゐる至醇、不自然の中に穿たれてゐる至理といふことに於いて見るべきである。その形の美ではなくて、その神髓である。故に、この缺陷を捨て、この特長を利用しようとするものは夢幻的と活歴以外の一新劇を興すの要がある。この夢幻相の由つて出づる所以は、その作が敍事詩の體を脱しないところのあつたからである故に、まづ劇詩と敍事詩との別を嚴正に別つところの作を以てせねばならぬ。劇をして旨の一致を具せしめねばならぬ、また性格を

して諸作業の主因たらしめねばならぬと。かやうにして大いに性格劇を鼓吹する所があつた。

鷗外は「柵草紙」に於いて之を評していふ夢幻劇の造語は新しけれど、その實は舊い、夢幻劇は西洋審美家の所謂情劇である逍遙の説く所の未來の史劇は、今の西洋の純劇又性格劇に過ぎない、されば逍遙が提起せる改革案中の三條の如きは、近時の審美學上の書を繙いて純劇の條を檢せば、誰かその必備の資格中にこの二條あることを見出さぬものがあらうかと。寧ろその意見の平凡なことを怪しむの狀があつた。しかし逍遙の意見たる、これを泰西の純劇性格劇に接したものから見れば、或は平凡の嘲を免れぬ所はあつたとしても、わが劇壇の當時にあつては實に青天の霹靂であつた。世は始めて劇の嚮ふべきところを知つた。逍遙は自らその性格劇の範を示さうとして、かの「小説神髓」に於ける「當世書生氣質」ともいふべきものを作つた。その發表は次期の劈頭に於いてせられた。

第六章　新體詩の新調

『新體詩抄』は詩壇に一波を擧げた後、杳としてその跡を絶ち、第一集より漸次號を逐ふべき豫定は實行せられなかつた。『詩抄』について『新體詩歌』出でて十五年以降十九年までに第四集を出したが、大方は『詩抄』の作を轉載するに過ぎなかつた。併し新作の中には、政論家が時に感想を新詩形に寄せるものがあつた。小室屈山に「自由の歌」「外交の歌」があつた。用語は蕪雜であり、思想は粗野なものに過ぎなかつたが、なほ一種の氣慨の見るべきものはあつた。集中の作者未詳なる「櫻井驛遺訓」及び「小楠公」の如きは、當時兒童の間に高唱せられたものである。されど沈滯は永く續いた。時に湯淺半月の敍事詩「十二の石塚」の如き長篇があつたけれど、未だ以て斯界を覺醒するには至らなかつた。

然るに二十年山田美妙・尾崎紅葉・丸岡九華の編輯によつて、『新體詩選』が出で、落合直文が「孝女白菊の歌」を「東洋學藝雜誌」に出すに至つて、再び活躍の緒に就いた。直文の「白菊の歌」はもと井上巽軒の漢詩を七五調に譯した長篇で、世に推稱せられた事は發表

以後數種の雜誌に轉載せられたのでも著しく、又一時は青年の間に「阿蘇の山里秋ふけて眺さびしき夕暮に」の句が常に唱へられた。二十二年、鷗外等が組織した新聲社卽ちSSS同人の譯詩集『於母影』の「國民の友」に出でたのは斯界の運動に多大の貢獻をなしたものであつた。その同人とは、鷗外及びその妹の喜美子と直文・市村器堂・等で、それらが獨詩・英詩・漢詩・を和譯し、或は漢譯したもの十一篇、外に『平家物語』の鬼界島の漢譯詩一篇を添へてゐる。この譯詩の中には獨逸のゲーテ・ハイネ・ホフマン・あり、英のバイロン・シェークスピヤ・等があつた。押韵の試や種々の句法に苦心の跡の歷々たるものがある。『於母影』の「國民の友」に載せられた年、同誌上にまたゲーテ・シルレル・等の獨逸詩人の短詩を譯したものが載せられた。引きつゞいて美妙の新作も、そこに發表せられた。美妙はその以前すでに雜誌「以良都女」の紙上に於いても、種々の試作を出して世に問ふ所があつた。「薔薇の使」には八六調を、「世はそのまゝ」には五五調を試みた。然るに、二十三年「醉沈香」を「國民の友」に出すや、附記していふ「SSSの社中の人が珍しく韵文に一歩足を踏み入れられましたが、終に世人は冷淡に看過しました。今主人はこゝにまた韵文を草しても冷淡に取扱はれるのを知つて居ますが、今日に於いて向後の日本韵文はどうしたらいゝか、斯うもしたらとの野心の餘りこしらへた物です」と。かういふ

抱負のもとになつた作の內容は、美妙が詩情を發しようとするものであつた。小說「蝴蝶」が裸體美人の挿畫のために發賣禁止となつたを憤り、社會の僞善を嘲り、流行を諷するものであつた。その七五調の如き、巧に詠みこなされてゐる。また「つぼすみれ」は口語體の七五調を以て、成功せるものと稱せられた。

この年宮崎湖處子の「歸省」が公にせられた。全篇無韵の敍事的抒情詩といふべく、歸省二週日の感想見聞を錄したものであるが、外形內容共に清新の色調に滿ちてゐる。歐文の情致を宛らに傳へて、自然の描寫が精緻を極めた。文中處々に挿める新體詩數篇、皆自然の深い思を寄せ、殊に作者のつねに愛唱して措かなかつた陶淵明とワーズワースの調の掬すべきものが見える。爾來、湖處子の詩は續々「國民の友」誌上に出でたが、大方は「歸省」篇中のものと同工異曲の作であつた。

湖處子の清雅に對して、飄逸一道の奇氣を藏してゐたのは中西梅花であつた。梅花は後年狂氣した者であるが、それか否か作中には抑へがたい情熱が含蓄せられてゐるもし詩人がその情熱を標準として月旦せらるるものならば、當時にあつては詩人たるものは唯一梅花あるのみであつた。「癡魂」また「出放題」の吟の如きは、世の宗教家哲學者を諷したもので、その思想の據つて來るところは老莊であつた。詩集に「新體梅花詩

集」がある。個人の詩集の公にされた權輿である。卷頭の長篇「九十九媛」は集中最も世に推賞せられた作である。

かゝる中に、我が新體詩界は、未だ創作に於いて世の耳目を驚かすに足るものゝ出でないのに、まづ評論を以て賑はされた。石橋忍月が「國民の友」に「詩論」を揭げたのに次いで、美妙の『日本韻文論』が出でた。說く所は、韻格の制定といふことが、その骨子である。韻格の制定は韻語卽ち詩語を限るの要がある。韻語のつらなりて句をなせるもの卽ち韻句を、散文句卽ち散句と區別する。韻語韻句の完全な節奏を成す標準は韻律であるが、それは音の抑揚によりて決する。揚音をば高調長音、抑音をば低調短音と名づけ呼ぶ。この抑揚音にてはくもが蜘蛛となり雲となるやうに一定せざるもの多く、抑揚自在である。これは漢英獨の音と異なる所で、我が國語の奇なる現象、作詩の上に此上ない便利である。將來の作詩はこの高調長音低調短音の巧な交錯によつて成されねばならぬ。不可思議と實體論と理學の進步とは詩美の敵である、詩はこれに逢ひてその根柢を撼かされようとするものがある。韻格の制定は詩を開化に伴はしめて、その壽を永からしめようとするもの、これによつて我が古來の詩歌の弊たる餘情主義を更めまた厭世思想或は纖弱な思想を破り、將來に於ける詩美の基を築き上げん。こゝに始

めて世界的韻文は成らんと。

この論は忍月・不知庵・鷗外・の批評を促して、一時喧傳せられたが韻格の刪定そのものは得る所なくして終つた。美妙はまた數種の詩を殘して詩界を退いた。同じころ、嵯峨の舍は北邙散士と號して、その小說に見るが如き淸新の作を出した。美妙の作は『青年唱歌集』に收錄せられ、北邙のは『文の庫』に收められた。二十五年に至つて詩論また盛んに、旗野櫻坪に「俗歌韻話」があり「無韻非歌論」があつた。大西操山も「詩歌論」の題目の下に美學上から詩歌の內容に就いて說く所があつた。そしてまた、批評界から詩人に對して新たな題目を得て大いに活躍すべきを勸めるものが多くなつた。今の新體詩は新社會の思想を自由に發表するものにあらず、歌ふところは詠物詠史のみ、何ぞその詩題を一變し、風雲月露の自然界より人生・自由社會・人物・といふ人間世界に移轉せざると、憲法を破らんとする頑迷の徒に光明を示せ、我が國民が進んで到るべき光榮ある民政國を歌へ、我が國民を習慣と壓抑より脫れしめる自由の精神を詠ぜよ、四海閑田なきに農夫ひとり南畝に泣くの慘狀を歌へよとは、詩人に向つて紹介せられた幾分の新詩題であつた。詩人の自覺といふことが、之に伴つて他の方面からも說かれ、造化人間の純美を感得し、理會し、且つ活畫として同胞に示すにあることが唱へられた。

かゝる傾向の下に詩壇の波瀾は漸く高まつて、戸川殘花・磯貝雲峯・北村透谷・等出で、また壇場も「國民の友」以外「女學雜誌」や「日本評論」が加つた。雲峯にはバイロンの飜譯があり、スコットに模倣せる史詩「知盛」があつた。殘花は「女學雜誌」派を代表せる者ともいふべく、巧麗流暢の詩風を以て稱せられた。七五調は此人を得て完璧に近きまでに進歩したとも評せられた。「朝の歌」「夕の歌」の如きはその一例である。「女學雜誌」に毎月白表紙赤表紙の二種を發刊してゐたが、その白表紙の方から「文學界」が生れた。元來「女學雜誌」は岩本善治の主宰の下に宗教・文學・その他社會の現象に就いて評論し「國民の友」と相對抗するに足る勢力を有してゐたものである。透谷は早くからこれに厭世詩人と女性、或は處女の純潔、或は戀愛を論じたが、その雜誌が、純文學の見地に立つて執筆し難い事情のあるに鑒み、こゝに「文學界」を創刊したのである。かくして詩人は拘束せられない熾烈な情緒を歌ふ機關を得て、詩界の新調が大いに興起した。この同人に平田禿木・島崎藤村・戸川秋骨・馬場孤蝶・星野天知・があつた。皆評論に新體詩に縱横の筆を揮つたが、その眞の活動は次期に於いて見るべく、こゝには主として透谷の奮鬪が見らるべきものであつた。透谷は激越な調を以て人生を論じ、他界を論じた。「人生に相渉るとは何ぞや」の如きは、恰好の代表論文であつた。透谷は常に半ば病める人で

あつた。隨つて「山庵雜記」に於いて見るが如く、病に對する深い理解と同情とを持つてゐた。これ等の情緒は相依つて詩に發せねばならぬ。二十二年、早くも長篇「楚囚の詩」を作つて、國事のために縲紲の辱を受けた囚人の身を詠じた。爾來相踵いで「行きたふれ」「螢」「雙蝶の別れ」「眠れる蝶」などを出した。中にも出色の作は二十四年に成つた『蓬萊曲』であつた。この形式は未だ世に見ることの出來なかつた劇詩を以てして、三齣八場の長きに及んでゐる。世を呪ひ、人を苦め、戀を惱み、不滿と不平とに驅られ、一度は神に憧憬して蓬萊原頭を低徊したれど得る所なく、更に靈山に惡魔と戰つて自憤やみ難く、死滅を以て隱家とする外はないといつて、遂に深壑に投じた憐むべき人の子の上を敍したもの。その鬱勃たる覇氣と情熱とは、つひに世に容れられなかつた薄倖な透谷の實生活と對比する時に、これやがてその悲壯な心情の赤裸々な發露として首肯せられる。按ふに此の作の價値はこゝに存してゐる。用語の雅醇ならざる、結構のバイロンのマンフレド、ゲーテのファウストを模せるなどは、必ずしも指摘するの要を見ざる所であらう。やがて次期に於いて澎湃の濤を揚げたロマンチック・ムーヴメントの先驅として記憶せねばならぬ。透谷は友の死亡に對して哀詞を草した頃から、頻りと我を削り行く跡を示したが、つひに二十五年五月に自殺して痛ましい最期を遂げた。こ

の期に於ける新體詩は、透谷の死によつて殆ど結末をつけ、更に日淸戰役によつて次期の活躍を始めようとした。終りに臨み、直文に『騎馬旅行』の長篇があり、鹽井雨江にスコットの『湖上の美人』の譯があつたことを附記せねばならぬ。また與謝野鐵幹が、別様の意味に於いて、大聲を發するに至つたことをも附け添へて置かねばならぬ。

第三期　日清戰役後

第一章　日清戰役と文壇

日清戰役は空前の大事變であつた。國民が擧つて激昂興奮の狀に入つたのは道理である。我が軍の榮譽な義戰であることを思へば、如何に高潔正大の氣にうたれたであらう。我が連戰連捷の快報に接しては、如何に國民的自負心に驅られたであらう。詩人の情はいやが上に熱した。しかもなほ、殉國の義烈、悲慘の活劇、戰後の寂寞、幾多の題目の日常見聞することの出來ないものを與へられた。新體詩之を歌ひ、小說之を敍し、劇之を演じた。戰爭に關する數種の雜誌と畫報とは相踵いで出でた。篁村・松葉・南翠湖處子・漣・柿園・櫻痴等頻りに筆を鼓し、外山正一「新體詩抄」以來の沈默から出でて「我海軍」「旅順口のヒーロー可児大尉」を歌つた。殘花に「靈鷲高千穗」の吟があつた。小說脚本中の尤なるものには、松葉の「昇旭朝鮮太平記」があり、櫻痴に「豐島嵐」があつた。その外、創刊せられた「文藝俱樂部」「太陽」「新小說」上に數多の作が載せられた。文運の興隆はこの時に極れるかの狀を呈した。併し、それも一時の夢であつたか、やがてもとの沈

滯に歸つた。畢竟、想は淺く、趣味は低く、取材の範圍は狹く、たゞ一時の情を寓するに過ぎない際物文學であつたからである。時好に投じたものはある、絕對的價値の大なるものはなかつた。大勢から之を見ると、戰爭文學の如き、所詮はこれ水上の一泡沫・沙上の樓閣・に過ぎないのであつた。

さりながら、空前の大戰爭たる日淸戰役が、我が文壇に寄與した所は、斯の如き憐むべきものであつたらうか。戰爭そのものが與へるところは或はこれに過ぎなかつたらうが、その影響するところの廣く且大なるものゝあつたことは之に止まらない。この戰爭の起る前一年、二十六年頃からの文壇の狀態を顧ると、前にも記せる如く、不振との評を免れなかつたが、これに反して思想界の現象は未だ見ることの出來なかつた程生生の氣を具してゐた。從來世間と交涉の淺かつた宗教や哲學は、種々の方面から接觸する樣になつた。保守派と自由派と相分れて、神學上の異見から相軋轢した基督教はおの〳〵根據を世間人の中に立てようとし、「六合雜誌」「宗教」「三籟」の評論上、頻りに唱導する所があつた。佛教も亦宗教教育衝突問題以降、退嬰の態度を改めて、進んで世と相近づかうとした。玄妙深遠な宗教としてのみ仰がんことは時世の許さゞるところ、或は哲學上から、或は歷史上から、批評研究した新佛教を建設しやうとするものもある

に至つた。哲學も亦漸く社會に普及して、書齋を出でて街頭に立つの狀があつた。西洋哲學の研究と共に、東洋哲學も研鑚せられ、東西の精髓を渾成した我が新哲學を樹立しようとの希望も生ずるに至つた。抑〻かゝる現象は何によつて起つたか。明治に生れ明治に養はれた青年も、はや三十歳に近づいた。舊習慣と舊思想とを離れて、新たな根柢の上に立たうと欲した。その信仰追求の念が、こゝに宗教界・哲學界の動搖となつたのである。哲學精神の動くところ、純文學の方面に於いても、その研究は科學的となつた。わづかにハルトマンの美學が二三の徒によつて唱へられた頃とは異なつて、その美學は歡迎せられて審美の論は屢〻雜誌の紙上に現はれた。美の根本性質が說かれるばかりではない、これを規矩とし標準として、小說詩歌は批判せらるゝに至つた。併し、かやうに美學は盛んになつたものゝ、それは文學の理論的方面に止り、直ちに創作を振起するものではなかつた。思想界の活動すればする程、批評壇の活躍すればする程創作界は一所に停滯するのであつた。換言すれば、內に藏するところが餘りに深く大くて、外に發する所以を知らなかつた。その發露することの出來ない煩悶、それが一轉してかの遊俠探偵の低級文學を生じて、辛うじて慰藉したのではなからうか。

かゝる中に戰爭は起つた。感情の激昂動搖、その內に藏するものが迸り出づべき途

は始めて開かれた。二十六年以來蓄積したところが溢れ出づるは今であつた。ひとりそれのみならず、戰爭はなほ多く指導する所があつた。平淡の間に人生の奥祕を見ることは難い。然し激昂の際に人情の機微を見、人情の精華を見、國民性の神髓を明かにするのは易い。かくても人生の深奥と自然の祕義とを見ずやといはぬばかりに、幾多の活劇悲劇はこの大戰役によつて目前に展開せられた。前期の娯樂的小說はいかで再び起ることが出來やう。活歷の藝風に滿足する事が出來なくなつて、性格劇の盛んになるのもまた言を俟たぬ。

戰爭は作者及び讀者をして現實に密接せしめた。過去の回顧といふものが少くなり行き、人生そのものを觀ようとするので詩歌は自ら主觀的となつて、抒情詩の發達を促すに至つた。目さきの宗教・哲學・の動搖は、更に抒情詩の素を作るものではなからうか。いまだ把持せられない人生の理想にあこがれて詩人は心の動搖をさながらに描き出さうとした。新體詩人が或はワーズワース・シェレー・に私淑するもの多きを加へて行つたのは、自然の趣向といはねばならぬ。

戰勝は國民的自負心を喚起せしめた。國民が自己の力量を認め得たのはこの時であつた。我が國は維新の後に世界の一國として數へられ、國粹主義の行はるゝや國民

として自覺し、こゝに世界の一國と伍するに足るの自覺をなし得た。隨つて他を因襲し模倣するの陋習から脱して、國民的文學を建設しようとするに至つた。そして、その國民としての自覺が、思想界に起つたのが日本主義の宣傳であつた。

日本主義は三十年に至つて、井上哲次郎・木村鷹太郎・高山林次郎・等によつて發表せられた。これは從來唱道せられた歐化主義と國粹主義とを打つて一團となしたものと見るべく、過去に於ける日本を基礎として世界の長所を取つて新日本の新道德を樹立しようとした。日本國民の人生觀は日本主義に存すると呼號した。現世主義と國家萬能主義とを以て、基督教を排し、佛教を斥けた。その論旨に空漠な箇所多く、當時他の一勢力であつた世界主義との間に起つた論爭の如き、獨斷に過ぎた點が少くないが、戰後の國民は翕然として之に耳を傾けた。

日本主義は國民的自覺運動に伴つて起つた一新潮に過ぎない。これによつて、國家個人の問題を解決して、勝を國家に讓つた。然るに、國民的自覺は再び國家對個人の問題に歸り、つひには前者と全然相反して個人に勝を讓るの時が來た。これが三十四年以降のニーチ哲學によつて代表せられる。こゝに至つて、我が文學はロマンチシズムの運動に入るのであつた。しかし今は筆を反して文學現象に歸り、まづ戰爭によつて

深みを與へられた小說壇の趨勢を敍することとする。

第二章　心理描寫の作風

撥鬢小說・探偵小說はまた顧られず、歷史小說は期待に背いて、小說壇の沈滯せる際、漸く忘れられようとする寫實派の苦衷は如何ばかりであつたらう。その嫌忌せられたのは外面の寫實に止まり、皮相の描寫に過ぎなかつたからであつた。故に、之を救ふの途は一歩深く人生の內容に立ち入つたものであることを要する。性格發展の描寫、心理推移の描寫の精緻を求めるのが、最好の徑路であつた。されど、心理小說は、その觀察やその描寫が、久しく娛樂本位の藝術の上に立てる者に取つては蓋し至難の業であるされば、まづ心理のすべてに亙れるものを後にして、その一端から始まつた。所謂觀念小說がそれである。當時はこれをも直ちに稱して心理小說といつた。しかし、それは狹義に解すべきものであつた。

二十八年の春であつた、「文藝俱樂部」に一つの新小說が載せられた。曰はく「夜行巡査」。作者は紅葉門下の泉鏡花。職務に忠實な一巡査がある。深夜密行巡査としてすべての力を盡して職に當つてゐる。一人の醉漢があつて辛うじて一女に助けられて

家に歸らうとする。女は巡査と相愛の間で、而もその戀は父なる醉漢の許さゞる所である。父は巡査を怒罵し惡罵して、二人の間を割かうとする。巡査はそれを聞きながら敢て怒らず憤らず平然として二人の後に跟隨する。醉つて過でもあらうかとの職務上の懸念からである。果然醉漢は濠に落ちた、巡査は私の怨を忘れて水に入つて之を救ひ、自らは溺死する。この一篇は戀をも私をもたゞ義務のもとに抑壓しようとする一觀念を描き出したものである。觀念小說にこゝにその緒を開いた。「外科室」と題する一篇も、また觀念を取り扱つたものである。

眉山も亦時を同じくして觀念小說の作風を提げて起つた。一種の社會觀念を以て纖麗の筆を運んでゐた。名利のために父はその女の貞操を犧牲にせしめ、人は名利を以て處女の純潔を弄ぶといふのが「書記官」。慈善家が冷酷な社會のためにその家產を失ひ、しかも世に顧られないのを憤つて盜賊に陷るといふのが「うらおもて」。

觀念小說と軌を同じくして、しかも人生の暗黑な裏面に專らなものを、その傾向から目して、深刻小說とも悲慘小說とも稱した。柳浪の作が卽ちそれである。痘面でこの上なく醜く而も貞節の厚い一婦人が、ともすればいひ寄る男を貞實のために涙を吞んで毒害して、自らも死ぬといふのは『黑蜥蜴』。變目の醜さに加へて佝僂の悲しい身が思

叶はないで殺人罪を犯す徑程を敍したのが『變目傳』。これ等に於いても見ることが出來る樣に、その描き出す所は、性格體質または境遇によつて人生の悲慘な事象を生ずることを、心理的に解剖しようとしたのである。そして、事件の結末は殺人自殺にして、その主人公は肉體か精神かに缺ける所のあるものであつた。この二作を出した翌二十九年には『白百合』及び『龜さん』を出したが、同年更に『今戸心中』『河内屋』等を出した。深刻小說は一轉して心中小說となつた。近松に心中を描いた、それは光明に滿ちたものである。然るに、これは戀愛以外幾多の事情の纏綿してゐる、或は全然戀愛なくして境遇に左右せられて情死の悲慘な最後に至る。『河内屋』は殊に人物の描寫・心理の推移・會話の巧妙・を以て稱せられた。これと名を齊しくしたのは、心中物ではないが『畜生腹』であつた。雙兒を生んだ女が、惡婆に勸められて一兒を殺してからの煩悶を敍して、陰森の氣の人に迫るものがある。

かくて、三十一年に柳浪は『女仕入』を出した。從來の如く、徒らに深刻陰鬱な事象を描くに力めずして、心理描寫に心を致した。『羽拔鳥』に至つては、從來の作と趣を異にして、その結末は悲慘事を避けてゐる。心理小說の一部である特殊の態度を取つて特筆するにあらで、眞の意味に於ける心理小說に步一步と近づいて行くのであつた。この趨

勢は眉山にも見ることが出來る。眉山にあつては、三十年の『朧富士』『絃聲』に於いて、しかいふべきものがあつた。

鏡花に至つては觀念小說の傾向を、その極端にまでも推し及さうとするものがあつた。二十九年に出した『化銀杏』の如きは、すでに幻怪の域に分け入るの狀があつたが、更に『龍潭譚』『風流蝶花形』『淸心庵』『辰巳巷談』『梟物語』等に至つては、その描き出さうとする所は悉く神祕幽怪の趣、その筆は皆餘韻含蓄の多い奇矯の文字を以て滿ちてゐる。他の二家が漸次心理小說に入り、一般文壇もまたその旗幟の下に立つ時、この作者はひとり超自然に趣つて、現實を後にした。兎角の非難はあれど、また嘖々の世評を受けたかれもまた才筆といはねばならぬ。

されば、心理小說を以て一家をなしたものを求めようとすれば、まづ樋口一葉と後藤宙外とを推さねばならぬ。一葉は『闇櫻』を處女作として、明治二十五年中に七篇を作つたが、それ等は何れも古い技巧に囚はれたもので、作意もまた義理と人情との矛盾を描くに過ぎなかつた。然るに、二十八年に及んで、幾多の傑作は、相踵いで公にされた。『にごり江』『たけくらべ』『十三夜』『わかれ道』『われから』はその年の一年間に書かれたものである。『たけくらべ』には吉原近くに生ひ立つた少女が、いつつの間には人懷しくなり始

めて、快活の氣象も次第に沈鬱にうつり行く心理の變化を敍して精緻を極め『濁江』は酩酒屋の女の面白可笑しく日を暮らしてゐたものが自殺するに至る徑路を敍して、花やぐ燈のかげに涙の潜む樣を深刻に描き出してゐる。その他すべて心理を描き、世相を敍して、その深きに觸れるものがあつた。そして、その文章はやさしい中に力があつて、雅俗の語彙を役して、縱横意のまゝをなしてゐる。されど、一葉の作は、その文辭、その心理描寫のみに、價値を認むべきものではなかつた。一葉の初期の作に現はれた女は、境遇に社會に道徳に對して、絕體に服從する弱い女であつた。それが二十八年の作の女に至つては、社會の冷酷無情を悟り、人情の機微に觸れて後の、强い反抗力を持つものであつた。怖しいものは涙の後の女子心、これが彼の作の精髓であつた。その絕望の餘り、またその反抗の甲斐ないことを知つた時、一葉の女は果して如何なる態度を取るのであつたらうか。『十三夜』『この子』に見るやうに、子といふものが隱れ家である。もしその子といふものすらもない時の女の運命は如何なるものであらうか、そこに當代またと見ることの出來ない沈痛の人生が描き出されてゐる。一葉の萬斛の涙はこゝに注がれて、作者は作中の女と共に冷い重い呻吟をなしてゐる。

これを一葉その人の短くつらく苦しかつた生涯に照し合はせて考ふる時、纎弱な女

の身でありながらたゞ一管の筆を以て生活と闘つたことを顧みる時、その作は直ちに自己の苦衷を訴へたものとして見ることが出來る。そして「文學界」同人と相知り相交つたことが、從來の技巧脚色のために腐心する弊を脱却せしめて、活きた現實と相呼應せしむるやうになつた。故に、一葉の作には、個人としての經驗から來ることを認むると共に、時代の思潮から來たものゝあることをも認めねばならぬ。兎に角に、一年の間に卒然として幾多の傑作を殘したまゝに、二十五歳の短い生涯を以て去つたその人を思ふ時つひにその來る何ぞ遲くその逝く何ぞ早きかの感にうたれざるを得ない。

宙外は早稻田派文士の一人である。二十八年に、失敗の爲に發狂した實業家の心理描寫を試みた「ありのすさび」にその名を知られ、ついで「闇のうつゝ」にその名定まり、三十一年に「思ひざめ」「亂れ心」等の佳作を出だし、相ついで何れも世に迎へられた。宙外の作の特色は、心理を描いて精緻を盡し、微細を極めた點にある。自殺・狂死・の事件を取るけれども、それは必ずしも深刻を欲してゞはなく、寧ろ葛藤の複雜を示さうとするが爲であつた。その弊も亦こゝに存して、煩瑣に流れ、說明に過ぎるの譏を免れることが出來ない。宙外の他の特色は「ありのすさび」の秋の湖の敍事に於いて見るやうに、敍景といふことを顧みることであつた。また、他の諸家が多く都會をうつし出す時に、その作

は多く田園を舞臺とした。されど、未だ郷土色を云々する程のものではなかつた。

早稻田の東京專門學校から出した作家は宙外一人に止らない、水谷不倒があり、島村抱月があり、校友ではないが準早稻田派ともいふべき伊原青々園があり、三木天遊があつた。多くは評論に筆を執るものであつたが、また小說壇に相依つて一敵國をなすの觀があつた。殊に、三十年には機關雜誌「新著月刊」を出して、作り且つ論ずるに至つた。不倒の作は平淡を以てまさるもの、「枯野の眞葛」「錆刀」の如きがそれであつた。抱月の作はその形式の整備を以て稱せられるもの、「めをと浪」「月暈日暈」がそれであつた。青園の輕快にして滑稽に富める、天遊の詩趣に滿てる、皆稱するに足るも、いまだ創作を以ては硯友社に當ることは出來なかつた。しかし文壇に穩健の思想と周到の筆致とを附與した功は忘るべきでない。

當時また二十八年刊行の「閨秀小說」によつて代表せられた女流作家の一群があつた一葉をはじめ、北田薄氷・田澤稻舟・大塚楠緒子・三宅花圃がそれであつた。その中では、一葉を除いては、花圃を卓れたものとする。花圃に「萩桔梗」の作があつた。一葉と共に老熟の筆致を以て世に推賞せられた。たゞ一葉と異なる點は、社會と個人との葛藤を描いて調和の終結を得ることであつた。かれに厭世觀を靡すものがあれば、これは樂天

觀の上に立つものであつた。花圃の作では『露のよすが』がまた好評を博した。薄氷の『鬼千疋』稻舟の『黒眼鏡』共に悲しい運命を敍して、平穩の筆致に流石に女流の優しみを籠めてゐる。

心理描寫の風が一世を動かす時、紅露の大家も自らその態度を取るに至つた。紅葉は二十七年に『隣の女』を出してから『不言不語』『冷熱』と相踵いで飜案物を出すにすぎなかつた。然らずば『片靨』『名曲クレーツ』ロソ』『笛吹川』の如き合作物を公にするに止まつた。『國民の友』にはその想の涸れたことを論ぜられ、新進の作家が次第に肉薄し來る時、超然として俳句の選者で甘んずることは出來なかつた。こゝに於いて、俳諧に非ず、雜報に非ず、飜案に非ず、合作にあらざる作、快腕一揮の創作を起さなければならなかつた。遊戲娯樂の筆から逃れて、靜に觀察した人生を描き出し、自己の有するところを現さねばならなかつた。所謂自家の米の飯たる「多情多恨」はかくして「讀賣」紙上に於いて連載數月、二十九年から三十年に亙つた。同じ新聞小説とはいへ『紅白毒饅頭』の類ではなかつた。事件はたゞ妻を失つた神經質の男が、追慕の念に驅られ寂寥の情に責められる心の動きに過ぎない。その懊惱を右から左から繰り返し繰り返し敍してゐる。冗長の評、無意味の評が聞えた。世評は到底さきの日「讀賣」紙上に明朝を樂しませた『不

言不語』に及ばないところが遠かつた。しかし米の飯たる所以はこゝに存してゐた。この作は實に紅葉が藝術の頂點に達したものであつた。戯作者の態度は全然脱せられて、最も新しい文藝の態度を取つた。心理小說の新進作家も、心理の描寫がしかく平淡に、しかく微細に入るを見ては、瞠若たらざるを得なかつた。

『多情多恨』は性格描寫に成功したものとは思はれない。主人公鷲見の性格は徒に誇張せられてゐる。これに反して、快活な實業家葉山は作者自らを描寫し、溫順な妻お種はその夫人を描寫したので、よく活躍してゐる。それはともあれ、日常の生活をあれ程までに再現し得たところ、また「花もなしに」の一句を殘して未解決のまゝに止めたところは、當時にあつては豫期し得べきものでなかつた。況んや、常に感興を筆端から逆らすことをのみ心掛けゐた紅葉の作に、この事のあるのは奇蹟ともいふべきものであつた。「多情多恨」はまた言文一致體を以て記された。美妙も二葉亭も今は遠く及ばない程の巧妙な一體が創められた。この點に於いて「多情多恨』は言文一致の『三人妻』であつた。

『多情多恨』に於いて大いにその手腕を揮つて、捲土重來の勢をなした紅葉は、三十年に及んで更に「金色夜叉』に筆を染めはじめた。然しながら、これは前者の如く心理描寫に

專らなるものではない。作の動機、作の根本の思想は、他に存する。されば、今しばらく、これを措いて常に相騈馳する露伴の上を見よう。

露伴を以て心理小說家となすは謬れる見であらう。されど、こゝには心理描寫の風が、その作中に動いてゐる點を以て說くのである。蓋し、前期に於ける彼の作は理想小說と見るべく、抒情小說と稱すべきものであつた。然し、その理想は時々空漠に流れて、深く現實に接せざるものであつた。幽玄を欲するの極、時には空虛に陷らうとするものもあつた。然るに、今は性格を描いてその浮動を求め、心理を描いて自然の推移を求めた。現實を觀、世相を悟つた後には、之を說き之れを語つて一の抒情詩味を留めざるものともなつた。この傾向は二十六年に起稿せられた「風流微塵藏」に於いて知られる。初篇「笹舟」についで「菊の濱松」「獨寐」「雲の袖」と相踵いで出でて、二十九年に至り、しかも局を結ばずして筆を擱いた。

されど、これを以て露伴の作のすべてと見るのは當らない、その人生に觸れ人情の深奧に入ると共に、その上に高遠な思想を寓してゐる。その人生に對するや深い沈思と冥想とから來り、人間を察するや洞觀に至つて止む。さきには佛典の教理を以て直ちに律しようとしたのが、今は現實と併せ參せようとするのである。老莊に於ける亦さ

うであつた。かの二十八年の『新浦島』の如きも、老莊にかかりて悟道を說き理想を說くものであつて、しかもそれを說くにはまづ現實に始まつて、然る後に凡俗を超越した神仙境に及ぼしてゐる。露伴の特色はこゝに現はれてゐる。

二十九年に露伴は『髯男』を出した。武田家の臣で髯男と渾名ある笠井某が、主家に盡す苦心を敍した歷史小說であつた。文辭の遒勁を以て大いに稱せられた。

心理小說はまた他に幾多の變態を出した。狹斜小說もその一である。美妙は久しく新體詩に專心して、小說壇から隱れてゐたが、二十八年に及んで『お千代』『鰻旦那』を出し、二十九年に『若白髮』を出した。これが皆狹斜に關する事實によつてゐることから、はしなくも世論を惹き起したが、その寫實の手腕の冴えたことは世の齊しく認める所となつた。美妙はなほ狹斜に材を漁つて數種をなしたが、三十年に『閻魔地藏』『可憐狂』を出した。されど、言文一致の圓熟した跡を示すに止つて、內容の以て讀者の耳目を驚かすに足りるものはなかつた。まして、その人物の輕薄な氣に富めることが、漸く世の嫌惡を招くに至つた。

他の變態は、心理描寫をなしながら、かの深刻悲慘または狹斜の末に趨らないで、つねに詩趣の橫溢を期した一體であつた。江見水蔭まづ之を代表し、川山花袋また之に次

いだ。水蔭は硯友社の一人で、さきに戰爭文學の起るに當つて頻りに筆を染めたが、二十八年に短篇小說集『水車』を公にした。集中「狂詩人」「兜の星影」の如きは、二十年に出した『炭燒の煙』またその前年の『女房殺し』と共に、世に賞讃せられた。その作は皆短篇、その想はすべて抒情詩的のもの、その人物は畫師か詩人、さなくば、巡禮の如き、炭燒男の如き、藝術か野趣かにたづさはる者であつた。そして、それ等の徒は多く社會の冷酷に壓迫せられた弱者である。こゝに於いてか、作者の同情ある筆はその弱者を助け、社會に對してその罪を責める態度に出でた。その趣は頗る一葉のに似てゐるとはいへ、全體の調は空想を以て編み出されて、かの深みと强みとがなかつた。

花袋は新進の作家であるが、二十八年に『山家水』『水車小屋』『小桃源』等を出して、水蔭と共に詩的作家として聞えるやうになつた。描くところは多く初戀か失戀の煩悶であつて、その背景を美しい自然に置いてゐる。二者相俟つて無韻の詩をなしてゐるところが、頗る靑年の間に迎へられた。

漣山人が二十八年に出した『董日記』も二者に劣らぬ優しい情緒を湛へた短篇であつた。少年文學に力を盡せる人の態度は、自らそこに至らねばならなかつた。されば、彼にあつては、深刻な着想を以て描いた『昭君怨』の如きは、却て變態と見ねばならぬ。

その他多少ながら心理描寫に入つて從來の寫實の風を離れ始めたものには、嵯峨の舍篁村・思案・忍月・湖處子・乙羽・があつた。抱一庵も活動し始めた。然し抱一庵は飜譯の方面が主であつた。

第三章　俳句の革新

天保に至つて墮落俗了の極、ひたすら點者の口腹を充すの資となつた俳諧は、弘化嘉永に及んでも依然たる舊態に低徊した。豊島由誓・高梨一具・兒玉弘淵等の手を經て、月の本爲山・菊守園見外・のものとなり、更に維新となつては衰微の狀愈々激しくなつた。この最短詩形はいかでか當時の粗大奔放な時代精神を盛るの器たることが出來やう。また寂とか栞とか力めて幽玄の言をなして要領を得ない說は、もとより門外の徒の容喙を許さない、隨つて文學の革新の唱へられる時にも俳諧のみは漏らされるのであつた。されど、市井の商人職人の間にはその好尙が日に月に加はつて、かの宗匠といふ者も少なからず數へられた。その中の錚々たる者は老鼠堂永機と春秋庵幹雄とであつた。幹雄は白雄の後を承け、永機は其角の流を汲み、一は地方に一は東京に、その勢力を張つて互に下らなかつた。しかも二者共に舊趣味の間に徘徊して陋習を墨守することは全く同一樣であつた。永機の門に機一があり、幹雄の門に松江があつたが、それも各師風を株守するに過ぎなかつた。十三年には、角田竹冷は丈六庵一草と共に「報知新

聞』に俳句を載せた。新聞紙上に俳句を掲載する例をなせるが如き、とにかくに俳諧とい
ふものは沈滞の中にもなほ一縷の生命はあつた。然るに二十二三年頃からの國粹保
存・元祿文學復活・はまた俳壇を動して、これを研究し、これを翫賞しようとする者も、頗に
多きを加へ來り、二十四年には『鶉衣』『芭蕉翁一代集』『風俗文選』などの飜刻せられるも
のがあり、翌年には『俳諧寂栞』『本朝文鑑』『俳諧一葉集』の飜刻せられるものもあつた。
この年幹雄はまた俳諧を通俗に解說して、初學を導かうとして『俳諧自在法』を著はし、機
一も亦趨勢に促されて『發句作法指南』を出した。俳人の傳記を評論的に述べた『俳諧史
傳』の著の出でたのもこの時である。かくの如くにして、二十六年となるや、鬖庭篁村の
「俳諧論」は「早稻田文學」の誌上に載せられ、その十一月には「日本新聞」紙上に正岡子規の
「芭蕉雜談」が連載せられた。子規は未だ無名の俳人、而もその論は明治俳諧史上に於け
る『小說神髓』と目すべきものであつた。

その新しい觀察、何等拘束せられない言論は、まづ芭蕉の崇拜せられながらも却てそ
の眞價の認められずにゐることを論じた。世の俳諧に遊ぶもの、芭蕉を以て翁と呼び、
芭蕉翁と呼び、芭蕉樣と呼び、恰も宗教信者の大師樣お祖師樣などと稱するのと異なら
ず、甚しきに至つては神と崇めて廟を立て、本尊と稱して堂を建てることは、決して一文

學者として芭蕉を觀るのではなくて、一宗の開祖として敬するものである。その俳諧は完全無缺、神聖犯す可らざるものとせられ、同時に俳諧としては殆ど解する者なきに至つた。偶〻その意義を解する者あるも、批評する者に至つては全く跡を絶つた。されば、芭蕉の句といへば、その巧拙の如きは敢て論ぜず、惡句駄句盡く收錄せられて、徒に句集の紙數を增加するに過ぎなかつた。世はつひに芭蕉の芭蕉たる所以を知らなかつた。さらば芭蕉の眞價は如何。日本の文學は多く纖巧細膩、その中にひとり芭蕉のみは豪壯の氣を藏め、雄渾の筆を揮ひ、天地の大觀を賦し、山水の勝概を敍して一世を驚かした。その以前の十七字詩は卑俗、漢詩は幼稚、和歌は陳套、その間に起てる芭蕉の新調は日本韻文學のすべての面目を一掃したものであつた。「夏草や」の吟「荒海や」の吟の如き、到底他の夢想だに及ばざる所。それのみならず、芭蕉の技倆は縱橫自在、種々の變態をなし、變調を學び、ありとあらゆる變化をば盡く自家々集中に收めようとするのであつた。幽玄・纖巧・奇抜・滑稽・溫雅・華麗・或は自然の妙を得た「明月や池をめぐりて」の吟、或は羇旅の實況を寫した「蚤虱馬の尿する」が如き、實に三唱措く能はざるものがあつた。もし夫れ「古池や」の吟「枯枝に」の吟の如きに至つては、何等の取るべき價値がない。これ道德教訓の眼を以て見、或は傳說を附會するの餘、始めて人口に膾炙せらるるに過ぎな

い。これが子規の所説の大要であつた。宗匠輩の盲信は、この言によつて破られた。新しい詩眼を以て俳天地に對し、新しい詩語を以て新思想を吟ずべき時が來た。よしその言は獨斷に失するとも、俳壇革新に於ける「芭蕉雜談」の功は遂に忘るべからざるものであつた。

子規は明治十八年の頃から、すでに俳諧に志してゐたのであつた。その高等中學の在學中、同じ伊豫松山の出身者内藤鳴雪・竹村黄塔・五百木飄亭・藤野古白・等と共に會合をなして、互に趣味の開拓に力めた。然るに二十四年に至り、子規は俳句分類の編纂を企てた。これが子規をして俳眼を開かしめる緣であつた。その研究が昔の連歌時代から始まつて、貞德派の無趣味な滑稽時代を過ぎ、宗因の談林に至つて僅に一點の活氣を見とめながら尙五里霧中に迷つて居る有樣であつたが、「春の日」「荒野」などと漸く佳境に入り、始めて『猿蓑』を繙いた時には句一句面白く思つたとは彼自らのいふ所である。かくの如くにして會得した『猿蓑』の閑寂な調を軌範として、吟ずるところは多く敍景であつた。二十五年、子規は大學を半途で退學して「日本新聞」社員となり、その一欄に據つて頻りに俳話俳論を公にし、またその作句を載せた。「芭蕉雜談」はこの際に發表したものである。さきの鳴雪・飄亭・等また之を助け、藤井紫影・伊藤松宇・佐藤肋骨・高濱虛子・河東

碧梧桐等の志を同じくし或は教を受けんがために集り來るものも多く、つひに新聞「小日本」を發刊して俳趣味の研究と鼓吹との機關に當てゝ俳句を募集するに至つた。時は明治二十七年二月。この年はまた竹冷及び大野洒竹等が日々「毎日新聞」に作句を公にし、また「讀賣新聞」が竹冷紅葉を判者として俳句を募集した時で、新俳諧の羽翼は大いに張るに至つた。實に、この年から翌年にかけて新俳諧の結社は少なからず起り、地方も亦翕然として響應した。

これよりさき、子規が俳諧に志した十八年には、尾崎紅葉もまた俳句に手を染めようとした「我樂多文庫」の誌上に於いて、已にこれが趣向のあることが認められた。たゞ紅葉にあつては俳句はもとより小說著作の餘技、しかも小說に於ける西鶴の崇拜は俳諧に於いてもその一派たる宗因の談林調を以て模範とした。子規がそれに慊らないで更に蕉風の閑寂に進んだ時、紅葉は諧謔滑稽を喜んでこれに力を盡した。されど、後には紅葉もその小說が西鶴を離れて新文藝の境域に進んだが如くに俳句もまた談林調から出でて蕉風に移つた。これは子規が「小日本」發刊の交であつた。紅葉の俳社は紫吟社と稱し、別に木曜會を組織せる小波と共に之を主宰した。屬するものには硯友社の同人以外、中山白峯・村山鳥逕・星野麥人・牧野望東・があつた。その作句の多くは「讀賣

新聞」と「文華」とによつて公にした。

竹冷は戸川殘花と共に紫吟社の一派を併合して秋聲會を起した。機關雜誌として「俳諧秋の聲」があつた。この主とする所は新舊俳諧の調和であつた。その翌年、帝國大學生たる酒竹・臨風・紫影・醒雪等所謂大學派によつて筑波會は起され「帝國文學」を以てその機關とした。

これ等の俳社の多くは子規一派に對抗せんために起されたとも言はるべきものであつた。二十七年七月「小日本」が廢刊せられ「日本新聞」に俳欄を設けて、之によつて所謂日本派の名をなす頃、蕉風に沒頭した子規の態度はいつとなしに變つた。その俳句の研究の序を以て、進んで安永天明に至るや、こゝに蕪村に際會し、その異調奇調に驚歎の聲を放つて、遂にこれが模倣に陷つた。自選の句集「獺祭書屋俳句帖抄」の序文は、その間の消息を傳へてゐる。はじめ芭蕉の「猿蓑」によつて俳眼を開き、やゝ俳句の寂を知るやうになり、二十五年の冬頃からは自然の景物を詠ずることが自在になり、二十六年の行脚と多作との一年を超えて、二十七年には元祿調から天明調にうつりかけてゐたと碧梧桐と虛子とが天明調を學び、蕪村を學び、子規の意を承けて、奔放の一體を創めたのはこの時である。陳腐を離れ變化を多くするには、從來の句風では未だ複雜の思想を

現はすに足らず、とし更に進んで語に漢語を多く使用し、句法に虚字を少くし、暢達な調を用ゐようとした。かくの如くにして、複雜な、變化の多い、新奇な美を發揮することが出來ると。碧は客觀詩に長じ、虚は主觀詩に長じ、句風異なるも二者その態度を同じくして、明治の新俳諧に於ける尖兵たらんと期した。十六字句二十四五字句の奇矯な調も、盛に公にせられた。

されど、子規は徒に蕪村の皮相を模倣して得たりとするものではなかつた。蕪村の『新花摘』を讀んで、蕪村の眞跡に觸れたのは二十九年である。これによつて、蕪村の苦吟の餘になつたものが必ずしも卓れたものではなく、得意の句もまた優れたものでなく、優秀のものは却つて無雜作の間に成つたものにあることを知つた。子規の句が自在になり行き、すべての格調を包容することが出來るやうになつたのは、この時に始まつた。日本派の全體も隨つてその奇鋒を收めて、平淡の間に逍遙するに至つた。しかも縱横の變化は却てその中に寄與せられた。子規はこゝに蕪村の詳細な研究に入つて「俳人蕪村」を「日本新聞」に草した。畫人としてのみその名聲を知られた蕪村の名は、ここに始めて俳壇の光となつた。子規は蕪村と芭蕉との比較研究をなしていふ「芭蕉は消極的美・靜的美・に傾き、古雅・幽玄・沈靜・平易等の趣味を主とし、蕪村は積極的美・動的美・に

傾き、壯大、雄渾、艶麗、奇警等の趣味を主とした。芭蕉は主觀的美によつて天然に感興をよせ、蕪村は客觀的美によつて人事に感興をよせてゐた」と。子規の前人未發の精緻な研究が發表されると、蕪村崇拜の勢が俄然として大いに高まり、その句集の飜刻せらるるものが相踵いで出でた。かくて蕪村の作風は殆ど一世を風靡するに至つた。かうなつては紫吟社も不振、秋聲會も不振「秋の聲」はつひに廢刊の厄にあひ、日本派のみひとり隆盛に、松山に於いて柳原極堂が刊行してゐた雜誌「ほとゝぎす」は東京に移され、虚子がその編輯の衝に當ることとなつた。時は明治三十一年。日本派の基礎はこゝに動かすべからざるものとなつた。

さらば、子規一派の俳句は、蕪村の埒内にあつて、天明の昔にかへつたのに甘んじてゐたか。否。これだけに止らば如何でか明治の俳句といふことが出來やう。子規が病體を以て苦痛と闘ひつゝ努力した甲斐が何處にあらう。子規は新俳句と月並句とを比較して、五の差異をあげていふ「我は直接に感情に訴へんと欲し、彼は往々知識に訴へんとするが其一、我は意匠の陳腐なるを嫌へども彼は寧ろ新奇を嫌ふは其二、我は言語の懈弛を嫌ひ彼は緊密を嫌ふは其三、我は音調の調和する限りに於いて雅語、俗語、漢語、洋語を嫌はず彼は自己が用ゐ馴れたる狹き範圍を出でず、雅語をも用ゐざるは其四、我

に俳諧の系統なく流派なし、彼は之を以て特殊の光榮とするは其五」と。これ等の言は革新の當初に於いて標榜すべきもの、蕪村を得た今、月並調破棄後の今は、更に進んで明治調と蕪村調の異なる點を擧げねばならぬ。子規は即ち言をなしていふ「明治の俳句の古人以外の特色は元祿より、天明より、更に複雜に、精緻に、緊密になつた事である。されば碧梧桐の句風は蕪村に比して、一層空間的に印象の明瞭を來し、虚子の句風は時間的に複雜のものとなつた」と。

日本派の選集は三十一年に「新俳句」があり、三十四年に『春夏秋冬』があつた。敍景から抒情、佶屈から平淡に推移した跡を認めることが出來る。その間、大阪には松瀨青々等が雜誌「車百合」を發刊して、日本派のために地方の俳壇を開拓せんとした。しかも子規は病つひに革つて三十五年九月に歿した。子規の事業はもと俳諧革新のみではなかつた。和歌に對し、新體詩に對し、敍事文に對しても、沒すべからざるの遺業が存する。これ等は更に節を改めて說かねばならぬ。

子規は一新俳風を樹立して俳壇の積弊を一掃して復興の實を擧げた。その功績といひ、またその圓滿な俳想を以て衆人を率ゐて立つ態度といひ、よく芭蕉に似てゐた所がある。ひとりそればかりではない、芭蕉の歿後に各門弟が割據した如くに、子規の歿

後もその同人は各自その認める所・信ずる所・を發揮せんとして門戸を張るに至つた。これすらも相似てゐる。また以て子規の大さを示すものといはねばならぬ。

第四章　和歌の革新

明治の和歌は、なほ俳句と同樣の運命のもとに、その革新は最も遲れた。何となれば、和歌に於いて起るべき變動は、轉じて新體詩の勃興となつたからである。しかし舊態を墨守してゐる和歌は、俳句よりもなほ盛んであつた。維新後の多事なる中に於いても二年には宮中に歌道御用掛を設けられ、三年には皇族華族及び勅任官から新年の歌御會始の歌を召させ給ひ、七年には御會始の歌題を賜はつて汎く一般臣民からの詠進を嘉納し給ひ、更に選者の精選を經て豫選の歌を御前に披講せしめられることとなつた。かくて臣民詠進の歌數は一萬首にも達するやうになつた。二十一年には、宮内省に御歌所の設立をも見るに至つた。その昔、村上天皇が創設せられた和歌所の跡を復活せられたのである。この盛運たる、一に明治天皇の叡慮から出でたことを記憶せねばならぬ。天皇は常に大御心を和歌に寄せさせ給ふこと深く、溫藉な高調は拜誦するだに尊く、且つ御製の多いことは、歴代の天皇は申すまでもなく、遙に歌數の多いことを以て喧傳せられた藤原定家の上にさへあらせられた。

御歌所の歌權は實に桂園派にあつた。桂園門下の高足八田知紀の門人高崎正風は設立以來の所長であつた。まして明治の初年には知紀を始めとし加藤千浪・近藤芳樹等があつた。税所敦子・小出粲・等も、またその名が聞えた。これ等はその流派をこそ異にするものゝ、多くは桂園派と同一樣の態度を取るものであつた。また井上通泰の如き、特に桂園派の研鑽に精しく、幾多の論著を出してその歌風を鼓吹する者もあつた。かゝる中に、海上胤平の詠はひとり異彩を放ち、御歌所一派の纖弱な歌風を罵つて、剛健雄渾な萬葉風を主張した、されど遂に眞淵の上に出づることは難くあつた。

古文學復興の運動は尋いで來つた。歌壇もまた活躍の氣を帶びて來た。新思想は新體詩を起すと共に、和歌の舊詩形を放棄すべきでないことを知つた。なほ俳句が新思想の器たることを知り得たと同樣である。萩野由之の「和歌改良論」、森田思軒の「和歌論」「詩歌文章の神韻」「和歌と漢詩との比較研究」などは、この趨勢の下に現はれた論議であつた。この氣運に乘じ歌壇の一新調を齎し來つて、所謂新派の旗幟を鮮明にしたものは「孝女白菊の歌」の作者落合直文である。青年の歌人は翕然として之に趨つた。淺香社はかくして成立した。社中でその名の知られたものは與謝野鐵幹・金子薰園・尾上柴舟・服部躬治・大町桂月・鹽井雨江・金子元臣・久保猪之吉・であつた。直文その人の詠は

必ずしも新思想といふことは出來なかつたが、その題材の廣いことは所謂舊派歌人の比ではない、その用語といひ、その形式といひ、皆新しい色彩を帶びてゐた。作者自らが歌人として詩人としての境遇を詠ずるものは古歌には見えなかつたが直文は歌つて曰はく、

時雨ふる旅の宿りのつれ／＼に
歌かきつけぬ菅笠の上に

と。海士や樵夫の境遇を詠じた歌は古歌にもあつたが、人物そのものを詠じたこと、

觀音を刻む佛師の小刀の
光もさむき燈火の影

の如きものはなかつた。加之、直文がその徒を指導するは全く從來の歌人が爲す所と異なつてゐた。曰はく、余は題を出せども新しい題のみにて古き題を出さず、その新しい題も、たゞその大體の目的を示すのみにて、その精しい方面の事をば勝手氣儘に習はしめる、これまでの經驗によれば、その方が進歩の早いばかりでなく、何れもその肺肝より考へ起して詠むが故に、歌おのづから活氣を帶びて、優れた詞も出で來るのであると、その歌題は實にその言の如く「丹躑躅のかげに白き蛇ねぶれり」「壁にたてる琴の緒白

らされたり」などの如きであつた。

更にこの傾向を甚しからしめたものは鐵幹である。男子の歌の振興を以て己が任となし、新體詩の作と共に『東西南北』及び『天地玄黄』を著はした。時たま〳〵日清の戰、しかも韓山にあつた彼は悲憤慷慨の叫びをなし、また常に「虎」「太刀」「鷲」等の辭を用ゐて、ひたすら强大剛健の調をなさうと努力した。よし平俗の嘲を免れず衒氣篇に充つるものはあるも、その漢語俗語を自在に使役するの一事は、以て手腕を示すに充分であつた。

鐵幹がかゝる急進を以て和歌の革新を叫ぶ時、漸進の態度を以て、舊形式をも新形式をも併せて採用しようとする竹柏園一派があつた。これこそは佐々木信綱の主宰する所。信綱は『千代田歌集』の撰者弘綱の子、かの國文學復興の氣運に際し、『日本歌學全書』を編して歌界に貢獻する所があつたが、二十九年頃から「めざまし草」誌上にその詠歌を發表した。詩思聲調共に穩健にして、かの鐵幹に見るが如き奇矯のものを見ない。用語の如きも、漢語俗語の使用を敢てせず、從來の雅語を取つて力めて新樣を出さうとする。されば、これに學ぶ者も極めて廣く、特に上流社會の女流がその多きを占めてゐる。三十四年の『竹柏園集』の撰集は、よくこの派の體を代表したものである。雜誌「心

の花」を出して、その勢力を廣めた。　信綱その人の詠は『思ひ草』『新月』等に於いて見ることが出來る。

鐵幹・信綱が二方面から和歌の革新を唱道するや、正岡子規は俳句革新の餘勢を以てまた來り加はつた。　子規の努力は俳句によつて成し得た客觀的趣味を、和歌の上にも移植しようとするのであつた。　彼にあつては和歌と俳句との間には、何等の別をも置かなかつた。　俳句の長いものは和歌、和歌の短いものは俳句であるとも說いてゐる。蓋し、俳句と和歌との境域は、遠い以前から全然相背反するものとせられ、俳諧道の境は到底和歌者流の覗ひ知る所のものではないとせられてゐた。　子規はその固陋を破らうがために「歌人に與ふる書」を草して、大いにその主張を明かにした。　子規はまづ歌壇に對して俳諧の取材範圍をも寄與し、自らその調和者を以て任じたのである。　更にその詠は趣味を自然に求め、手段を寫實に取ることを求めた。　かゝる態度を持したものを過去に尋ねて『萬葉集』を得、また井手曙覽を得、更に備前の歌人平賀元義を得た。こゝに於いて、その歌風を宗として遒勁の調を成し、これと共に俳句の緊切なる句法からして從來歌詞の弊であつた冗漫をも救ふことが出來た。　子規はその吟詠を公にすると共に「歌人に與ふる書」についで、幾度か縱横の言をなして歌壇を罵倒した。　然しな

からその運動は俳句に於けるが如き效果を及すことが出來なかつた。たゞ、三十二年に興された根岸短歌會には、香取秀眞・伊藤左千夫・等の相集ふものがあり、子規の歿後には機關雜誌「馬醉木」を出してます〳〵『萬葉集』の態度と古語とを取つて、更にその思想をも襲はうとするに至り、佶屈の調の漸くその陋弊に陷るものもあつた。

明治の和歌壇の革新が、この三方面からその緒に就いたことは略これを盡した。更に顧みて三十三年鐵幹が新詩社を起した當時から敍述せねばならぬ。この新詩社の標榜する所は、自我の詩を取れといふにあつた。言は必ずしも四十年以後に起つた運動の如き深い意義によるものではなかつたが、兎に角に陳套を破れ、傳習を棄てよ、そして自ら認むる所の我を吐露せよといふのであつた。それは當時勢力のあつた硯友社一派の文藝とは全く異つた色調であつた。しかもその雜誌が所謂ヒーロー二個の價卽ち當時行はれた卷煙草の價を以て頒つといふ粗雜な體裁であつたことだが、また當時の青年を魅する一つであつた。かくて鐵幹は奔放熱烈な情を詠じた。しかしそれは「東西南北」時代の如き「太刀」や「虎」の假面を借つての剛健ではなかつた。皆心裏自然の聲、小生の詩と題せるのが、卽ちそれである。

その雜誌の體裁が漸次改つて、歐洲文藝も紹介せられ、歐洲名畫も挿入せられて、從來

に見難いものを出す頃には鐵幹の詩も亦新になり行きて、時事を諷し世相を歌はないやうになつた。之に代つたものは戀愛の強い深い情緒であつた。實にこの時ほど西洋詩趣から來る戀愛の讃美せられた時はない。人生即ち戀愛とまで極言せられた。かの新體詩界に於いて、星菫時代を劃した趨勢は、和歌に於いて一層甚しきを加へた。鐵幹の戀愛歌にて一として「星」「菫」「百合」「紅」「紫」などの語の含まれざるはない程であつた。もし夫れ、鐵幹門下にして、妙齢なる女流作家鳳晶子に至つては、更に激しいものがあつた。

　晶子は恐らく當代の鬼才を以て許すべきものであらう。才鋒は早くその作にほの見えて居つたが、その戀愛を歌ふに及び、熾烈の情よく有髯男子をして後へに瞠若たらしめるものも少くなかつた。素よりそれは人目の關を避け、世の口の端を怖れるが如き態度ではなかつた。何等の忌憚もなく、自己の熱情を表現し告白せんとするものであつた。鐵幹の『紫』について出された『亂れ髪』一篇がやがてそれである。『小扇』の集もまたそれである。されば、晶子の詠を讀んだもので、その用語の放膽その形式の變幻に驚くものは、未だ晶子を知らざるものであらう。紅恨紫怨その懊惱の情をのみ取るものは未だ晶子のすべてを解せざるものであらう。即ち『亂れ髪』や『小扇』や皆戀に活き

んとする女の努力の聲であつた。戀のためには舊道德も舊習慣も燃し盡さずば止まざらんとする情火の閃き、舊道德舊知識に對する反抗挑戰の聲であつた。もし夫れ

やは肌のあつき血汐に觸れもせで
さびしからずや道を說く君

といへる一首を誦すれば、よく他を推するに難くはなからう。しかしながら、その戀愛觀も感情の上に立てられて、理智の後に出でたのではなかつた。故に、その末は漸く振はざるものとなつた。これは新詩社すべての傾向であつたが、しかも晶子の才華は、一轉他の境を開拓して、悠々としてその詩思を發展して行くことが出來た。

直文の門下で鐵幹と共にその名を知られたものに薰園がある。平正の調を以て、敍景に巧みに、よく直文の風貌を傳へてゐる。尾上柴舟もまた溫藉の作をなした。前者に「小詩國」「凌宵花」があり、後者に「銀鈴」「靜夜」の著がある。柴舟はまた新體詩をも試み、「ハイネの詩」の飜譯がある。

はじめ新派の起るや、新舊兩派の間に論難攻擊は盛んに起つた。二者各〻おのが長を說き他の短を發いた。されど、この期を終る頃には、その特色たる淸新と溫雅とを合せ、平淡と熱烈とを合はせ、相依りて褊狹に失せず放逸に流れざるものを生ずるに至つた。

新詩社の活動は一に新派の基礎を堅くしたのみでなく、また和歌界の全般に革新の實を擧げしめた。さらばかく完成の域に近づいた歌壇は、いかなる推移をなすべきか、新體詩と發展を共にすべきか、或は後に殘留せらるべきか、それが問題である。

第五章　新體詩の隆盛

日清の戰雲のまさに深き時、國民熱狂の情はまづ發して新體詩となつた。二十八年二月、「旅順口の英雄可兒大尉」は「帝國文學」に現はれた。「新體詩抄」の作家の一人たる外山正一が再來の詠であつた。尋いで「輸卒」「忘るゝな此の日を」などを出した。その詩形は最も放膽な試を以てし、七五・五七調の舊套を破り、現代語を使用せんとする一種の散文詩である。これを名づけて朗讀體といふものは、表情を含める朗讀法によつて無韻無律の缺陷を補はうとするからであつた。これと同一の主旨によつて、上田萬年、中村秋香・阪正臣・等によつて試みられた作は、正一の詠と共に合はせて「新體詩歌集」の出版となつた。されど、その運動は一の論爭の的となつたに過ぎなかつた。

「詩抄」の作者の一人井上巽軒、また丹後風土記中の傳說を題材として、長篇の詩「比沼山の歌」を出した。漢語俗語に互つてその語彙を豐富にせんとすること、なほ正一と同一の態度を取つたが、從來の七五の舊型を用ゐた。これも用語の蕪雜を以て、さまでの賞讃を博し得なかつた。

もしこれ等が生硬拮屈のために失敗せるものとせば、その弊から脱しようがために異調を取らず、七五五七の雅醇の調によつて溫藉の情を寄せようとするもの、從來の詩形によつて新思想を歌はうとするものが出でた。鹽井雨江・大町桂月・武島羽衣がそれであつた。三人ともに各〻「帝國文學」によつてその作を發表したが、やがてその詩文を合集して『花紅葉』と名づけて公にした。羽衣はまづ「小夜砧」にその名を知られた。遠く思を軍旅の人の上に馳せた少婦が、戰死した夫の靈に誘はれて、廢寺の荒塚中の人となることを敍した一篇、すべて幽韻の詩趣横溢し、しかも西詩を飜案した斧痕をとゞめざる所に、三唱の價値がある。雨江はさきにスコットの『湖上の美人』を譯したが、更に『深山の美人』の大作をなした。戀に破れ、世に倦みて、花の深山の奧深い草庵の主となつたやさしい女の身の上を歌つたものである。雨江は辭の彫琢を以てまさり、羽衣は想の卓逸を以て知られたものとせば、桂月は寧ろ氣の激越を以て稱すべきものであつた。

然しながら、三人ともに辭句の古雅を求むることは同じく、つひに擬古派を以て目せられた。この古雅を欲するために思想の空漠を來し、眞情流露を欠くに至つては、また朦朧體の貶稱をも受けるに至つた。しかも之に對へていふ、無味を避け露骨を斥けんとするには朦朧たらざるを得ない、かくて始めて詩たることを許すべきものであると。

これ等朦朧派に對し擬古派に對して率直の情をさながらに歌ひ、かの纎弱な少女振りに對して、男子の調を以てしようとするものは、與謝野鐵幹であつた。鐵幹は、年少氣鋭、豪放の語巻中に溢れ、多く韓山羇旅の情を歌つた。子規の如きは評して韓妓の臭に堪へずとし、綠雨の如きはその新體詩見本に於いて之を諷して「小楊子むづと手に執りて、喉笛見事にかツ切ればちよいと痛めど血は出でず」とさへいふに至つた。生硬平板を免れずとはいへ、また漢詩の脈を採つたなどは、詩壇に於いて多とすべきものである。その詩集は和歌と合せて二十九年に「東西南北」を出し、三十年に「天地玄黃」を出した。一集を加へる毎に進境の見るべきものがある。

子規亦竹の里人と稱して俳味に富んだ一種の新體詩精微な觀察になつた客觀詩を出した。そしてまた頻りに押韻をも試みた。雜誌「日本人」に於いて立論していはく、押韻は日本の詩歌に適せざるやうに我も人も思つたが實驗の結果名詞を韻にするの必要を認め、また押韻による三の利を知ることが出來た。狹い範圍に在るを以て却て自己の技倆を現はすに適すること、言語の範圍を限られるが爲に却て思想の上に惑を生ぜず早く作り得ること、限られた韻語を探して韻語から思想を得るがために却て奇想警句を得ることがそれであつた。されどその利といふことは、韻そのものから來る

ものではなくして、唯語句の配列に變化を生ぜしめた間接の功に過ぎなかつた。

三十年にはまた『抒情詩』が出版せられた。湖處子・嵯峨の舍・國木田獨歩・松岡國男・田山花袋らの作を載せたもので、中にも國男の作が穩健をもつて時流を抜いてゐた。三木天遊・繁野天來の作も、この時に『松蟲鈴蟲』と題せる合集によつて公にせられ、漢語俗語を自在に用ゐた點を以て稱せられた。新體詩界の勃興は、この際に於いて甚しく、「この花」及び「心の緒琴」などいふ專門雜誌さへ出づるに至つた。美妙もまた雜誌「大和琴」によつて捲土重來の勢を示し、中にも長篇「魔界天女」を連載して喝采を博した。

されども、これ等の諸作家も、島崎藤村には一籌を輸せざるを得なかつた。藤村の詩集は五十一篇の多きを收めて『若菜集』として世に出された。各篇いづれも既に「文學界」「帝國文學」等に公にせられた時に、とり〳〵に嘖々の聲價を得たもの。これよりさき、二十九年に「一葉舟」「秋の夢」に矚目せられ、雌雄の鷄をかりて世相を寓した「鷄」にその名聲は定まり、三十年の春「天馬」を出して詩界の覇を以て稱せられた。その形式は七五調であるが、牝牡の天馬が奇瑞を以て地に生まれしも人に知られず空しく鞭撻の苦楚を嘗めて、私に天界に憧憬するあはれさを詠じた高遠の理想・奔放の想像・清新の用語・が、蓋し他の企て及ばざる所であつた。藤村は更にその後の作を『一葉舟』と『夏草』とに收めた。

これ等を通じての詩想は戀愛と藝術とに活きんとする努力であつた。藤村は文學界派に屬してゐたが、その派は同人の一人が自殺の悲慘を來す程に、人生と藝術とに對して嚴肅な態度を持してゐた。當時は國家主義が一世を風靡し、實利主義が頻りに鼓吹せられた。その火の柱となり雲の柱となつてゐた基督教は四圍から種々の壓迫を受けた。かういふ趨勢はいかでか文學界同人の滿足することが出來よう、在來の人生觀道德觀にいかでか慊焉たることが出來よう。こゝに於いてか理想に憧憬し、更に戀愛を生命とし、藝術に獻身せんとするに至つた。藤村が戀愛を歌ふや、「おくめ」の如き「四つ袖」の如き、皆主情主義の上に立つて、觸れる所はすべて燃し盡さうとする情火に滿てるものであつた。藝術を歌ふや「晩春の別離」の如く「月光」の如く、一として讃美と愉悦とに充たされないものはなかつた。然し、これは藤村の絕頂に達した時の聲であつた。それがまた何時となしと現實に觸れることが多くなつた。「夏草」の中に收められた「農夫」と題した長篇の牧歌的敍事詩は、やがて詩風の變轉を語つて居るものである。日清の役に於ける戰士が、歸り來れば相思の女は我を慕つて病死したといふを聞き、憂悶の餘りに一度は僧形に身を窶さうとしたが、勞働によつて人生の苦悶を忘れるの道あるを知つて飄然努力の生活に入らうとするに至ることを歌つたもので、それが三十四年

に出された「落梅集」に至つては更に進んで人生の苦闘を主題とするものが多くなつた。「壯年の歌」「勞働雜詠」が即ちこれである。さきの讃美詠歎の時は、今は沈思冥想の呻吟となり、嘗て理想の影を逐つたものは、今は現實の洞觀となつた。まして藤村は信濃の小諸に隱れ、つひに詩筆を折り、後つひに小說壇上の人に轉じた。かゝる推移はあるものゝ、要するにその詩風は主觀的・抒情的・の語に盡きる。これに對して、剛健の詩風よく冥想的であり敍事的であつたものは、土井晩翠である。

藤村の詩風は題材の然らしめることとて、おのづから感傷的な傾向はあつたが、その模倣者に至つては徒にその末のみに趨つて、形式の雅醇にばかり汲々としてゐた。されば評論壇に於いては、ホイットマンの如く、僞善を棄てゝ赤裸々に率直に衷情を吐露せよとの要求も出でた。古典を顧みず、西洋趣味を顧みず、矯飾と模倣と作爲とを脫して、直に感傷の本に還り、肚裏一切の景と事と情とを、そのまゝに掴み出せといふ苦言も出でた。さらば藤村に代つて斯界の覇となつた晩翠の作は、果してよくこの要求に應じ得たであらうか。

晩翠は二十九年の末に「紅葉青山水急流」を「帝國文學」に出し、更に「萬有と詩人」「荒笛餘韻」等を出した。漢詩の脈を以て漢語を自由に操縱し而もその中に西詩の思想を寓

する所、また哲學的思索を藏する所、當時これに比すべきものがなかつた。三十二年に詩集『天地有情』を出し、三十四年に『曉鐘』を出した。前集には「星落秋風五丈原」があるが、諸葛亮が出廬から哀雲深い祈山の陣營に至るまでを敍し、敍事と抒情と相依つて成れる渾然たる一篇の哀詩、六章三百五十句の長きに及んでゐる。後集には「萬里の長城」があるが、秦の始皇の悲慘な運命と清朝の凋落とを併せ詠じたものである。

晩翠の詩は、その人生と自然とを歌ふに拘はらず、必ずその中には或ものを藏してゐる。その詠ずるところは皆苟安以て現實に立つものではなく、常に理想と光明とを追求してゐる。かの「登高賦」に於いて、十九世紀の積弊をば高風一掃して、光と愛と詩との二十世紀を期待するが如きは、その好一例である。されど、理想の實現は難い、かの「富嶽の歌」に於けるが如き理想國を、我邦土の上に實現するのはいつの世であらうか。それは餘りに高く、餘りに遠くあつた。歴史の榮枯盛衰は、それを示してゐる。諸葛亮もさうであり、始皇もさうであつた。こゝに於いて、詩人はまづその想像の翼をかつて、詩歌の靈境に遊ばねばならぬ。晩翠の詩は、このやうにして成つたのである。然し、これもかの感傷の本に還れ、その哀情を吐露せよといふ要求に合したものではなかつた。藤村に於ける非難は、晩翠の上にもまた繰り返された。「曉鐘」の出でた三十四年は世評が

漸く曉翠から離れ行く時であつた。この時曉翠は歐洲に遊んだ。作は猶ほ引きつゞいて出で、「亞細亞大陸回顧の歌」「ミロのヰーナス」の如き、また相當に賞讃せられた。

藤村が退き、曉翠が去つた詩壇には、これに代るべき詩覇がなかつた。その名聲はもとより二人に及ばぬけれど、薄田泣菫があつて、後の活躍の間を繋いでゐた。泣菫は三十年の頃「花密藏難見」といふ戀愛詩を「新著月刊」に出して小藤村の名を成したが、爾來詩作は頻りに出でて、三十二年には詩集「暮笛集」を出し、三十四年には「行く春」を出した。その歌ふ所は、愛と詩とによつて人生を美化し醇化し、清淨化しようとするのであつた。そして、「行く春」に於いて、また注意すべきは田園の興趣を傳へようとする牧歌的敍事詩の少からず見えたことである。泣菫はまた雜誌「小天地」を大阪に於いて發刊して諸家の作を載せたが、三十六年その廢刊となるや、鐵幹主宰の雜誌「明星」が代つてその位置に立つた。これに於いて、その作を發表するもの、鐵幹・泣菫以下、蒲原有明・平木白星・前田林外・岩野泡鳴・があつた。この時は小天地派と明星派とを一にして、星・菫時代と稱せられた。その詩の題材は多く戀愛、その標號としては可憐可愛な「星」「菫」「百合」「愛」「戀」「紅」等をかり來つたからである。

詩形に就いて種々の工夫の凝されたのも、この時である。七五・五七は已に當時の詩

思を盛るに堪へなかつた。泣菫が「暮笛集」に於ける八六の調は「行く春」に至つて完成の域に近づき、更に七四・六五の調も試みられた。有明の「獨絃哀歌」は四七六の調から成り、前聯を八行、後聯を六行となしたものであつた。いはゞこれ、ソネトともいふべきもの。鐵幹は「紫」に收められた如き每節不定の短句を錯綜した小詩形を試み、林外は「アメリカ彥造の墓」に純たる散文詩を試みた。

泣菫はさきにキーツに私淑して、その風韻を傳へ得たと稱せられたが、いつしかロセッチに之き、有明はロセッチを飜譯してその詩趣を語り、殊に「獨絃歌」の如きは、幽玄な神祕境に對する憧憬時劫の進みにも老いせぬ愛に思を寄せて、よくその風貌を髣髴せしめた。これぞ次に來るべき象徵詩勃興の兆をなしたものともいはう。もと象徵詩については、上田敏が早くから佛蘭西詩人に就いて語り、その詩を飜譯して世に敎へる所があつた。「海潮音」に收めたのがそれである。有明が佛蘭西象徵詩に向ふやうになつたのも畢竟この誘導があつたからである。有明の詩集「春鳥集」には、その序に於いて象徵主義について說く所があつた。之に對して是非の聲は頻りに起つた。或は獨逸の象徵派の變遷から見て之を難じ、或はトルストイ・ノルダウ・の言によつて非難した。

この象徵詩風を以て主觀的方面に於ける活動とすれば、神話傳說を題材とする傾向

は客觀的方面に於ける活動と見るべきであらう。三十六年に鐵幹・林外・白星・の合作から成つた「源九郎義經」が出で、ついで鐵幹の「日本武尊」が出た。この年、林外と泡鳴とは「明星」から分離して「白百合」を發刊し、詩歌の刷新を絶叫した。されどなほ、「明星」とその傾向を同じくした。有明は「國土創成賦」を作つて伊邪那岐・伊邪那美二尊の事跡を歌ひ、泣菫は「雷神の夢」と「金剛山の歌」とにまた神話を齎し來り、泡鳴は「女護海島」また「豐太閤」を出した。殊に泣菫の「天馳使(アマハセヅカヒ)」の如きは、敍事詩として卓出した作、ミルトンやホメロスの史詩に近づくものともいはれた。白星には「心中おさよ新七」があつた、戲曲小說の材料も新體詩に採られるやうになつたのである。さては泡鳴の冥想詩劇「海堡技師」は口語を以て謠はれ、山崎紫紅の「日蓮上人」の如き他に見ることの出來ない長篇をも出すに至つた。

顧みれば、詩壇の風潮以外に、幾多の佳調もあつた。高安月郊の作は『春雪集』に收められ、白星にはなほ「日本國歌」があつて帝國主義を歌ひ、林外には『夏花少女(ナツバナヲトメ)』があつて華麗の辭また八七調四行八行二行の三節より成る新詩形を試み、河井醉茗に『塔影』があつて平淡の調をなした。そして兒玉花外もまた『花外詩集』を出して、放奔熱烈の情を絶叫した。花外はこれより先に社會主義を鼓吹して『社會主義詩集』を出し、發賣禁止の厄に遭

つたこともある。
三十七年、詩壇はまた一遊星を加へた。小說家の泰斗露伴が新體詩の處女作『出廬』を出した。これは『心の跡』の序として出したもの。詩と世と共に悅び愛すべく、實現と空想と相卽き相容るべきを詠じた。理を敍して精細、辭を行る自在、かの詩作に專らにして空しく詩形の末に齷齪するもの丶企て及び難いところがある。或は國詩始めて現ると絕賞するものさへもあつたが、これにつぐべき篇は出でないで終つた。

第六章　劇壇の消長

二十六年に「史劇論」を草した逍遙は更に二十八年の初から史劇「桐一葉」を、二十九年から「牧の方」を「早稻田文學」誌上に連載し、三十年には「沓手鳥孤城落月」を「新小說」に出した。

「桐一葉」は片桐且元を主人公となせる悲劇で、七幕十五場から成つてゐる。且元が、一方には德川家康の難題に惱まされ、一方には大坂城内の姦臣大野父子等の讒謗に苦しみ、つひに衷心の苦計施すに由なく、後事を木村重成に託して居城茨木に退隱する始末を主題とし、これに配するに淀君の猜忌狂憤、また且元の女蜻蛉が重成に對する可憐の戀を以てした。これは我が過去の劇壇に於いて見られなかつた好箇の史劇で、事件によく統一せられて從來の如き散漫な點なく、人物も亦各特殊の性格を具して類型に甘んずる所なく、しかも修辭の巧妙の誦すべきものがあつた。されど、評論壇には幾多の非難も起つた。それは多くは且元の性格に關するもので、或はその因循の態度、その淺はかな煩悶は、到底悲劇の主人公たるものでないといひ、或は歷史に拘泥して劇の本質

を沒却したものであるといふのであつた。しかし作者はもとよりその言の起るべきを期してゐた。作意は他に存してゐたからである。作者は、且元の悲劇は性格に因緣する所が少くて、境遇に因緣する所の比較的に多きに心を牽かれた。卽ち性格悲劇を欲せずして境遇悲劇を求めたのであつた。且元の悲慘な境遇に歷史的・倫理的・劇詩的感興を覺えた上は、美學上の約束の如きは必ずしも履行するに及ばぬものと信じた。性格悲劇にはなほ他に事件の發展を示すべき法もあれ、これは人を主とせずして事を主とし、局面の變化を多くして、然る後に翕然大團圓に至つて收むる所の從來の作風の、却て境遇悲劇に適するものとして採り用ゐた。

しかし、作者は批評の言によつて且元の誤られんことを恐れ、これが後段を書き加へて、その性格を明かにしようとした。『沓手鳥孤城落月』がそれである。されど、境遇悲劇たる本來の作には、何等の變化を及さなかつた。そして作者自らはいふ、もしこれを性格悲劇と見ば、前の『桐一葉』と同樣、且元と淀君との雙頭の性格悲劇であると。この作は三幕七場から成り、且元の最後と、大坂城の陷落とを示してゐる。且元は老猾家康の在世中は策の施すべきもののなきを知り、彼が他界を待つて兵を擧げようとするけれど、かれに達觀の眼なく、しかも重病のために事すべて志と相合はず、遂に落城となり、淀君母

子の最期となり、悲憤の極城門前に落命するに至る。殊に、淀君が狂亂の場の如き、いふべからざる悲慘の氣を齎すものがあつた。

『牧の方』は北條時政の後妻牧の方を主人公とした悲劇で、六段十七節から成つてゐる牧の方はおのが生める政範を寵愛の餘り、之を將軍になさうとして、千幡將軍及び尼將軍政子、またおのが策謀の妨となる義時を殺さうとする陰謀を抱いたが、義時のために早くも之を看破せられて、遂に自殺するに終る。おもふに鎌倉時代は歷史上に於いて。最も闇黑な時期とて、作家は之を利用し、牧の方を假り來つて縱横に歷史上の機微を描き出さうとした。而もこの脚本はこの篇を以て獨立するものではなく、『源實朝』及び『左京兆』と相まつて三部曲とし、以て義時を主人とせる一大史劇を作らうとしたのである。故に牧の方は此篇の主人公にして、必らずしも然らず、すべての者の死と滅亡とを莞爾としてうち眺めて他日の大望を牧めんとする梟雄義時の片鱗を示現する端役に過ぎなかつた。されど、なほその性格の明かなる、その事件發展の緊束せる、これのみを以ても裕に劇壇を賑すことが出來た。『源實朝』と『左京兆』とは遂に出でなかつた。

今やこれ等の脚本及び後に出でた正行を主題とせる『二葉楠』等によつて、逍遙の史劇作風を見るの要がある。然しながら、その大體は略、史劇論中に於いて、髣髴せしめら

れた。活歴の作風の缺陷を夢幻劇の長所を以て補はうと欲するのであつた。もとより史劇といふ以上史實の穿鑿は至れり盡せるものであつた。されど、活歴主義の如く、風俗の末に區々として役せられ、歴史の表面に屑々たるものではなかつた。成るべく歴史の裏を覗つて、そのかいなでの歴史に於いて期待し難い機微を穿たうとした。牧の方の陰謀がそれである。日元の忠不忠問題が歴史上未解決に殘れるに對して、一家の解説を試みようとしたのが、またそれである。然しながら、その史論家的態度が、勿論劇詩の本領に累を及すものではなかつた。近松と沙翁とに胚胎した一種のロマンチシズム、これを以て史劇の本旨とした。活歴者が寫實と呼び自然と呼ぶ形式上は姑く措いて、まづ内容情趣の自然を求めるにあつた。さりとて、近松の荒唐を離れ、默阿彌の淺俗を脱し、沙翁の形式によつて性格を描寫し、かねて因果應報の理を示し不易の性格を現はさうとした。

これ等の作によつて、世は始めて眞の史劇に接することが出來た。之を模するもので、高安月郊の『重盛』の如き、『眞田幸村』の如きものが出づるに至つた。されど、當時の梨園の狀態は直に之を上場することを許さなかつた。按ふに、當時の劇壇ほどに暗澹たる密雲に閉された時はなかつたらう。演劇の繁昌は幾多の觀客を得て、この時に極ま

り、しかも舊脚本を補綴するに過ぎず、藝術としては最も不振の狀態であつた。茲に改良といふは反動を呼ぶ下策新作は一切廢止、大小劇場を押通して舊劇舊歌舞伎の總ざらひ、今の見物に歌舞伎の愛氣を出さしめるのが改良唯一の方便であるといふ諷刺の言も出でた。これも畢竟文壇と劇部とが隔離して、新作家に舞臺上の知識がないため、また文壇の傾向も主觀的・抒情的で、敍事詩的なるべき劇の發達に適應せざる爲であつた。大勢如何ともすべからざるを見るや、輿論の形成といふことも唱へられた。見功者・劇評家文藝家・等の具眼者の間に一定の時好を諧調して一の輿論を作り、新俳優の出づる日を待つて活躍しよう、新舊の調和の如きは絶望の至り、一に全然の刷新を要するといふのであつた。三十年六月に帝國大學及び硯友社派・早稻田派・の間に組織せられた觀劇團はそれによつて起つたものであつた、されど何のなす所もなくて終つた。

同年、櫻痴居士は歌舞伎座の立作者として『俠客春雨傘』を出した。それは狂言世界に爛熟した陳套の材料を齎し來つた故に、俳優には素より修練の技、何等難澁の跡もなく、實演としては成功した代りに、また一の新意匠もなく、新思想もないものであつた。

劇壇が一般にかういふ狀態にあるので、かの壯士劇も漸くその基礎を堅くすることが出來た。そも／＼壯士劇たる、第一期民權自由の論が唱道せられた當時に胚胎して

ゐる。激烈な政論は、やがて政府の壓迫を蒙り、所謂壯士の徒は或は落語家となり、或は講談師となつて、政府を攻撃し罵倒してゐた。その中で、角藤定憲・川上音次郎・等は、また演劇の手段によつて政論を續けようとした。もとより彼等には劇について何等の素養があるのではない、唯柔道の型と俗臭紛々たる大坂仁和賀の模倣とを以て觀客を繋いでゐるに過ぎなかつた。そして、劇中には必ず法廷の場・演説會の場・を設けて、その得意とする所の辯舌を弄した。脚本の蕪雜生硬は言を俟たず、藝術として價値のないことは當然であつた。されど、この壯士劇なるものがあつて明治の生世話物は始めて出でた。從來演ずる所の世話物は、到底現代に觸れるものではなかつた。その缺陷に乘じて壯士劇は兎に角に成立した。されど、千篇一律の弊は世人の倦怠を招いて、一旦沒落の域に陷らうとしたが、それを窮命の域から救つたのは日清戰役であつた。彼等は直ちに戰爭の狀況を舞臺の上に移し、題して「戰爭見聞誌」といふ。かくて戰爭劇相踵いで出でて大いに好評を博し、堂々として歌舞伎座にその旗幟を掲げるまでに至つた。ひとり戰爭劇に於いて成功したばかりではない、多年の練磨はこの時に發して、明治の新世話物、即ち從來の政治劇とは全然趣を異にした新社會劇を成して、明治の社會狀態を活寫することが出來るやうになつた。壯士劇はこゝに於いて新演劇と稱せられ、壯

士役者は新俳優と稱せられるに至つた。

三十三年、その主領たる川上音次郎は歐洲漫遊の途に上つたが、新演劇は愈〻發達して行つた。殊に注意すべきは近松の復活がその新俳優の手で着手せられたことである。これは伊原青々園の主唱で、伊井蓉峰・河合武雄・によつて上場せられたのである。青々園はいふ、現時の脚本界の寂寥は如何ともし難い、故にまづ脚本改革の方便として近松の世話物をそのまゝに演ずべきである、その性格の鮮明にして心理的に深刻なるは、新時代の觀客の要求する自然の趨勢であると。三十五年の春『天の網島』を上場せしを手始として『堀川波の鼓』『戀八卦柱曆』『心中宵庚申』『冥途の飛脚』など、近松の作意をそのまゝに現はし、科白衣裳もすべて元祿時代を實現しようと力めた。されど俳優の技倆はいまだ之を完全に成すことが出來なかつた。たゞこれによつても脚本の沈滯と新俳優の技術の進步との、比較的に速かであつたことだけが認められる。

實に脚本の沈滯は甚しかつた。三十二年、左團次によつて上場せられた松葉の史劇『惡源太』は到底傑出せる作ではなかつたが、新作といへばまづそれに指を屈せねばならぬ狀態であつた。三十四年月郊、はイプセンの社會劇として『社會の敵』と『人形の家』とを世に紹介したが、何等の效果もなかつた。演劇の機關雜誌「歌舞伎新聞」が永い歷史

を有しながら、發刊の厄に逢つたのも、この間である。

三十六年、音次郎は歐洲から歸朝した。この年から翌年にかけて、舊劇の明星團十郎菊五郎・左團次の物故を見た。加ふるに、伊井蓉峰は鷗外の新作「玉匣兩浦島（タマクシゲフタリウラシマ）」を上場した。是等の出來事は少からぬ動搖を劇界に與へて、觀客俳優のすべてに一刷新の兆は起つた。音次郎は歸朝匆々「オセロ」の飜案劇を出した。作者は江見水蔭で、作そのものの價値よりも、寧ろ舞臺上・興行上に於いて西洋劇の形式を採れることが、大いに人の好奇心を動した。爾後「ハムレット」「マーチャント・オブ・ベェニス」「サフォー」「パオロ」「フランチェスカ」等の飜案劇が續々として上場せられるに至つた。されど、これ等は實演としては兎に角に、作そのものとしては多大の價値は存してゐない。「玉匣兩浦島」に至つては決して、さうではなかつた。

「兩浦島」は我が劇壇に於いて未だ試みられない新調を帶びてゐる。內容は浦島子の古傳說に盛るに新思想を以てして、新日本の將來を現はし、形式は七五調で、前の人物が七をいつて後のものが五をいふが如き、西洋の韻文式の脚本の呼吸を活きた例によつて示すものであつた。鷗外の新作「日蓮上人辻說法」もまた上場せられた。前者の如く七五調を取らなかつたが、よく日蓮の性格を現はし得て、沈靜森嚴の氣に充つるもの

がある。

月郊も亦「大鹽平八郎」「江戸城明渡」等の作をなし、また「闇と光」と題して「キング・リヤ」を飜案し、漣山人も「瑞西義民傳」と題して「ヰルヘルム・テル」を飜案した。されど劇壇にはこれ等以上の一新武器が加はつた。小説を脚本化する流行がそれである。この事はさきに大阪の劇壇に於いて現はれたが、今や觀客の好尚のあるところを察して、靡然として行はれた。三十六年、德富蘆花の「不如歸」は新俳優によつて演ぜられて好評を博し、爾後新派の忠臣藏の稱を受けるに至つた。ついで紅葉の「金色夜叉」菊池幽芳の「己が罪」鏡花の「高野聖」も演ぜられた。

舊俳優もこの趨勢に乘じて新興の氣を起し、三十七年には、大阪から上京した片岡我童は、中村芝翫・市川高麗藏と共に、「桐一葉」を演じ、續いでまた「不如歸」を演じ、三十八年には本郷座に據れる高田・河合と相對抗して、幽芳の作「乳兄弟」を演じた。これがはしなくも新舊俳優の技倆を比較するに、都合のよい機會を與へた。新作物に對しては舊俳優は新俳優の好敵手ではなかつた。かくて新俳優の名聲は大いに上り、その演技は一箇の藝術として認められるに至つた。されど完成の域に達するまでには、なほ幾多の洗煉を經なければならぬことは勿論である。兎に角に、これ等の動搖によつて、文壇には

文學者と劇部の者との密接の關係を來すに至つた。從來歌舞伎が要求した舞臺上の條件は必ずしも採るの要がなくなり、之に代つて西洋劇の標準を以て臨むやうになつた。劇文學の勃興は隨つて來り、諸作家が脚本の飜譯又は創作に力めることが少くなかつた。小栗風葉の「豫備兵」柳浪の「目黑巷談」はその一例である。これと共に能樂は復活する、西洋音樂は輸入される、ワグネルが紹介され、歌劇の論が時めきそめた。かくて、この趨勢は日露戰役に會して、逍遙をして「新樂劇論」を草せしめた。

逍遙は「牧の方」「孤城落月」以來筆を絕つて專心育英に從事してゐたが、時運を見て再び蹶起し、多年の蘊蓄を傾けてこの新論をなした。時は三十七年十月。いはく國劇刷新の時期が來た。その刷新は根本的のものでなければならぬ。一體世界の各國が各〻その特有の美なる要素を發展し、醇化し、相寄與する事によつて、始めて世界全體の眞文明が集大成せられる。この意を推せば、模倣は排すべき手段、折衷も亦特質を相殺し相沒する仕方、それ故に國劇改良の方針の如きも、國劇固有の特性を發揮し、それを發展し醇化するを主とせねばならぬ。さらば固有の特性には如何にといふに、科白劇を主とする者と、樂劇を主とするものとがある。二者共に重んずべきも、當面の問題としては、まづ後者の刷新から始めねばならぬ。樂劇を主とする傾向は、すでに能にも歌舞伎にも

振事にも見られる。されど、能や歌舞伎は過去の藝術、故に常盤津・長唄等に作ふ振事劇を醇化し發展して、現代の好尙にかなふべき新樂壇を起すべしといふのであつた。この企圖を實現した「靑生菓質」といふべきものは、卽ち「新曲浦島」である。

「新曲浦島」は浦島傳說を題材とせる三幕十二段の樂劇。浦島乙姬は皆過去の音樂を現はせる象徵、そして歸鄕後の浦島を慰める靑年男女は又將來の音樂の象徵。浦島の老翁となるや、天明け旭昇るを見て、靑年と共に將來を祝福するといふに終る。淨瑠璃のあらゆる節を取捨し、新樣の舞踊を配し所々に科白を加へてゐる。いひしらぬ幻影に憧れる浦島、龍宮にあつてはまた父母の幻影に心迷ふ浦島、歸し來つて神韻漂渺たるものがある。尋いで逍遙は、「新曲かぐや姬」を出し爾來相踵いで新作を出した。かくの如くにして劇壇は建設の時代に入つた。

第七章　浪漫的運動

三十一年には「新著月刊」廢刊し「國民の友」その後を追ひ、「早稻田文學」もまた文壇から去るに至つた。そも〳〵文壇に於ける是等の萎靡沈滯は、いづこから來れる。一に實世間主義現實主義の汪流に發したのである。日本主義の唱道もまたこの現實主義の上に立つたのである。そして、その一轉する所は、卽ち個人の覺醒であつた。倫理道德の根本義に關する論議が頻りに反覆せられた。宗教論もまた頻りに現はれた。日本主義の主唱者井上哲次郎はいふ、教育界に於ける目下の缺陷は德育の不振であるが、それは基本をなすべき宗教の存在しないからである、しかも今日の宗教はいづれも不完全たるを免れない、たゞこの諸宗教が次第に融合調和して將來の宗教を胚胎すべきである、そしてかゝる大勢は畢竟知信の關係を內存的のものとし、實在の信仰を根據として實在論を立てる歐洲哲學界の趨勢に從ふものであると。されど、その知信の合一も實際にあつては未だしく、要は倫理道德に對する動搖であつた。その動搖はすべて個人の覺醒となり自覺となつた。今は紛々たる煩瑣の學風の下に跼蹐すべき時では

なくなつた。たま〳〵獨逸の思想家フリードリッヒ・ニーチェの評の傳はると共に、その傳記や學說やが直に紹介せられた。二者相依つてこゝに我が文學界思想界にロマンチック・ムーヴメントの勃興となつた。そして、その運動の先登に立つたものは、日本主義を唱へた高山樗牛であつた。樗牛は早くも文藝の解放を說いたものである。いはく煩瑣な學風は動もすれば趣味を沒し、人情を沒し、常識を沒し、亦動もすれば人生の大本に對してその統一的存在を打破する惧がある。この弊を救ふべきものは文學者である、なほ廿世紀の初期に於いて、詩人が蹶起してロマンチック・ムーヴメントを導き起した如く、今や思想感情の自由の爲に文藝の解放の爲に煩瑣の學風と形式的な德育とを破棄せねばならぬと。それがニーチェに會するや、個人の意義を明瞭にし、進んで個人が社會に對する反抗をも說くに至つた。そして、その反抗を强くするものは文學者でなければならぬ、しかも一代の文明を抱擁して自家の理想中に化育せんとする文明批評家たる文學者でなければならぬ。なほ一詩人にして獨逸の思想界を動搖しつゝあるニーチェの如きを要するとまでいつた。

三十四年六月には、ニーチェを說くものが他からも出でた。「フリードリッヒ・ニーチェ論」を「帝國文學」に連載せる登張竹風がそれである。その說くところは、殆どニーチェの思想

を借り來つて、現代の道德文明を罵らうとするものであつた。國家主義・帝國主義・に對する個人主義、歷史尊重主義に對する藝術主義、平凡なる教育方針に對する天才主義、善惡說に對する絕對的權威說、皆一として現代に對する反抗破壞でないものはなかつた。「非文明論」「非道德論」は相踵いで草せられた。世評は囂々として起り、贊否の聲は喧しかつた。樗牛は之に和して、益〻その筆鋒を銳くして、挑戰的・反抗的・破壞的態度を取つた。倫理學者を道學者として、宗教家を僞善者として、罵倒した。あゝパンを求めて與へられるものは石のみ、信仰を求めれば信仰の說明、哲學を求めれば哲學の歷史を與へられるに過ぎない。その求めんと欲する所は偉大なる人格、そしてそれは强大なる意力の發現である。その意力の發現は本能滿足となり、こゝに始めて生々存續の勢力を有して、宇宙發達の元氣の藏せられる所、人生至樂の境地、を現し來るのである。道德から來り知識から來る滿足の情の如きは、畢竟假面のみ僞善のみ。本能の滿足に於いて始めて絕對の價値は起る。吾等をして自然の子の如く語らしめよ、かの性慾の發動の醇なるものは、眞にこれ天下の至美・人生の至樂・である。性慾のない所に人生幾何の價値があるかとも叫んだ。謂ふ所の美的生活論が卽ちそれである。更に平淸盛を論じて、自我の滿足を外にしては眼中何等の價値を認めず、それを遂行した偉大なる人格として

推稱した。かういふ論には大なる矛盾がある事は自明の理であつた。されど、當時にあつては、この論は理といふよりも詩として青年の間に喧傳せられた。青年は共に醉ひ共に歌ひ、そして共に夢幻の境に彷徨した。さきには「文學界」によつて鼓吹せられた主情主義に身を委ね、今は美的生活の詩に心を託した。新詩社の一派が星や菫を歌ひ、赤裸々な性慾を詠じたのもこれあるがため、舊道德・舊思想・に反抗する態度を取るに至つたのもこれあるがためであつた。この頃、キーツ・ロセッティの詩風が新體詩界に横溢したのもこのロマンチシズムの上に立てるものでなからうか。傳說神話を主題とする敍事詩の勃興したのも、またその主義の重要なる一要素として出でたのではなからうか。

美的生活論が文壇に及ぼせる影響は、たゞ之を一時の變現象として見るに過ぎなかつた。しかし、それが實行に移り、風紀を紊亂し、なほ遊蕩の兒に此上なき口實を假すに至つては、世の敎育者倫理學者はつひに默することが出來なくなつた。最初はニーチェの推稱をば人道の敵として賤み、次ぎに國民の矜持を侮蔑せらるゝが如くに感じて憤慨し、混亂せる我が德育界の一大妨礙として激怒し、つひに「馬骨人言」を草したのは逍遙であつた。これは三十四年の十月から「讀賣新聞」紙上に連載せられた。匿名を以てし、

諧謔の筆を以てして、縱橫にニーチエを論じて、その思想の由つて來る所を尋ね、循俗の驕兒であると斷じた。竹風は直ちに之に答へて應答數次に及び、島村抱月も亦論ずる所があつたが、ニーチエの叫びはいつとはなしに漸く終りに近いた。

かゝる間に樗牛は個人意力の完全なる發現をば平清盛に求め、更に日蓮上人に求めた。日蓮の取るべきは我を高しとする點にありとした。この態度はやがて極端なる主我主義たらしめた。イゴイスト、人によつては此名前ばかりでも既に多くの罪惡を豫想する、剛情・我慢・私利・私慾・不人情・沒道義・これ等の聯想が起る。されどなほ自分は實際イゴイストであると告白するに至つた。人生の價値は我自ら造りて始めて價値ありとするに至つた。この主我主義の傾向は、樗牛その人にあつても、いつしか信仰の境に入つて晩年の飾りとなれる如く、文壇もまたいつか宗教の色調の濃かなるものを見るに至つた。これ懷疑の後に現はるべき光明のおのづから來らねばならぬ趨勢であつたのである。

基督教の大學傳道と稱して辻說法を始めたのも此時・德富蘆花・中村春雨等の宗教小說が愛誦せられたのも此時である。淸澤滿之は雜誌「精神界」によつて心からの主義を立てゝ、心內に滿足を求め、一切の苦樂運命に對して自省し、以て平安不動の地に到ら

んとする主張をなし、近角常觀はまた絶對他人、如來歸命、往生極樂、善惡不擇の福音を宣し、伊藤證信も亦無我愛主義を鼓吹した。これ等は皆佛教から來つたものであつたが、基督教もまた新調を帶びて、海老名彈正等の進歩思想に集ふものが甚だ多かつた。姉崎嘲風の『復活の曙光』は神祕主義を唱へた。その説く方面は異なれど、これも宗教的情調を普く世に布かうとするものであつた。その傾向の極まる所は、卽ち三十八年五月雜誌「新人」に於いて公にせられた「予が見神の實驗」である。これぞ綱島梁川の筆。

「嗚呼吾れ一度神を見てしより、おふけなくも此の一大因緣を世に宣べ傳へんと願ふ心のみ日毎に强くなり行きて、而も如何にして之を宣べ傳ふべきかの手段に至りては放焉として闕けたり。如何にして目的を達すべき。顧みればわが見證の意識の超絶駭絶して幽玄深奧なる、到底思議言説の以て加ふべきものなからんとす。人の世の言葉や思想は其の神祕的具象的事相の萬一をだに彷彿せしめがたき槪あるにあらずや」と。更に見神は一度にあらず、二度三度、その最後のものこそ最も驚喜の極であつたといふ。

「一燈の下小生は筆をとりて何事をか物し候ひし折の事なり、如何なる心の機にか候ひけむ、唯だ忽然はつと思ふやがて今までの我が我ならぬ我と相成り、筆の動くまゝ墨の紙上に聲するそのまゝ、すべて一々超越的不可思議となつて眼前に輝き申候。この

間僅かに何分時間といふ程に過ぎずと覺ゆれど、而もこの短時間に於ける謂はゞ無限の深き寂しさの底ひより堂々と現前せる大いなる靈的活物と、はたと行き會ひたるやうの一種の Sshocking 錯愕驚喜の意識は、到底筆舌の盡くし得る所にあらず候」と。

學者宗教家は之に對して交〻冷酷の批評を加へた。見神は所詮迷信、七月二十六日の夜に三體佛の上るを見るの類なり、催眠術によりても神は見らるべしと評する者もあつた。見神は幻覺なり、宗教は神と合一するを要す、神を見るの謂に非ず、神を求めんよりは一身を修むるこそ然るべき策なれともいはれた。されど、青年の間には、前の樗牛熱にも比すべき程の梁川熱が渦卷きかへつてゐた。その聲を聞いて、また自覺者なり豫言者なりと稱する徒も少なからず出でた。よしや將來の宗教は一般的なるべく、道德的なるべく、合理的なるべく、見神の實驗などといふ一時的のものにあらずして、始終靈的感應を有するものでなければならぬと論ぜられたにもせよ、つひにこの見神の言によつて、我が宗教情調は嘗て見難きほどの高潮に達した。梁川が法悅の人となりて神子の自覺を持して死に面する病牀の苦をも忘れた時は、卽ち我が思想界が倫理の研究から主我的傾向・主觀的傾向を經て、つひに宗教的自覺に入つた時であつた。されば、それは理性と神祕とを合せ、智と情とを諧調する努力であつた。されど、要するにさき

の主觀的傾向と相竝びて情緒的といふことが出來る。　もとより理に即すとはいへ、大勢より見れば、なほ情に傾くものであつた。　よしその人は、かの主觀的反響をば直に事よりの聲を聽取して得た如くに妄想し狂喜するリヴイバリスト一流とは全然異なるものありと歸するも、畢竟情緒的と見るべきであらう。　この情緒的はやがて一のロマンチシズムを形成した。　この運動は創作の方面には動くこと少くして、たゞ思想界評論界にのみ活躍した。　この運動の盛んなる時は文壇が最も寂寥を極めた時で、逍遙退き、四迷去り、思軒世を辭し、子規・紅葉も他界の人となつた時であつた。　かくの如きは、所詮、文學の大旋轉の來るべき兆を示したものであつた。　文壇の蔭に於いて横流せるロマンチシズムは、やがて來るべき文學の諸條件を養成し化育しつゝある搖籃の地であつた。　情の反動は理となり智となる。　情緒的反動は知力的のものを作る。　まして日露戰役は、かの主我主義を益〻旺盛ならしめて、愈〻現實に觸れしめた。　現實的文藝は、かくして起つた。　自然主義文學の勃興がこれである。　而もこれが歐洲文學の轉移と同一の徑程を經たものである。　我がロマンチック時代大嵐時代は、この意味に於いて重要なる時期を劃してゐる。　そして時を以てすれば、三十四年から八年に至るの數年間に過ぎない。

第八章　小說と實世間

觀念小說・深刻小說・心理小說の行はれるや、さしもの娛樂本位に立つた紅葉も、『多情多恨』を草したが、作風又一轉し『金色夜叉』の稿を起すに至つた。高等中學生間貫一が、許嫁の女お宮が富の爲に己を捨てゝ他へ嫁するや、憤怨抑へんとして抑へきれず、世は所詮金のみと觀じ、惡辣なる高利貸となつて復讐する所あらんとした。宮はまた一度は富に眩惑したが、富を得て始めて戀の貴きを知り、煩悶の極幾度か貫一に哀願した。されど、貫一はなほ初一念を飜さずして金のために努力する、しかも宮が衷心の言に心のうち一脈の和ぎのほのめくもいがあつた。紅葉はかくの如く敍し來つて、未だ終局をつけざるに、宿痾の惱み革つてつひに起たず、その腹稿を齎したまゝ、七度生れて文章のために盡さうとの遺言を殘して、遂に他界の人となつた。それが三十六年の秋である。

『金色夜叉』は、さきの『多情多恨』の筆致とは異なつて、その文章は絢爛を極めてゐる。構想も亦幾多の波瀾があり曲折があつて、一度は劇にも演ぜられた程に變化の多いものであつた。しかし『金色夜叉』の當時好評を博したのは、よく時勢の要求に投じたから

であつた。この作の初篇が「讀賣新聞」紙上に連載し始められたのは三十年一月である。この時は深刻小說・心理小說・の餘弊の滔々として底止する所を知らぬ時であつた。不健全な作、不道德な作といふ譏が頻りに聞えた。狹斜小說の流行も、この時に起つた。こゝに於いて、實業小說・政治小說・社會小說・等の要求は盛んになつた。要は實世間と小說とを接近せしめようとするものであつた。心理の末の區々たる努力、社會の皮相、一局部の觀察は用なき努力として斥けられた。兎に角に取材の範圍を擴大せよ、實業・政治・教育・宗教・とあらゆる方面に着目せよと說かれた。『金色夜叉』はおのづからこの希望に觸れて居たのである。この傾向を更に強く持ち來つたものは、內田魯庵である。

魯庵はさきに不知庵の號を以て評論の筆を執つた。今は一面に於いては小說の向ふべき所を論じながら、一面には創作の筆をも執つた。『暮の二十八日』は當時にあつては一般の作風と趣を異にしてゐる。事業に對して猛進せる青年が、一旦蹉跌して煩悶の極身を處する所を知らなかつたが、宗教の光に接して平和の生涯に入るといふのである。『今胝世男』『浮き枕』など、皆この宗教の情味を加へ、また之に一種の諷刺を藏してゐる。

然しながら、評論界はなほ慊らずとして、時代精神論となつた。三十二年に樗牛の唱

へた所說が、それである。大なる文學は大なる人物と等しく、最も好く時代の精神を代表せるものでなければならぬ。さりとて世俗の好尙に迎合するの意ではない。ただ能く當代國民の感情及び欲求に最も明瞭なる發聲を與へ、その愉悅する所の前途に最もよき具象を附し、兒よ爾等の理想茲にありと告ぐるものでなければならぬと。魯庵も亦いふ、今の小說家は身常に社會を離れるが故に、全く時代の精神を理解して居らぬ、政治・宗敎・學術の社會は彼等に取つては風馬牛である。されば、その作は新聞紙の三面雜報を延長したに過ぎないと。露作もまたいふ、作家として世に立たん者の作としては、少くとも三十歲五十歲以上の所謂世間の人に感興を與へるものでなくてはならぬと。されど、時代精神論の如きは、その實甚だ空漠たるものであつた。時代精神の何たるは遂に示さなかつた。理想といひ精神といふも抽象的のみ、藝術の表現は個人化でなければならぬ、これ今の作家の試みる所であつて謂ふ所の要求に應じて居るのではないかといふ異見も創作家から出でた。その論の當否はともあれ、小說壇には愈、實世間と密接になり行く傾向は加はつた。その具體的要求は社會小說であり、政治小說であつた。宙外の『腐肉團』風葉の『政鶯馬』德田秋聲の『惰けもの』が、その代表の作品であつた。魯庵の『かたうづら』『霜くづれ』も、亦同じ風潮の上に成つたものである。されど、大

勢から見れば、到底紅葉等の技巧に及ばないものであつた。宙外の如きも、佳作は却て『新機軸』『影日なた』にあつた。それはさきの漠然たる社會問題を以てせずして、從來の心理描寫を加へたものである。それと同じ態度は柳浪にも現はれて、『縺れ絲』『背ぬすみ』『紫被布』『亂菊物語』等を出した。

この虚に乘じて、新聞小說家として各〻少からぬ讀者を有するものがあつた。皆一般文壇の風潮の外に立つて、俗衆の好尙に投じようとするのであつた。浪六が『朝日新聞』に出した『五人男』の如きは五人の苦學生を敍して、依然たる遊俠の氣質を籠めた作であつた。弦齋の作は最も普遍的なもので、『小猫』『深山の美人』等を出し、就中『日の出島』に於いて大いに喝采を博した。心理描寫が一卷を要すべき記事も、これにあつては僅に二三頁、話柄の豐富・局面の變化・皆筋を主としてゐるので、讀者を維ぐことは他の及ぶ所ではなかつた。遲塚麗水も亦『さんざ時雨』『照日松』に於いてその手腕を揮ひ、澁柿園は『島左近』『五月女坂』等に歷史小說家として漸次その技倆を開展しつゝあつた。

かういふ新聞小說の歡迎せられたのは、たゞ心理描寫や社會問題の仰山らしいものの避けられた爲のみではなかつた。一面には小說と道德との調和が考へられて來たからであつた。嚴肅な家庭に於ける趣味ある讀物を求める聲は漸く世に高まつた。

少年に小波の御伽話を與へた如く、健全な小説を家庭に寄與するものゝ出づることが待たれた。社會小説の活動は、ともすれば社會生活の偏頗な一面、暗黑隱微の方面に即するやうになり、社會の敗殘者に對して同情し、罪惡を庇護する傾を有するやうにも見られた。その反動として起り來つた要求は、もとより如上の新聞小説を以て滿足すべきものではない。こゝに於いてか『不如歸』は蘆花によつて三十二年から「國民新聞」に出で、幽芳の『己が罪』は三十二年に『大阪毎日』に出で、中村春雨の『無花果』は三十四年から「大阪朝日」に出でた。田口菊汀も亦「片男波」等を「萬朝報」に出した。皆從來の罪惡小説から脱して健全な道德的趣向を具し、所謂家庭小説・光明小説として世に喧傳せられた。この中でも『不如歸』は大いに嘖々の評があつた。されど、その內容は新舊思想の衝突を描き、夫婦姑嫁の關係を敍したに過ぎない。上流社會に材を取り、夫婦の間の戀愛を描いた點が從來のとは、稍趣を異にしてゐる。蘆花は更に『思出の記』を出し『黑潮』を出した。構想遙に前者にまさり、殊に「黑潮」の如きは、よく明治の社會の裏面を描寫し盡したものと稱せられた。春雨はまた『小羊』『密航婦』等を出して益々宗教の情調を發揮し、幽芳は「乳兄弟」を出して清新の興味を發揮するに力めた。草村北星の『濱子』といふは稍後れて三十五年に出でたが、またこの傾向をうけて精進主義・活動主義を鼓吹してゐ

た。同じ作者の『澄子』といふのも、同一の主義から成つてゐた。宙外が方面をこそ異にすれ、その主張する田園生活論に立脚して、ひたすら田園の平和淡靜の趣味を傳へようとした『遺る光』『乳母が家』の如きも、同一型と見ることが出來やう。

時の先後をしばし措いて、かく數へ來つた家庭小說、所謂道德と文藝の調和の上に立てられた小說は、藝術上の價値はともあれ、讀者の範圍を從來よりも廣くし、また一般讀者社會の讀書眼を向上せしめたことは記憶せねばならぬ。

小說壇に於いて、かゝる趨勢が起つた時、全然背反せる態度を取るものが他に存してゐた。小栗風葉・小杉天外によつて唱道せられた寫實主義がそれである。風葉は硯友社の一人、紅葉の門人として華麗の筆を以て稱せられた。二十九年に『寢白粉』『龜甲鶴』を出すや、暗黑面に於ける錯雜せる戀愛を描き出して、評壇の論議を醸したが、三十一年に『戀慕流し』『鬘下地』を出して再び社會の暗黑面を敍し、更に三十四年に至つては『醒めたる女』『黑裝束』等を出した。『醒めたる女』の如きは、不倫不德の行爲をも赤裸々に描いてゐる。本能滿足說の盛であつた時とて、その風潮に棹した作であつたのである。

天外は初め綠雨の風を繼いで諷刺に長じ、はやくも『改良若旦那』等の作があり、『奇病』『卒都婆記』の如き佳作があつたが、三十三年に、かねて專心工夫した寫實の筆を執つて『初

姿」を出し『女夫星』を出し『戀と戀』を出し、更に三十五年にはその主張を最もよく具象化した『はやり唄』を出した。

「自然は自然である、善でもない、惡でもない、美でもない、醜でもない。たゞ或時代の或國の或人が自然の一角を捉へて勝手に善惡美醜の名を付けるのだ。小說また想界の自然である。善惡美醜の孰に對しても敍す可し、或は敍す可らずと覊絆せらるゝ理窟はない。たゞ讀者をして、讀者の官能が自然界の現象に感觸するが如く、作中の現象を明瞭に空想し得せしむればそれで澤山なのだ。讀者の感動すると否とは詩人の關する所でない。」これぞ『はやり唄』の序に於いて作者の言つてゐるところである。『はやり唄』の題材は上流社會の不倫の戀愛、しかしそれが境遇と遺傳とに左右せられることを敍してゐる。これをかの序文と相對比して考へると、全然佛國の小說家實驗小說を標榜せるゾラの態度を模倣せるものである。

天外はまた『魔風戀風』を出した。寫實主義はます〳〵その極端にまで進み、現代の青年學生を主人公とし、その實際狀態をそのまゝに描寫しようと力めた。之に對して風葉はまた『青春』を出して、同一の材料を同一の態度を以て取り扱はうとした。されどこれにはゾラよりも、ツルゲネフのルーヂンの影響が少からず見える。

これよりさき、我が小說壇はニーチェから來つた本能滿足論に影響されることが多かつたが、更に西洋小說の影響はなほ甚しかつた。飜譯小說は必ず雜誌の大部分を占めてゐた。而も、それはリットンやユーゴーではない。若松賤子にバーネットの『小公子』の譯があつたことはいはずとも、魯庵にゾラの『戰塵』の譯、四迷に『片戀』『浮草』『夢語』の譯があつた。『浮草』はツルゲネフのルーヂンにして、『片戀』もまたツルゲネフの作、共に當時を動かしたものである。文學界が南歐文學を唱へると、上田敏は近英のロマンチック文學を紹介した。涙香にユーゴーの作『レ、ミゼラブル』を『噫無情』と題して譯せるがあると、鷗外にアンデルセンの傑作『インプロヴィザトル』を『即興詩人』として譯せるもあつた。ホーソンの『緋文字』ドーデーの『走馬燈』デューマの『椿姬』ユーゴーの『鐘樓守』等またた相踵いで出でた。樗牛が所謂自國の作を讀まざる風をなせる時ともいはう。かれはいふ『吾等もし小說に渇ゑなば、ゾラ・ズーデルマン・シエンキーヰッチ、凡て思ひまゝなり、何を苦んで今の紛々たる作家の子供らしき製作を要せんや』と。實にヨーカイ・グスンチオ・ハウプトマン・モウパスサン・ゴルキー・イプセン・トルストイ等について云々せられたのも此時である。風葉・天外・の寫實主義の出でたのも、蓋し偶然ではない。

永井荷風が三十五年に出した『地獄の花』も、亦この趨勢に立つたものである。不倫の

戀愛を題材として、本能滿足主義を表はしたもの。 しかもその態度はゾラによつて、境遇と遺傳と相俟つて事件を發展せしめてゐる。 荷風はまた『夜の心』を出し、風葉の『涼炎』德田秋聲の『春光』と相對峙して、ます〳〵本能と道念との衝突を描いた。

かゝる寫實主義の勃興に對して、戀愛以外本能滿足以外に人生の意義あることを示さうとしたもの、前にいつた『黑潮』が既にそれであつたが、また木下尚江の『火の柱』があつた。「人類の一員としては毫厘なりとも四海一家の大理想に此世界を近づかしめ、日本國民の一員としては進歩軍の別働隊として一頓挫せる維新の風潮に鞭たんと欲するのみ」と。 かういふ抱負の下に出された『火の柱』は、熱烈な筆を以て現代社會の不健全な思想を罵り、罪惡に充ちた政治界實業界を罵つて、その懷抱せる社會主義を宣傳しようとするものであつた。 尋いで出した『良人の自白』も亦同じ主義によつて描かれてゐる。

こゝに別途から他の境域を開拓しつゝある鏡花のあつたことを忘れてはならぬ。「湯島詣」「黑百合」「高野聖」「通夜物語」「白羽箭」等の傑作を續出してゐたが、社會小說にも政治小說にも眼を注ぐことなく、ひたすらに自家特有の領域に向つて進むものであつた。 もとより現代の壓迫に煩悶する者を敍し、一種の意氣を示してゐるが、而もその反

抗は空しく現實に對せずして、いつか超世間の夢幻境に入るのであつた。殊に文辭の優麗奇峭詩趣の充滿したものはあるが、時に晦澁朦朧、作者の意の那邊に存してゐるかに迷はしめるものが少なくない。御伽話と同じものに陷いることがないでもなかつた。

こゝにまた、久しく筆を絶つた露伴が蹶起したことをも忘れてはならぬ。「天打つ浪」の大作が三十六年から「讀賣」紙上に掲載せられた。愈〻出でて愈〻高遠の理想を寓し、一道の宗教的情味を寄せ、その筆益〻雄渾、流石に群小を拔くの概があつた。されど、これも完結に至らないで終つた。かくして小說壇は自然主義の隆盛にうつる。げにその兆は已に花袋に見え、藤村に見え、獨步に見えてゐたのである。

第四期　日露戰役後

第一章　評論壇の活躍

我國文學は上古に、平安朝に、鎌倉に、室町に、江戸に、各時代を劃して明治に入り、今やその第四期に入つた。然るに、こゝにわれ等は空前の大變動に會した。實に日露の戰役を軸として轉回した文學の推移ほど激甚なものはない。各時代の小なる區劃を撤して、これを日露戰役以前の文學と一括して、戰後の數年間の文學と對比するを至當と見る程に、戰後の文學は他の時代に紛れない顯著な特色を有するに至つた。その特色とは何か。これ實に國民的自覺、更にいはゞ人種的自覺から出で來つたのである。日露の戰役は勿論わが帝國が二千五百年來築きあげた運命を賭した戰爭であつた。顧みれば、かの三國干渉に終りを告げた日清役の如きすら、なほ世界に伍するの自覺を國民に抱かしめたものであつた。それが日露の戰役に於いては、更に世界の未曾有の捷利を得て、啻に世界の强國たるのみならず、また世界文明の發展に參與するの權あることを自覺せしめた。かくて白皙人種以外の人種を率ゐて立ち彼と我との文明を渾融し

て、更に卓越した新文明の建設を期待するに至つた。日清戰役の後に起つた日本主義の如き小なる主張ではない。日露の戰後すべてのものに國民的色彩を帶びしめ、國民的文學を建設しようとするのも、要するにかゝる世界に濶步すべきものたらんを欲する故である。從來たゞ彼土の新思潮の入り來るごとに動かされた思想界文學界は、我から進んで之を拉し來らうとする。

かくの如くにして、戰後の自覺は我が國民をして世界の大勢に親しく接せしめるやうになつた。すべての動搖がこれに根ざして起つた。加ふるに國民の內的生活はすでに彼土の新しい傾向と共鳴すべき位置にまで進み、生活狀態の變移も亦所謂世紀末に觸るべきものを有してゐた。ニイチェ主義の鼓吹は既に懷疑的個人主義的傾向を世に廣まらしめた。そして、これ等の傾向は、すでに一に歸してこゝに現實主義となり、これを文藝の上に見ては自然主義となつた。

藤村や獨步の作品に自然主義の色彩を見たのは三十九年の初頭であつた。されど作者はもとより意識して之を自然主義の運動の先驅とならうとしたのではなかつた。それ等を自然主義と稱したのは、評論界がしたのである。然し、その名目が附せられてから、始めて確的なる意識に上り、その主義の宣傳は殆ど狂飆の如き勢を以て起つた。

最初は作品に發して、作品の形式論に上つたものゝ、つひに進んで舊思想の打破、舊道德の破壞となつた。創作界はつねに評論界の指導に從つて動いた。他に見難い評論界の異彩は、かくしてこゝに發せられたのである。

評論界に於ける自然主義論は、まづ藤村・獨歩・の作品の批評から始まつて、排理想排技巧の論議をなした。藤村の作「並木」に就いてモデル問題が起るや、それを緣として歐洲に於ける自然主義を論ずるものも少なくなかつた。その中に注目せられたのは、上田敏と田山花袋とが、各異なる見地から彼我の自然主義を論じたものであつた。敏は歐洲殊に佛蘭西の自然主義の消長を說き、それは已に三四十年前にその勢力を失墜したものであるとし、更に我國に於けるそれは彼の影響を受け、また模倣しようとするものではないかといつて、この新傾向のあることを難じた。花袋は我にこの主義の起るべき理由のあることと、殊に歐洲の自然主義が我に入つて、我がものとなつて、わが日本の自然主義をなさねばならぬことを說いて、新傾向に就いて贊した。しかも二者共に自然主義の明確な概念に就いては示すところがなかつた。

その他の自然主義論の重なるものは、長谷川天溪によつて代表せられた。曰はく、形式打破、曰はく幻滅、曰はく無解決、曰はく排論理的遊戲と。要するに、わが從來の文學が

人生に根柢を置かず、文學の眞義に遠ざかれるを痛切に深刻に叫ぶものであつた。舊思想を打破し舊套を破毀しようとする努力であつた。幻影や空想やこゝに消滅して、現實の慘憺たる事相を親睹する、絶望となり無目的とならざるを得ない、人生は所詮無解決のもの、それに解決を與へるのは一の遊戯に過ぎないといふのであつた。かういふ主張は三十九から四十年へかけて隨所に見られた。この破壞につゞくに破壞を以てせる反抗的態度は、やがて新に建設せらるべき文藝の素地を掃ひ清めるもの、怒號の聲の高かつたのも當然といはねばならぬ。

四十一年の一月、「早稻田文學」には東西の事例により、理論から、また歴史から、自然主義の本體を論じた。かく明確にその概念を說いたものは、從來かつて見なかつた所である。島村抱月は「文藝上の自然主義」と題して、まづ筆を日本の自然主義に起して、歐洲に於けるクラシシズム・ロマンチシズム・及び自然主義の消長を說き、寫實主義と自然主義との區別に及び、さて自然主義の描寫の目的題材に就いて說をなしていはく、「寫實主義は現實を寫すを目的とするといひ、理想主義は理想を寫すを目的とするといふ。然るに自然主義は獨り眞を寫すといふ。眞といふ語は自然主義の生命であり、モツトーである。自然主義から言はすれば、理想といひ、現實といふ語はまだ淺い、第二義の役にし

か立たない。なまなか理想といふが爲に、狹隘な個人の選擇技巧を自然に加へて、厭惡輕蔑の念を生ぜしめる。なまなか現實といふが爲に、外形に拘泥して深奧な自然の味に觸れ得ない。是等の上に立つて第一義の標的となる者は眞に外ならぬ。文藝の目的は眞を寫すにある。然らば、かやうな第一義の眞は、たゞ深い高いといふだけで明かに手に取ることは出來ないのであらうか。これと第二義の理想・現實・などいふものとの干繫は如何。之に對する答は、やがて自然主義の題材論である」と。かくて題材は社會問題と連り、個人主義と連り、根本道德問題に入る、これ自然主義が近代的傳習破壞的である結果であつた。また自然主義が自然といふことから、現實に連り、科學に連る、科學は心理學、生理學、進化論、現實は現實を現實として寫すために一切人工虛飾の分子を擺脫しようとして、赤裸々なる人間・野性・醜・を採るといふのであつた。

これと共に、相馬御風はモウパスサンの自然主義、中村星湖はゾラの自然主義、片上天弦はフローベルの自然主義を論じ、白松南山は哲學上の自然主義としてブラグマチズムを論じた。從來自然主義のために東道であつた「早稻田文學」は、こゝにその主義宣傳の中堅となつた。もと自然主義のために努力せるものに花袋があり、天溪があり、泡鳴があり、生田長江があつたけれど、正面から正々堂々と建設の意を以て立つたものは抱

月であつた。泡鳴の活動も亦目ざましいものがあつた。全人的努力を以て藝術即人生を論じ、大膽な自己中心思想の新人生觀を以て、新自然主義と稱して評論壇上を濶歩した。

その五月、抱月は更に『自然主義の價値如何』に就いて論じた。自然主義は凡そ三段に於いて一般思想と連なる。因習破壞・新機軸發揮・といふ點に於いて、文藝は文藝の範圍で之を行ひ、道德は道德の範圍で之を行ふが、根本は一貫した思想の傾向である、之を第一段の連絡といふ。また一般思想が科學を重んじ經驗を重んずると同じく、文藝も現實を重んじて所謂理想を斥ける、之を第二段の連絡といふ。そして、吾人は之に更に第三段を加へて、直ちに絕對神祕の一物を指し、中間の說明を以て滿足せざらんとする宗教的傾向を、これ亦一般思想が旣成宗教から去つて求めんとする所あるに合期すると見る。そして是等の中心意義は、絕對最上の一物を理想に求めるものが、偏に上に向つて總に人生を超越せんとするに反對して、下に向はんとする思想である。現實の中に直ちに絕對を見んとする東洋的傾向である。この第三段の境こそ美の最高所、生の本體であると。

かく一面に主張の言明があり、一面にまた創作家の活動も起つて、自然主義の勢力は

愈〻盛になつて行つた。今はすべての評論は藝術對人生の根本問題に觸れないものはないやうになつた。生活の悲哀・生活の情味に就いても論ぜられるに至つた。天溪はさきに「現實暴露の悲哀」について說いたが更に「悲哀の主相」に於いて、十九世紀の文藝は自我本位、而もそれから溢れ出でた自然の聲は悲哀である事をいひ、また十九世紀初期の文藝に發した悲哀は自我發展の悲哀、寫實派文學の全盛時代のは自我勝利の悲哀にして、現代文藝のは自覺の悲哀であると斷じた。金子筑水は生活の情味は悲哀快樂といふ如き單調なものではなくて、複雜多趣を籠めてゐる。この生活の情味は生活の刺激者であると共に完成者である。故に及ぶ限り廣く且深く斯かる情味を經驗するが吾人の本望、また至願である、之を味ふことが深ければ深いほど益〻人生を味ふ所以であると說いた。

自然主義がこゝまで進んだ時に、大いに之に向つて反抗を企て、その殲滅を期するものも少なくなかつた。その雄將ともいふべきものは後藤宙外であつた。宙外は自然主義に對して、その無目的・無理想・を難じ、悲哀痛苦が藝術の根柢をなすの非を論じ、天溪の「自然主義」及び泡鳴の「新自然主義」の著書に對して「非自然主義」を著はして大いに奮鬪した。翌年に至つては、更に社會的活動を起さうとして、登張竹風と共に文藝革新會

を起して呼號する所があつた。　されど、その效果は少なかつた。　樋口龍峽もまた倫理學の見地に立つて之を難じ、田中喜一も亦具體理想主義の上に立つて之を非難した。されど如何せん、大勢はつひに自然主義に傾いて、それらが幾多の奮勵も更に何等の效が無かつた。

　その主張言明の任務を果した自然主義の評論界は、その聲を潛めて靜かに自己を考察し批評し反省する態度を取るに至つた。　嚴肅なる態度は愈ゝ加はつた。　藝術と實人生の問題、觀照と實行との問題も起つた。　藝術批評は一轉して、こゝに人生の批評となつた。　その傾向の最も鮮明に見られたのは四十二年の狀態である。

　藝術と實人生とを比較する時に、實人生を本位とする社會論的見地からするものと、文藝はまた文藝そのものとして見るべしといふ藝術的見地からするものとの別が生じた。　自然主義はかくして分割點を見出し、現實描寫の論は發展して觀照の論となつた。　觀照があつて始めて自然主義の作品は出づる、觀照の世界は即ち藝術の世界であるといはれた。　そして、論點はこゝにも亦生じた。　觀照とは實生活の一部、それが全生活とは如何なる差を有するかと。　この問が即ち觀照對實行の論題であつた。　四十二年の五月、或者は印象批評を說き、或者は人生に對する知性批評と感性批評を說き、或者

に近世文壇に於ける評論の價値に就いて論じて、批評の態度の論議の喧かつた時、抱月は觀照卽ち人生のためなる事を論じてより、筑水の藝術と實人生との接觸點の論となり、德田秋江の藝術は人生の理想化なりとの論となり、龍峽の現實と人生との論となり、また抱月の第一義と第二義の論となり、更に宙外の人生と文藝の論、御風の自然主義最後の試練の論となつた。すでにして、抱月はまた懷疑と告白との論をなして、懷疑的人生觀の告白をした。論壇はこれによつて更に動搖を加へた。

四十三年に至つては、評論壇の趨勢は愈〻紛亂を極めるに至つた。前年の末頃から、小宮豐隆・安倍能成・等の青年批評家が雜誌「ホトトギス」に據り「朝日新聞」に據つて、活躍をはじめた。それがこの年に入つては各〻新ロマンチシズムを說き、主觀の解放を說いた自然主義論者の中からも亦主客觀の一致を說き、主觀の重んずべきを說くに至つた。要するに、全體の色調の上に於いて、著しい變易が見られた。

能成は自然主義に於ける浪漫的傾向を論じた。ひとり此論文のみではない。新ロマンチシズムについて說くものは、自然主義を以てロマンチシズムの反抗と見、その特色を外的・物的・自然的・なりとし、この傾向は永續すべきものでない、更に再びロマンチシズムの本流に歸るべきことを說いた。これに對して、自然派からは、自然主義はその發

生の當初からロマンチツクの傾向を多く有してゐた、卽ちロマンチシズムの反抗ではなくて連鎖であると見るのであつた。されど、更に角新ロマンチシズムまた新理想派に關する論議は、次第に强みを加へて來た。この趨勢は更に續いて四十四年にまで及んだ。

これに次ぐ四十五年には評論界はいたく沈滯した。二三の論議をなすものはないでもなかつたが、多くは口を緘して叫ばなかつた。已に開拓を了して種藝を創作界に譲るといふ態度があつた。自然主義を行き盡すまで行かしめて、わが功成れりといふ概があつた。されど、評論界の不振は、外に向つて新しい態度を主張した鋭鋒を自己に擬して、自己を研究し解剖するに力めた爲でもあつた。最早や徒に新主義を鼓吹し新思想を呼號することが出來なくなつた。新傾向の藝術も亦更に小く狹く鋭い主觀の上に立てられようとするものであつた。此に於いてか、思想界のすべては、生氣なく活氣なく、惰氣と壞頽とに包まれてゐたと見ることが出來る。しかも壞頽の裏面には世間一般のものよりも更に大いに更に高きものを求めようとする努力が潛んでゐた。さもあらばあれ、一たび小い狹い主觀の間に囚へられた評論界は、未だその求める新生面を開拓する事を得ないで、早くも明治と別れたのである。

之を要するに、この期に至つて評論界は眞の意味に於いて文壇の勢力をなし、しかもその評論界は自然主義のために終始するものであつた。評論の勢力はたゞに文界にのみ止まらず、廣く社會の全般にまでも及んだ。社會と文藝とはかくして、接觸しかくして文藝院設立問題は議せられ、その結果として文藝委員會は四十四年五月文部省内に創設せられ、鷗外・蘇峰・露伴・醒雪・小波・青々園・桂月・篁村・敏・抱月・及び上田萬年・芳賀矢一・藤代禎輔・姉崎正治・塚原靖・足立荒人・の十六人が委員に任命せられた。かゝる出來事は實に空前のものといはねばならない。

第二章　自然主義派の小說

三十九年三月、島崎藤村は七年の久しい閒隱退せる北信の地から出でて、長篇小說『破戒』を出版した。 これよりさき『水彩畫家』『爺』『藁草履』等の詩趣深い數種の短篇を草して稍、文壇に矚目せられた人の作は、たゞに自費出版といふこと以外、二年間の勞作といふこと以外、その內容を以て裕に一新時期を劃すべきものであつた。 信濃國の飯山の一小學校敎員が、その父の遺訓を堅く守つて、穢多であることを祕してゐたが、周圍の事情に迫られて、つひに自ら進んで告白し、こゝにこの偏見を持する社會から脫し、外國に移住して新しい光明に接しようとするに至る徑路を敍してゐる。 或はその主人公の性格があまりに弱きに過ぎて、却つて讀者の同情を滅却する事もあらう。 或はその敍述が精細に亙るの極、時に冗漫の譏を受ねばならぬものもあらう。 然しながら、穢多といふ特殊の種族を題材として個人對社會の衝突を描き、また個人心內の苦悶を直寫した點は、遙に歐洲文藝界に於ける自然派の諸作品と脈を通ずるものでなからうか。 また、この作品には、前期に於いて殆ど小說壇を風靡せる戀愛に就いて、敍する所の甚だ少

いことを注意せねばならぬ。さきには戀愛が興味の中心であつた。然るに今は更に大いに更に強い問題の人生に横はつてゐることを知つた。生活の問題がそれである。實にこの作はそれに觸れ得て大なる價値を占めることが出來た。社會に生きんとする個人の深い意志、またそれから生ずる悲壯な葛藤の前には、戀愛はあまりに小なる、ものであつた。これまた歐洲の新しい文藝と始めて對等の發現を得たとも稱すべきものであつた。顯著な地方色の描出せられてゐる一事も、亦注目せなければならぬ現象である。筱山附近の年中行事や、歲事記のすべては盡くこの一卷中に包含せられ、文藝上の官能主義の特徴も發揮せられて、その印象を鋭く強からしめてゐる。見來れば、この作は一として新らしい色調を帶びてゐないものはなかつた。

この三月、國木田獨歩の短篇集「運命」も出版せられた。その以前、獨歩には「獨歩集」があつた。大膽に眞率に肉慾を描出せる、「女難」と「正直者」の如き、驚きを要求せる「牛肉と馬鈴薯」の如き佳什も、その中にあつた。されど、多くは硯友社一派の絢爛な文辭と對比すべくもあらずとして默殺せられてゐたが、こゝに「運命」の出づるに及んで、溯つて「獨歩集」も亦喧傳せらるれるに至つた。「運命」には殊に作者獨得の感想を獨得の描寫を以て最もよく表現し盡したものといはれた。出來その文辭は精透深刻の趣致を有してゐる

と評せられた。それが自敍體の敍述描寫をなしてゐるので、遒勁の筆致は愈加はらざるを得ない。況んや『運命』の諸篇を通じての思想は、やがて獨歩その人の心裏の全境域を示すものであつた。人は大自然の藥籠中にあつて、如何に泣き叫んでも、それから脱離し得るものでない。悠久にして不思議なる生死を吐呑する大宇宙に面しては、人間は小さい哀れなものである。これがその運命觀であつて、それがまた山と空と水との美を讃歎する自然觀を結びつける。これぞ作者が自らワーズワーシアン・ナチュラリズムと稱する所以。篇中の空知川の邊は大森林に對する畏怖恐懼を描出して、其もよくこれ等の思想を具體化したものである。

このやうにして、獨歩の作は皆同一樣、極言するものは、彼の作は一篇を讀めば他は讀まざるも可、讀めば頭痛を覺えるといふものもあつた。これは作者が飽くまでも主觀的作家であるからである。そして、その主觀的傾向は作の樣式に自敍體を取り、また縱横に作家の懷抱する所を表現して、無技巧無修飾の脚色文飾の間に一種の力を有せしめる所以であつた。

『破戒』と『運命』とが、期せずして小說壇に新氣運を形づくるに至つたが、これによつて寄與せられた事項は何であつたらうか。眞面目に嚴肅な態度で人生の根柢に接觸せ

る態度を第一に數へねばならぬ。作家の主觀卽ち胸中の事實をさながら描寫して作家自身の性格を烙きつけようとするのはその二で、小說の人物は必ずしも傑出の士たるを要しない、平凡な性格でも差支ない要は生に對する苦悶と悲喜とを表現し得るにありとするのがその三であつた。これ等の新しい傾向はまさに自然主義の標榜する特色と相合するものではなからうか。二作者共に自ら自然主義をば標榜しない、殊に獨步の如きは斷然我は自然主義者にあらずとさへ稱したけれど、なほ自然主義の先驅をなせりといふべきものであつた。

その作風が漸を以て文壇の中心となり行き、隨つて文藝社會の諸問題が實際に起るやうになつたのは四十年の事で、幾多の新しい作家によつて新しい試みが始められた。その中にも、讃否の聲の喧かつたものは田山花袋の『蒲團』であつた。妻子を有する小說家が、自分の家に寄寓する女弟子に心を寄せてゐたが、未だその胸裡を告げないうちに、少女は旣に一靑年と相愛するに至つた。小說家は怒と妬とに堪へないで、二人の間を割いて、少女を鄕里に歸し、その後で少女の蒲團の中に身を投じて、飽くまでもその移り香に煩悶の情を遣るといふのであつた。これは熱烈な中年の戀を示したものであるが、しかも作者の大膽な告白であることが、少なからず文壇を驚かした。これを

縁として性慾描寫の問題が頻りに繰り返された。作者の態度は、性慾に對しては斷じて挑發の筆を弄する事をなさなかつた。その肉感に近づき、性慾を顧みるのは、一に痛切に人生を表現しようとするが爲であつた。虚僞を排して素樸の眞に接しようと欲するのであつた。自然主義の作品は、性慾に就いて敍する所の多いのも、その態度は常に皆それであつた。この點に於いても、花袋は自然主義の謂ふところを實例によつて示した。

四十一年には、花袋はまた「一兵卒」を出した。日露の戰役中脚氣に罹つて入院せる兵士が、寂寥に堪へないで、未だ全癒せざるに先だち強ひて自ら退院し、再び戰列に就かうとして、行軍中に病氣再發し、つひに衛心して死するに至る心身の苦悶を描いたもので、内面描寫の先驅をなしたものである。然し、花袋にしては此の如き作風は異數である、しかもそれがその常に取るところの平面描寫と關聯してゐる。その後に出でた「生」に至つては、全然平面描寫を以て終始してゐた。自らはいふ、これはコンクルー一派の作風に準據せるものであると。冷靜な態度、實感的に效果の多い題材を、力めて殺して敍せんとする態度を取つた。その作品から受ける印象は、その總てを透して現はれた人生の姿であることを欲した。さういふ試みは必ずしも成功したものとも思はれなか

つたが、しかしよく人生の諸問題を拉へてゐる。死・結婚・出産・などが、まざまざと現はれてゐる。この傾向は『妻』といふ長篇をその翌年に出すに及んで更に加はつた。こゝに至つては、よく前者に試みて得られなかつたものを完成した。また『田舍教師』を出し、また不過な青年の生涯を描いて成功した。この頃から花袋の態度は稍〻異なつて來たといはれた。それが翌四十三年に於ける大作の評があつた『緣』となつては、前の『生』及び『妻』と共に一種のトリロジーをなすといふに拘らず、それ等とは全然異なる色調を帶びて來た。卽ち作者の主觀が所々に散見せられ、また全體に主情主義の風貌を存してゐるといはれる程である。されば、一點の主觀をも交へまいとする平面描寫の態度と、時に背反してゐるかと思はれる節もある。然しながら、その根本義たる作者の主觀が擴大せられて、自然と同一に歸するところに眞の藝術を現ずるといふことは、依然として存してゐた。これがこの作家の是非せられる所以で、時に失敗の作は徒らに平凡平板に陷る所以であるが、その態度の論を外にして、描寫の手段から見れば、何等の脚色をも設けないで、よく人生の複雜な狀態を直寫する點が、他に求めることの難いものであつた。

花袋の努力は幾多の短篇を出して、その主張するところの平面描寫をなした。『花袋

集」に收めてある諸作の如きは、皆種々の點に於いて文壇の注目を惹いたものである。『罠』といふ短篇の如きは、直に問題を提供した論文的小説である。その新作風はやがて論難の的となつた。かくて花袋の創作は、絶えず自然主義の發展に資することの實に偉大なものであつた。また雜誌「文章世界」に主筆として、青年を指導し、常にその主義のために論述せる努力は忘れらるべきものでない。

花袋と相並んでその作品を比較せられるものは藤村であつた。藤村は不斷の努力を以て幾多の短篇の佳作を出したが、その中でも世評を騒がしたものは『並木』であつた。これも自然主義が如何に現社會に處し現實に觸れようとする傾向あるかを示すものと解することが出來やう。所謂モデル問題が、それである。『並木』は藤村の友人馬場孤蝶・戸川秋骨・をモデルになしたことから事實と作品との關係論を起し、更に文藝と道德との關係論を起すに至つた。されど、大勢は自己の經驗或は見聞を精細に深刻に敍して、空想を却けようとする現今の文藝は、當然斯くあるべきものとして是認した。

花袋が長篇『生』を出した時、殆ど同時に藤村は長篇『春』を出した。これは藤村が自己を描き、また自己の周圍卽ち「文學界」同人間に於ける雰圍氣を描かうとしたものである。これには一の纏まつた事件なく思想なく、また主人公として見るべき人物がなかつた。

されど、一種の運動を現はし氣分を出すことに於いては、成功したものと稱せられた。これを以て『生』と比較するに、『生』は外面から内部に向つての觀察と見るべく、隨つて理智の傾向が多く存して居り、『春』は内部から外面に向つての告白と見るべく、隨つて情緒の活動が多くあつた。花袋が『妻』を出し『緣』を出した時には、藤村は『家』を出し『犠牲』を出した。二家の對照は屢〻評家の口に上つた。『家』はまた藤村自身を中心として一家の狀態を描き『犠牲』も亦その續篇として出だされたものである。これにも藤村は氣分を出すことを主としてゐた。しかもこれは『春』の絶對客觀の態度から出でて、主觀的傾向を寓してゐる所のあることが認められる。二作以後の短篇『食後』に載錄せる諸篇に殊にこの傾向は明かである。

花袋と藤村とは、その取るところに相違はあるが、要するに人生觀照の一派ともいふべきであらう。暗黑の人生をも藝術として示さうとする離れたところがある。所謂る藝術派といふもの。この派に對するものは人生派といふべきもので、實感に卽するものであつた。前者が佛蘭西文藝の感化の上に立つとせば、後者は露西亞文藝の影響の下に成つたものである。復活せる二葉亭の活動は、後者を代表するものであつた。二葉亭は三十九年に『その面影』を『朝日新聞』に連載し、四十年に『平凡』を連載した。『その

面影」は主人公なる小野哲也が、心中では絶えず實世間に出でて活動せんとを期しながら、何時か周圍の境遇に制せられて人生の岐路に走ることを敍したもの、「平凡」は平凡な境遇に成長して漸く文學に進まうとする平凡な性格を描いたもの。これ等はもと二葉亭の懷抱する所の一端を示すに過ぎなかつた。文藝のために人生を觀察するは極力排斥する所であつて、人生のために人生を批評しようとするものであつた。文學上の作品に現はれた自然や人生は、直接に實感し得た所にもせよ、空想で再現せしめた以上、現實に接するが如き切實の感を得るものでないといふのが、作者の意見であつた。こゝに於いて文藝に惟焉たらず、常に實世間に活動を期しつゝある苦悶せる此作者の衷情は、二作の中殊に「平凡」に於いて能く見られる。たゞ圓熟せる筆致はその間にも何處にか餘裕を存して、その苦悶を赤裸々に現出することを敢てしなかつた。されば、二葉亭としては、作そのものよりも、その露西亞小說の主人公と同一の徑路を有する實際こそ、更に大なる藝術であつた。

もしそれこゝにその人生派の態度を極點にまで齎し來たものを求めるならば、泡鳴の諸作であらう。それらの作品は概ね實感を唯一の內容としたものである。讀者をして暗澹たる人生の渦中に投ぜずには置くまいとするやうな作であつた。四十二年

の『耽溺』及び四十三年の『放浪』の如きは、その代表の作である。

今やかくの如き別を撤して、廣く現實を主義とする作家を求めるならば、まづその特色の著しいものとして正宗白鳥を擧げねばならぬ。その諸作は長短篇を合はせて『紅塵』『何處へ』『白鳥集』『二家族』『微光』『落日』等に載せられてゐる。これ等に通じて描出せられたものは、一種の廢頽的生活である。現實の苦しい桎梏の下に呻吟する運命、希望もなく目的もなく碌々として涸渇の生を送る悲痛である。その人物は戀もなく、愛もなく、義もなく、義務も責任をも顧みず、たゞ無意味に日月を送迎するものに過ぎない。その傑作の稱ある『泥人形』は冷笑と皮肉とを以て充たされてゐる。徹底せず充實せざる生活を描き出して、作家が觀照せる人生のすべてを盡くしてゐる。これに對してその主人公の生活の不徹底を責める聲が、批評壇から聞かされた。それを直に移して作生觀に對する非難も起つた。されど、その不徹底な點こそは白鳥の忠者の人實に觀照したところ、作の價値は實にこゝに存してゐるのである。

白鳥と相似た作を出したものは德田秋聲であつた。その作は短篇の集『秋聲集』に收められ、また『多數者』『新世帶』等の長篇もあつたが、最も傑出せるものは、四十四年に出した長篇『黴』である。その主人公笹村は理想もなく將來もなくたゞ運命に盲從する平凡

の人間に過ぎない。 その家庭は何等の意義もなく、たゞ因襲を逐ひ、時々の小慾望のために造り上げられたに過ぎない。 凡庸の人間が虚弱な身體を擁して意味のない家庭に拘束せられ、こゝに人生の暗愁と廢頽とを現じ來るのであつた。 秋聲は明確な印象を刻み行く筆致を以てこれを描いた。 評するものは白鳥と比較していふ、若し同一傾向の白鳥を乘り越えることが出來たとすれば、その特長は世故に長けた點に於いて後者よりも廣く材料を有し得られることであらうと。 實に秋聲は硯友社派の一人で早く『春光』の如き作を出して新興文學に連るべき要素を具してゐた。 而もそれが、藤村や花袋に動かされてその跡を逐ふやうな狀態にあつたが、こゝに至つて、その態度を確持し、その熟練な手法を以て此作をなし、遂にかの二者の壘を摩せんとするに至つた。

　風葉もまた硯友社の一人として夙に新氣運の上に立つて新しい作風を試みた。 それは寧ろ秋聲よりも早くあつた。 四十年には長篇『天才』及び『戀ざめ』を出し、翌年には『風葉集』の諸作と『世間師』とがあつた。 その特色は離れて人生を觀照する態度であつて、しかも描寫の技巧の圓熟は他に類を見ざるものと稱せられた。 たゞその圓熟を恃むの果は筆鋒の熟練を以て推されながら、時に空しく考案を缺いて藝術として重きを置き難いものを出すに至つた。 『耽溺』と題して、泡鳴のと同一名で殆ど同一の題材を取

つた作の如きは、その一例である。
風葉の門から出でたものに眞山青果がある。四十年に『青果集』を出し、四十一年に『奔流』を出した。前者の多くは文明と自然道德と本能などの矛盾に對して、一種深刻な力を以て臨んでゐる。そしてそれに或る解決を求めて未だ到らざるものがある。然るに『奔流』に至つては、前者に缺けてゐた冷靜な觀照が多少加はつて、更に深い強い力を依然として持つてゐる。されど、その多くは情感から得て情感に傳へようとするものである。かれが文壇に特有の地位を占め得た所以はこれである。

小山内薫は數多い短篇を以て才筆の名を知られた。深い觀察があるでもなく、絢爛の文辭があるのでもないが、よく巧妙に全體を纒めて行くところが、この人の特色である。機智に富むといふ言が、之を評して餘蘊なきものであらう。短篇集『窓』があり『笛』がある。長篇『大河端』に至つては、自ら異なる態度を取つてゐる。

その他、自然主義の作家として現實に卽する作品を出した者が甚だ多かつた。生田葵山の如き、中村星湖の如き、佐藤紅綠の如き、水野葉舟の如き、德田秋江の如き、上司小劍の如きが、それである。これ等も各〻多少の特色を具するとはいへ、無技巧、無理想、たゞ現實をさながらに描出しようとする努力は同一である。精緻嚴密な態度を以て事象の

眞を觀取し、近代生活の暗黒面を痛切に剔抉しようとしてゐる。在來の習俗を打破して、假面の下に隱れてゐる獸性を暴露しようとしてゐる。日常生活の平凡な事實を脚色なしに描き出さうとしてゐる。人間の記錄たらんことを力めてゐる。筋に力を盡さないで、人物を活動させる背景なり周圍なりに詳細な描寫をなさうとしてゐる。人間普遍の類型を顧みないで、飽くまで眼前に現はれた個體を描き個性を現はさうとしてゐる。その文辭は從來の修辭法が敎へるところの詞藻を破棄して、新なる技巧を試みようとしてゐる。無技巧の技巧を以て表現の明晰を期して、簡素なり眞摯ならんことを求める。鋭い刺戟深い印象を與へようが爲に、多くは短篇の形式を取つてゐる。かくの如くにして、理想は排斥せられ、空想は破棄せられ、信仰も道德も漸くその權威を失はうとして懷疑に囚へられ、苦悶憂愁の色がすべてを籠めてゐる。されば、文藝對社會の問題が續出して論ぜられ、幾多の作品が發賣禁止になつた。風俗壞亂のみならず秩序壞亂の名目の下に、その厄に遭ふものも少なくなかつた。殊に四十三年に於いては、その傾向が甚しく、官憲と社會とは全力を盡して、この新興文學に對して壓迫を加へようとした。時たま／＼我が國未曾有の大隱謀が計畫せられ、幸に事は未前に防がれたとはいへ、社會の震駭は言語に絶する程であつた。かくて新興文學に對する壓迫は

愈〻加はるに至つた。されど、自然主義の思潮は兎に角に瀰漫して行くのであつた。さきに四十一年四十二年頃に出でた無意味な肉慾描寫、たゞ新奇を求めるための作はその跡を絕つて、却て現實に對する嚴肅な研究が始められるやうになつた。自然主義そのものに反對なものまでも、なほ自然主義的思潮に深い根柢を置かねばならなかつた。漱石の作が何時か一轉化するに至つたのも、それがためであらう。宙外の作がまた前期に見るべからざる現實味を加へたのも、それが爲であらう。蘆花も亦『寄生木(ヤドリギ)』に從來と異なつた態度を取つた。自然主義が漸く他に推移しようとするに至つたのは、外界の壓迫の然らしめる所ではなくて、主義そのものゝ傾向から出たのであつた。しかもその推移は自然主義に反對して起つたのではなくて、畢竟その分化に過ぎない。今それをいふに先ち、三十九年に溯つて、自然主義と否然その性質を異にした一系統について記すであらう。

自然主義派に對する俳諧派ともいふべきものは、夏目漱石に始つて、高濱虛子がこれに屬する。なほ溯つて考へると子規の唱へた寫生文から出でてゐる。子規が「寫生文論」を草したのは三十三年であつた。曰はく「實際の有のまゝを寫すを假に寫實といひ、又寫生ともいふ。虛敍といふに對して實敍ともいふべきか。更に詳かに云はゞ、虛敍は抽象的敍述、實敍は具象的敍述といひて可ならん。普通の實敍的敍事法は餘り長き時間を連續せしむるよりも、短き時間を一秒一分の一部に切つて細く寫し、秒々分々に變化する有樣を連續せしむるが利なるべし」と。また曰はく、「文體は言文一致か、又はそれに近き文體が寫實に適し居るなり。言文一致は平易にして耳だたぬを主とす」と。

子規によつて始められた寫生文は更に英文學趣味を加へて、漱石の諸作となつた。漱石は三十八年の初から「ホトトギス」誌上に『我が輩は猫である』を連載し、三十九年、短篇小說集「漾虛集」を出した。『我が輩は猫である』は、一中學校教師が飼猫の口を假つて飼主及びその周圍の人物と事件の觀察批評をなす底に脚色したものである。　もとよ

り趣向もなく所謂尾頭の心元なき海鼠の樣な文章、作者はたゞ日常偶然の事件に對して特殊の觀察を施し、隨處に諷刺滑稽の妙を發揮してゐる。さては自家獨得の感想を縱横に敍して奇警人を驚かすの餘、時に注意の統一を缺いて冗長に陷つたと思はれる點も少なくない。然しながら「猫」は徒に奇警を以てのみ稱すべきものではない。その飄逸洒脱の陰には現代に對する苦悶が存し痛哭が存してゐる。從來の所謂俳諧者流が浮世を厭つて滑稽洒落に逃れようとするものとは異なつてゐる。さればといつて、また單純な江戸趣味でもない。飽くまでも沈欝な底氣味の惡い英國氣質が讀まれる。猫の猫たる所以は、そこに存してゐるのである。しかも現實に對する不滿厭惡から脱して、冷かな澁い笑を以て對する所に、この作の價値は存してゐる。

「漾虚集」となつては更に沈痛幽玄の情趣が加はつて、一種の神秘的傾向をさへ有する文章もまた前著の冗長の譏あるものと異なつて、簡勁で緊張してゐるところ頗るスティブンソンの風貌を現はすと稱せられた。かくの如くば前著の精細な敍述はスヰフトの面影とも見られよう。我が明治文學を覺醒せしめた英文學、我が文壇に接することの最も長い英文學の趣味が、始めて我が創作界に融化し渾和した一事は記憶せねばならぬ現象である。

三十九年に漱石は短篇『草枕』といふを出した。これは最もよくその主張と態度とを示すものである。敍する所は非人情、現實に卽してしかも現實を離れようとし、つねに薄い一皮膜を隔てゝ現實に接しようとする俳諧境、不卽不離の心境を示してゐる。四十一年に出した『虞美人草』も、亦その態度から出でた作である。

『虞美人草』と時を同じくして高濱虛子の『鷄頭』が出でた。一時文壇に騷がれた『風流懺法』をはじめ、十篇を集めたものである。漱石はその序に於いて、自己及び虛子の態度を明示して、餘裕派の小說と稱した。曰はく「小說には元來二種がある、餘裕派と非餘裕派である。餘裕派の作品とは逼らない小說、非常といふ字を避けた小說、觸れない小說の謂ひである。餘裕のない小說はセツパ詰つた小說、一生の大事件大問題を主材とする小說のことである。かゝる生命問題運命問題に觸れない文學も要あるものであらうか。人生を觀れば、其處には常に綽々たる餘裕が存して居る、茶を品すれば花に灌ぐ事もある、冗談をいへば釣・謠をなす時もある。芝居見物をなし、旅行をする時もある。この餘裕から出でたるもの、卽ち餘裕派の作品にして、低徊趣味・依々趣味・戀々趣味の横溢する所である」と。

虛子は漱石と同じく「ホトトギス」派の俳人で、子規の歿後その後を繼いで率ゐて立つ

べくして、しかも寫生文に專らであつたが、こゝに一轉して小説壇上の人となつたのである。『鷄頭』の諸作は外面描寫のために外面を描寫する態度に慊らずして、人生の情趣を附與しようとするものであつた。されど、是等の作の特色は、未だ寫生文から來る描寫の技巧に存してゐるより外にはなかつた。四十一年、虛子は更に長篇小説『俳諧師』及び『續俳諧師』の稿を起したが、これには人生に觸れることが稍〻深きを加へようとした。されど、所詮は所謂低徊趣味を發揮するものであつた。此に於いて、評論界からは餘裕派の作品の價値を疑ふ聲も頻りに起つた。

四十一年に漱石は『三四郎』を出し、四十二年に『それから』を出した。これ等の作には精緻な心理解剖を見ることが出來る。寧ろ煩瑣に陷る程である。由來漱石の作は、作中の人物の心理を過當までに說明するところに、その累を見るのであつた。しかもその心理は人物の個性の然らしめる所ではなくて、作者の考察から出づるものであつた。これがその作をして拘束せしめる所があらしめた。四十四年の『門』は、自然主義的態度の下に描かれたものといはれる。その現實に對する觀察の如き、決して從來の餘裕派と同一のものではない。されど、心理解剖に過ぎるの弊は、亦これにも顯著なものがある。これがメレディスの長所と短所とを兼ね有するものといはれる所以である。

漱石の態度と相似て、その精緻な解剖と考察とを以てせるものに、長塚節の長篇小説『土』がある。 時評論壇に於いて頗りに論議せられた鄕土藝術の傑出せる作で、特殊な地方色の最も明確に描かれた點は、作者の苦心を推察することが出來る。

現實を超越して俳諧境裏に逍遙しようとした餘裕派も、いつか自然主義の態度に近づいたといはれる時に、なほ現實から脱して空想境・神秘境に入らうとする態度を不斷に守り來つたものは鏡花である。 その名聲は自然主義派の作のもとに壓せられてゐたけれど、その特色は餘蘊なく發揮せられた。 三十九年の『惡獸篇』『海異記』の短篇を始め、四十一年の『草迷宮』『女系圖』『沼夫人』また四十三年に『國貞畫く』『白鷺』等の諸作が出でた。 作者は黄昏趣味・東雲趣味・について敍べた事があつた。 晝から夜に入る刹那の世界、光から暗に入る刹那の境、また暗から光夜から晝に移る微妙な色彩の世界があるこれを人事に及せば、善から惡、惡から善に移る刹那に、また一種微妙な形象心狀を現じようとする。 この中間の趣味中間の世界・を描き出さうとするのが、この作者の欲する所であつた。 その諸作は實にこの趣味のために幽韻玄妙のものとなつた。 一種のロマンチックといはれやう。 そして、その中には一種の象徴を寓する樣に思はれる點が少なくなかつた。 そこに初期の作と稍ゝ異なつて重きをなす所があらう。 然し、技巧な

離れ文辭を外にしては、その價値を見ることは出來なかつた。自然派の勢力がその中心をなす時にも、或は少しくその傾向を攝取する所がないでもないが、兎に角に自己の特有を固持して動かなかつたのは、また文壇の一奇傑といはねばならぬ。

由外は自然主義に反抗して、飽くまでも道德の旗幟を明かにしようとするもの、常に堂々として自然派と筆陣の間に相見えてゐた。その作に『月に立つ影』『裾野』『五日市』等がある。その作風は依然として前期と同一樣で、多く說き多く敍せんとするものであつたが、その題材に對する態度の如きは、不知不識の間に自然主義の傾向を有するに至つた。

天外は昨の寫實主義の態度を守つて自然主義と相接しながら、相異なるところを有してゐた。『コブシ』『長者星』等の長篇の作がある。皆ゾラの解剖を模倣したもので、前者には婦人が節操を破るに至る徑路、遺傳に支配せられる血族間の氣質體質の異同、自殺者の絕息に至るまでの精神狀態等が、委曲を盡して記述されてゐる。後者は他の作家が取り扱はなかつた實業家の間に取材して、文壇の注目する所となつた。敍して精細を盡す老功の手腕は、到底他の新進作家の及ぶ所ではない。

歷史小說は塚原澁柿の獨特の壇上である。「澁柿叢書」といふ名目の下に、數種の作を

出してゐる。中にも『大島逸平』『水戸黄門』『葵と桐』『木村重成』等が傑れたものでよく時代の背景と人物とを活動せしめてゐる。

新聞小説には『生』といひ『春』といひ、自然主義の小説も之に與るやうになつたが、その重なるものは家庭小説といふべく、在來の道徳と調和すべきものであつた。これには柳川春葉及び田口掬汀がある。春葉は『母の心』『緣の絲』『やどり木』より『操』に至るまで絶えず筆を執つてゐた。掬汀は『伯爵夫人』『第一人』等の諸作がある。二者共に筋の發展に忙はしくて、性格の描寫が未だしく、文章の洗煉も亦物足らぬ所がある。對話の妙、行文の平易、よく婦女子をして飽かしめない點は、掬汀の方が遙かに卓れてゐる。

第四章　自然主義の分化

既に言つた如く、三十九年の小説壇には新傾向を生じて自然主義の兆を呈したが、四十年にはその運動が中心となり、四十一年には舊文藝を打破して、新思潮の實現に力めて、嚴肅に眞面目に人生を觀照して、自己に忠なる作品を出さうといふことに努力した。四十二年もまたさうであつた。さきに主張のために呼號したものは沈靜の狀をなし平安の域に入つたが、之に續くものは沈滯不振、また固定の狀態であつた。行詰つた自然主義といふ聲は頻りに放たれた。畢竟、これは自然主義が餘りに嚴肅な態度を持するに勞れた爲か、その單調に陷つた爲か、それともまた自然主義が型を破つて更に新なる型に入らうとする傾向を有するが爲か。兎に角に現實の醜穢な事象を餘りに多く見ざるを得なかつた眼は、他に向つて放たれることを欲した。自然主義の主張する所の眞なることは理智はよく之を承認する、されど情意は慊らなかつた。更に何物をか求めようとした。舊い信仰舊い道德を破壞し去つて、なほ建設の作はない後に立つては、求めるところは更に高く更に遠いものであつた。壓迫せられた主觀は、客觀と肩を

並べて立つた。拘束せられた情緒はまた解放せられた。もし進んで求める所のあらうとするのはネオ・ロマンチシズムをなすであらう。鈴木三重吉・小川未明等に見る所が、それである。退いて觀照の態度から脫離せるものは享樂主義となるであらう。鷗外・荷風・森田草平等の作に現はれたものが、それである。少年時の回顧、江戸趣味の回顧も、おのづから起り來るべき所であらう。荷風及び久保田萬太郎の作に認られるのがそれである。これ實に四十三年以後の趨勢である。かくの如きものを以て、さきの自然主義派の諸家の作と比較する時は、生の觀照と生の享樂、藝術品の製作と自己生活の藝術化の差を認めることが出來やう。されど、それ等の異同の下にも、現實の底流一道の自然主義的思潮はなほ絶えぬものがあつた。皆現實の深い根ざしの上に立たうとする趣が見られる。客觀の上にあつて主義をも擁しようとするのである。これを自然主義の反動といふも可、反抗運動といふも可、しかもこの趨勢は大局の上に一時期を劃するまでには至らなかつた。その活動の端を開いて未だ眞の運動に入らざるに先だつて、明治の時代は終りを告げたのである。故に、しばらく自然主義の分化を以て呼ぶこととした。

四十三年の七月、鷗外は「三田文學」に短篇『あそび』を出した。何をするにも子供の遊

んでゐるやうな氣になつてゐる一官吏が、政府てふ大機關の一小齒輪となつて自分も廻轉してゐると自覺しながら、なほ遊びの氣になつてゐる。文學の著作に對しても遊びの心持を以てして、つひに眞劍になる事が出來ぬといふのであつた。自然主義者が嚴肅を說き眞面目を說く時に、この作があつた。上田敏が長篇『渦卷』を著はして、更に新しい人生觀と藝術觀とを說き、自然主義から脫して生の享樂に入るべき主張をなしたものと共に、論議非難の聲が一部から起つた。自然主義はこの頃から分化すべく轉化すべき傾をなしてゐたのである。行き詰つたその主義を他に向はせる爲に、極言をなしたものといふことが出來やう。この『あそび』は鷗外の藝術的態度を明かにしたのであつたが、鷗外は最初から自然主義とは不即不離の態度を取つてゐた。肉慾を描いた『ヰタ、セクスアリス』の如きものがあり、短篇集に『涓滴』の如きものがあり、長篇に『青年』があつた。新興文學の隆盛と共に、舊い作家の多くは文壇の中心から逐はれる觀を呈した時、ひとり鷗外のみは豐富な學識と熟練な技巧とを以て、若い作家に伍し、更に之を指導しようとする概があつた。諷刺の作、問題小說の作、情緒の作と、常に新しい試みをなして、出沒端倪すべからざるものがあつた。單調に陷り勝ちな自然主義極盛の時から、それ等の作があつて複雜の色を帶びさせた。要するに、かれは享樂派の驍將、しかも

なほそれに立ちながら、そこにも不即不離の態度を取るものであつた。

『地獄の花』を殘して海外に去り、四十年に『あめりか物語』を齎して歸れる荷風は、『歡樂』を出し『監獄署の裏』を出し『新歸朝者日記』を出すに及んで、『地獄の花』のゾライズムを棄て、『あめりか物語』の觀照の態度を改めて、情緒的・耽美的享樂的な傾向を示すに至つた。かくて四十三年の五月には、長篇『冷笑』を『朝日新聞』に出しはじめた。作者の言をかりていへば、この作の第一の目的は、亂雜沒趣味な明治四十三年の東京生活の外形に向つて、沈重な批評を試み、その時代の空氣の中に安住することの困難なるを歎息し併せてわが純良な日本的特色の那邊にあるかを考究摸索しようとしたものである。日本人は深く考へないで諦めをつけて仕舞ふことが世界無比である。それを滑稽冷笑の調子を以て發表する所が、殊に日本の生活及び思想の根本に最も適合してゐる。この意味に於いて『八笑人』のやうなものを持ちだし、題をも『冷笑』とつけたのである。要するにこれは享樂主義をのみ歌つたのではない。寧ろ享樂主義の主人公が、風土の空氣に餘儀なくせられて、川柳式のあきらめと生悟りに入らうとする苦悶と悲哀とを語らうとしたものであると。この言葉でも知られる如く、『冷笑』は必ずしも觀照を離れたのではないが、今は冷靜な觀照に立ち止まつてゐられなくなつた。現代の絕望は寂しい他

の世界を求ねめばならなかつた。「冷笑」の主人公は遂に江戸趣味に於いて生きることが出來た。荷風のこの傾向は『すみだ川』に於いて、『新橋夜話』に於いて、なほ一層明かにされた。自然主義の文學が幻影を破毀した爲に絶望の悲境に陥るとせば、江戸趣味はやがてそれを補ふべき幻影である。江戸趣味は現實に觸れず、人生の意義に接せず故に淺薄であるが餘裕を有してゐる。されば、自ら懷疑苦悶に囚へられた近代人の隱れ場所となつた。草雙紙の女の意氣地、歌澤のやるせない節調に、その倦怠の情を慰めやうとするのであつた。この江戸趣味に對する憧憬と追懷とは、幾多の模倣者を出すに至つた。「三田文學」「スバル」等に現はれた新進作家の作品に、多くそれを見ることが出來る。所謂下町文學はかくして起つた。萬太郎の『淺草』は、その一代表作である。その中に載せられた多くの短篇は、下町の空氣、ある優婉な纖弱な感を起す空氣を描寫してゐる。薫の『大河端』の如きも、その情調の上に描かれた作である。

追懷と回顧とは人をして無邪氣な少年時代に歸らせる。荷風が隨筆『紅茶』の後に記した多くの小品には、それがよく現はされてゐる。雜誌「白樺」の同人の作にも、この傾向が見られる。追懷の筆は多くは哀傷的のものに歸着する。下町の描寫はまた自らセンチメンタルのものとなる。荷風の作は纖細微妙な官能美を以て稱せられたもの、そ

の傾向はまたこれにも現はれて居るものといはれやう。殊にこの傾向を極め、その特色を發揮して殆ど餘蘊のないものは谷崎潤一郎の作である。その短篇集「刺靑」に現はれた題材は、また少年時代と江戸趣味に對する追懷と憧憬とであつた。しかも官能の美は縱横に描き出されてゐる。その極は一種の病的心理を取り來るに至つた。「魔風」「惡魔」に出づる所、皆たゞ官能のために生きてゐる人である。奇怪な題材を採るのは、その人を活躍させんがためである。故にこれを實現に即する上から見ると、所詮一片の空想に過ぎない。たゞ作者は空想としてまた病的心理として之を描かず、常に新しい人生觀の暗示たらんことを期待してゐる。これが巧妙な文辭と相俟つて賞讃を博し得た所以である。

「尼僧」「澪」に出た長田幹彦の作も同じ樣な點があるが、なほ現實に捷することが多いこれも亦新しい生活の暗示を試みようとするものであつた。

享樂派にはまた草平がある。幾多の短篇はあれど、長篇「煤煙」と「自叙傳」とを傑出したものとせねばならぬ。共に主觀の情趣の湛へられた點が獨得の壇場である。

もしネオ・ロマンチシズムの傾向を有する者を今の文壇に求めるものがあるとすれば、人は必ずや三重吉と未明との二人を擧げるであらう。しかしながら、この二人者の

藝術が果してかの歐洲に於ける最近傾向のそれと全く同一のものであらうか。靈の覺醒から發つた神祕夢幻の藝術であらうか。さう見るには未だしいところが多い、たゞかの傾向に相通ずるものがある、これが新ロマンチシズムを以て稱する理由である。されば、その作品が或はたゞ空想に過ぎない情調を出すに過ぎないといはれるのも、亦理由がないでもなかつた。

三重吉の作は短篇集『千代紙』に始まつて『おみつさん』に至るまで多くの短篇があり、長篇には『小鳥の巣』がある。その中には『烏』の如き『小猫』の如き現實の暗黑面を描き、醜汚なものを描いたものも少なくない。或は『小鳥の巣』の如く痛ましい自己を描いたものもあつた。けれど、その獨得の境は他の多くの作に於けるが如き、纖細な官能を以て光彩陸離たる想像を拉し來り、これを圍むに抒情詩的情味を以てせる夢幻の境である。そして彼の作をして、こゝに至らしめたものは、過去の回想追懷である。今は見ぬ世の幻の女を求めるが如き憧憬である。しかも追懷憧憬の底には、求めて得ざる深い苦惱と煩悶とが橫はつてゐる。解放せられた情緒の中にも脈々として盡きない現實味がある。そこには人生に對して取る所の眞摯な態度から來る深い苦しい色調が現出されてゐる。一見空想を以て造り上げられたが如き、しかし寫生文的の餘裕ある筆

致を以てせる、淡い舊い戀物語めいてしかも悲痛卒讀に堪へざるものが多いのは、要するにこれあるがためである。

未明の作も長篇『魔』短篇集『惑星』『闇』に於けるごとく、また憧憬と追懷とを以てせるものが多かつた。故に幼年時代や少年時代を主題にしたものが少なくなかつた。これは人生生活に對する絶望、運命に對する恐怖、生存に對する不安動搖を避けるために、さうであつたと見ることも出來る。未明の作品には社會の虛僞人間の築き上げた文明の淺はかさから來る懷疑・呪咀も描かれてゐる。それに對する絶望、またそれを脫しようとする苦鬪も見られる。されど、その少年を主人公とするは、やがて少年の心を以て人生に對し自然に對しようとするものであつた。純粹な強い感情を以て占められた少年は、すべてを實感に訴へ、感覺を銳敏に動かして、すべてを官能的たらしめようとする。此に於いて、日常の生活にも不可解の力を認め、神祕の力に驚かんとするのであつた。憧憬と追懷の情緒に配する神祕のひらめき、更に『少年の笛』に見えたやうな人生に對する絶望から飛躍しようとする態度は、或は未明を毒するものであるといふものもあつたが、兎に角相よつて一の新ロマンチシズムの傾向を帶びさするものであつた。

第五章　詩壇の活動

一　新體詩

戰後の新體詩界はまた活躍の狀態を呈した。林外は多彩の空想を操り、横瀨夜雨は可憐可愛の詩想を歌ひ、小山内薫は修辭に力を盡した。されど、廣く之を見る時は、泣菫と有明とを以て代表せしめることが出來よう。そして、泡鳴はさながら彗星の如く、その間に縱横の行動をなして、つねに新しき論を立ててゐた。更に一般の現象を經める時は、これを象徵主義と自然主義との提携に歸することが出來よう。

さきに有明の『春鳥集』によつてその端を示した佛蘭西象徵派の詩風は、或は朦朧晦澁と評せられ、隨つて是非の論も盛んであつたが、それは畢竟漠然たる思想と幼稚な技巧とが累をなしたのである。然るに、その技巧はよく練磨せられて平明の調が加はり、また人生を歌つては痛切深刻にその根柢に觸れることが出來るやうになつた。實生活に觸れておのづから發する思慕・欣仰・贊美・呪咀・憎惡の聲は、やがて詩となり歌となつた。これ實に技巧上の名目に過ぎなかつた象徵主義が、今や一世に漲り來らうとする自然

主義の傾向と相合した爲である。「有明集」一卷の中には、これ等の傾向が最もよく明かに示されてゐる。現代生活の悲哀・不安・動搖がよく歌はれてゐる。但しその情緒は激越なもの、沈痛なものではなかつた。有明の得意の技巧、細緻な彫琢は、その典雅な形式を完成したが、それと共にまた情緒その者を宛らに表現することは出來なかつた。「有明集」に對する毀譽褒貶は此點から出でたが、また先の如くたゞ朦朧晦澁を以て評し去るものではなかつた。これは象徴詩風が如何に深く浸潤したかを示すものであらう。

かういふ傾向は、また泣菫の「白羊宮」に於いても見ることが出來る。「白羊宮」は蓋し三十九年に於いて出版せられた詩集の中にあつては、最も注目すべき作品であつたらう。この集に於いて著しい特色は、零餘子・金星草・無花果・鈴蘭・鷄・鳩・等の草木鳥蟲その他の自然物に感興を寄せ、力めてその風趣を髣髴せしめようとし、更にまた之を假り用ゐて、人生の象徴としたことである。即ち自然を以て人生の象徴と見る傾向、かの自然主義の求めようとする徑路は、よく之に於いて見ることが出來る。この集の他の特色は古語の復活に力を盡したといふ點である。人生と自然との融合によつて典雅醇邃の風趣を求めるが爲に、おのづから古語を取り來つてその典麗な趣を借りようとするのであつた。その可否は兎もあれ、詩語の豐富を加へたことは少なくない。

この二家がなほ技巧の妙を求めて詩の生命とする弊から脱し難い時、詩語の蕪雜に流れるをも顧みず、眞實な人生當面の事實によつて之に痛切な解釋を加へ、冥想的詩風をなしたものは泡鳴であつた。これにも自然主義の傾向は、おのづから認められた。それがやがて彼れの「自然主義的表象詩論」をなすに至つたのであらう。

このやうに自然主義の影響が詩壇のすべての部分に現はれた時、更に明かに之を示したのは鷗外と明星派との詩風であつた。鷗外は腰辨當といふ匿名のもとに、三十九年の五月の頃から雜誌「藝苑」「趣味」「明星」等にその試作を出した。卑近な題材、市井に見るところの事物により、平淡な描寫をなした。如何に日常の生活、俗の一語を以て評し去るべき市井の雜事も、なほ感興を惹くに足るかを示すものであつた。要するに、その市井詩は卑俗生活に對する寫生的描寫の興味を表すに外ならぬものであつた、平淡平明の詩境を開拓する努力に過ぎなかつた。然るに明星派はこの主張を更に内面的に進めるに至つた。市井詩が自然を自然として寫す時、これはその裏面に隱れてゐる何等かの意味を求め、自然の中に主觀の對象を求めるのであつた。與謝野寬及び北原白秋・茅野蕭々・大井蒼梧・平野萬里等の作がそれである。その題材は都會・道路・川蒸氣・鐵工場鑛守祭・試驗場・の如き日常生活に最も近いものを選んだ。また句法用語の上に、そ

の一語一句をも苟くせざる技巧を重んじた。

三十九年二月、英詩人野口米次郞・泣菫・有明・林外・泡鳴・花外・白星・等は英米の詩人アーサー・シモンズ、ウィルアム・エーツ、ミルラー・等と共にあやめ會を創立し、詩集「あやめ草」及び「豐旗雲」を出したが、程なく解散するに至つた。

四十年に相馬御風・人見東明・野口雨情・三木露風・は早稻田詩社を起し、河井醉茗・夜雨・は詩草社を設けて雜誌「詩人」を出した。その主觀詩は實に自然主義によつて與へられた現實思想から生れ出でたものであつた。詩草社同人の川路柳虹に言文一致體の詩があつた。雨情に『朝花夕花』の第一集及び第二集があつた。平淡な俗謠體を以て注目せられた。さきに民謠の蒐集研究に關する議論があり、雜誌「白百合」また內地諸國の民謠を蒐集せるが如きものが、新風調を促す聲と共にこれをなしたのであらう。然し共に一時の創作で、詩に對する根本的革新から出でたものではなかつた。

泡鳴の詩集『闇の杯盤』が四十一年に出でた。これはその標榜する所謂自主然義的表象詩であつた。宗教的形式から脫却し、神經と自然との燃燒流化により、刹那的生慾の發現によつて自ら發し自ら達すべき新しい詩を求めた。眞摯・熱烈・刹那的・表象の幻像こそ抒情詩の本領、とする所である、卽ちこれ心理的詩歌であると。觀照と實行とを一

になす新自然主義の人生觀は、燃えるが如き言辭を透して詠み出された。そして、これが詩壇に一動搖を來し、未曾有の革新を起す動機となつた。

泡鳴の詩風を見て、その當然至るべきものたることを首肯する者は、更にかくても猶言語の制限の中にある理由を疑はざるを得なかつた。詩歌本來の特質たる形式上の制約は、果して如何なるものであらうか。口語詩の運動はかくて起つた。抱月は雜誌「詩人」に於いて、現代の詩は言文一致の句法たるべきことを説いた。御風は早稻田文學誌上に於いて詩歌の形式は即ち人間の情緒さながらの形式、主觀さながらの形式たることを立論した。これ、我なるものの聲を聽き且つ歌ふ、即ち直截に自由に自己中心の聲さながらの形式こそ眞の形式といふのであつた。從來試みられた口語詩即ち俗語體はなほ舊套の口語、今は進んで現代吾人の用ゐる口語でなければならぬ。また詩調も舊來のものを破壞して、自由な情緒、主觀さながらのリズムたることを要求した。行と聯との制約破壞をも要求した。要するに、人生生活の客觀さながらの形式を小説に求めて自然主義を得た如く、これは主觀そのものゝ形式を詩歌の自然主義として現はさうとするのであつた。

御風がその論を出したは四十一年の二・三・四月であつたが、ついでその五月には『痩犬』

を出し、露風もまた黒い鳥を出した。こゝに於いて、泡鳴・有明・QLO及び服部嘉香の論難となり、一時詩壇を動かした。この形式破壞と自由詩口語詩の唱道とは、遂に勢を築きなした。四十二年に至つては益々激しさを加へた。自然主義が文壇の主なる思潮である限り、この運動は益々勢力あるものであつた。

さらば、詩の內容は如何なる進歩をなし推移を來したであらうか。制約的形式を棄てゝ自由な個性的形式をなし得た今日は、最早やセンチメンタルでも、ロマンチックでもなく、官能的刹那的のものをなすに至つた。自由詩社同人の活動は實に之を代表するものであつた。東明・加藤介春・福田夕咲・山村暮鳥・等の作には官能的氣分をさながらに歌つたものが多くあつた。麻痺せる神經、頽廢絕望の戰慄、或はその氣分を表はすために、唇・血・乳房・等を取り來るのであつた。そして、この詩風にあつては北原白秋を以て傑出したものと見るべきであらう。その著作の世に認められたのは四十二年の『邪宗門』である。自然又實際生活そのものゝ感情官能を表現しようとした。殊に、その豐富な語彙に至つては他の模すべからざる所がある。詩調の優麗なことも、亦遠く群を抜いてゐる。時にはこれが爲に技巧に陷るかとも見られる程である。露風の『廢園』も『邪宗門』に劣らざる新しみを有してゐた。その自然に對し實際生活に對する態度に就い

ては、却て前者よりも優れた所があつた。

四十三年になつては、詩壇の形勢は益々盛大になり行くのであつた。牧水はその主幹となつて雜誌「創作」を發刊した。この年はまた口語詩以外、他の方面からも詩界の革新を促した。それは散文詩の運動であつた。形式破壞の論は、さきに口語詩となつた。しかし未だ創作の方面では充分の效果を現はすことが出來なかつた。この狀態を見て、その表現の自由を利用し、複雜な近代思想をさながらに描き出さうとするのが散文詩であつた。これを試みたものは泡鳴・福永挽歌・佐藤緑葉・八橋有春・及び醉茗であつた。もとより是等の人々の試みる所は、必ずしも同一途に出づるものではなかつた。或者は口語から成る無形律のものを散文と稱して、ホイットマンの詩風を輸入した。或者はツルゲネーフ・ボードレールの詩形の迹を襲つた。有春が散文詩に試みた「都會趣味」は、實に詩壇に汪溢せる現象であつた。なほその一現象は、白秋・木下杢太郎・等の手に編せられた雜誌「屋上庭園」が、異國情調と共に都會生活の趣味の謳歌に力めたことによつても知ることが出來やう。挽歌の試作は「習作」と題する詩集の中に集められてゐる。その描く所の複雜なことは、他に比類のないものといはれた。そして、醉茗の「霧」に至つては新しい形式によつて新しい技巧を試みたもの、これまた特記すべき作品たるを失は

なかつた。

四十四年に白秋は『思ひ出』を出し、これと同時に東明は『夜の舞踏』を出した。中にも『思ひ出』は詩界に一時期を劃するものであるとも評せられた。作者は題していふ「可憐なさうして手ごろの小さい抒情小曲集を、私のなつかしい人々の手に獻げたいと思つて、なるべく自分の親しみ深い稚い時代の思ひ出を茲に集めた」と。集の中には「骨牌の女王」と題する新しい異國趣味の童謠體の歌もあつたが、殊に傑れたのは「生の芽生」として幼年時代の性慾史を歌ひ、强烈な南國的色彩を附したもの「Tanka john の悲哀」として春のめざめ以後の少年時代の悲哀を歌つたもの、及び「柳河風俗詩」として鄕里の風物・酒倉の生活を歌つたものである。

自然主義の窮まるところ、現實の齎し來る不安・壓迫・嫌惡は、おのづから隱れ家を求めしめて、過去の追想幼年時代の回想とならしめた。これが文壇一般の傾向であつた。白秋の『思ひ出』はその追懷文學として異彩を放つたものである。『思ひ出』はまた新しい俗謠體に於いても成功した。柳虹が『路傍の花』に於いて現代語の口語詩を出す時に、これは蕪雜なのを悲んで、洗煉を遂げようがために俗謠體を取つた。中にも「柳河風俗詩」の如きは、地方色をも出さうとするものであつた。

『夜の舞踏』は自然主義の分化とも見るべき享樂主義の上に立てられた事は、なほ『思ひ出』の如く、而も官能的な微妙な描寫は、また相竝んで評せられるものであつた。

四十五年に出でた多くの詩集中で、世の注目する所となつたものは、福田夕咲の『春の夢』である。これも『思ひ出』『夜の舞踏』の傾向の後にあるものであつた。技巧の點では未だ前二者に比することが出來ない。古い俗謠の示す心意氣といふ事以外に、多く出づる所がない。

森川葵村の『夜の葉』も出でた。これは陰影に潛む哀愁と追憶とを謳はうとするものであつた。これも未だ完成の域を去ることの遠きものである。

二　和歌

新體詩がかくの如き途を踏み來つた時、短歌は如何なる狀態を以て進んでゐたのであらうか。もとより、文壇の一隅には、なほ舊派の歌風を守るものが少なくはなかつた。またそれに近い竹柏園一派の活動も、ひき續いて盛んなものであつた。雜誌『心の花』の刊行や短歌『玉琴』の編輯はそれを示すものである。所謂新派には、まづ晶子の作品を見なければならぬ。三十九年に出した『舞姫』は豐麗典雅を以て知られ『夢の華』には冷

靜に人生を視ようとする傾向が現はれた。その傾向が窮まる所は四十四年の『春泥集』と四十五年の『青海波』とであつた。實生活の觀照省察の其の堂に入るものがあつた。眞摯な大膽な自己の告白が、その巧妙な技巧と相俟つて、人を動かすものがある。

薫園もまた不斷の努力を以て多くの歌集を出した。『覺めたる歌』『わがおもひ』『山河』等がそれである。中にも『山河』はよくその詩風を示すものである。薫園の詩風は、もと自然を自然としてさながらに歌ふものであつた。それが『覺めたる歌』以來漸く自己をも見る樣になつた。就中『山河』となつては、生活の倦怠から自然の懷しみに歸る思ひを詠んでゐる。然し、未だ自己と自然との融和を見るに至らなかつた。

柴舟も亦歌壇に貢獻するところが少なくなかつた。その歌集に『靜夜』『永日』等がある。その調は清新、つねに一味の雅趣が油然として湧いてゐる趣がある。その歌ふところは冥想、人生に對する思索であつた。その歌が時としては全く散文的になつて、興味の索然たるものゝあるのも、この故であらう。

窪田空穗には『空穗歌集』があつた。前期末の作『まひる野』以後のすべてを輯めたもので、その作風の變遷を見ることが出來る。技巧の圓熟は後に至るに隨つて加はつてゐるけれど燃えるが如き情熱は漸次に熄むかの狀を呈して來た。これと共に人生を

觀るの態度は正鵠を得るやうになつた。

新體詩壇に官能の解放といふ一時期を劃するに至つた四十二年以後、しばし文學の大勢から隔離されつゝあつた短歌は非常の勢を以て行はれた。新しい若い歌人の群は雜誌「創作」に「詩歌」に「自然」に「ザムボア」によつて活動をはじめた。その中に覇を稱するに足るものは、白秋と牧水であつた。白秋の短歌はなほ新體詩に於いて見るが如く、細緻な官能と微妙な音律とを以て勝つてゐる。牧水の獨り歌へる「別離」「路上」は寂しい内省の歌として暗い冥想の調としてしかも溫藉な情緒のほのめきを見る點に於いて、世にもてはやされた。牧水の歌は自然を通じての自己、自己を透しての自然が渾然として一になる點が、白秋の主として都會情調を歌ふものと異なる所であつた。この點に於いては、寧ろ柴舟、薫園等に近いものがある。

白秋と同じ傾向を有するものは吉井勇の詠である。その集には『水荘記』がある。これは一種の歌物語ともいふべく、戯曲的構造を有する文章の中に、和歌を編めるものである。その中に或は恐しい人生の運命を說き、或は紅燈街裏の歡樂のはかなさを歌ひ、或は鑛山山上の戀愛の傷しさを歌ひ、或は海鄉に神仙と戀愛を歌ふなど、縱横の歌才を示して餘りあるものがある。主としてこれらは何れも享樂の聲である。「酒ほがひ」

も亦歡樂の悲哀を歌つたものである。

土岐哀果と前田夕暮との詩境は全く之に反してゐる。その歌ふところは歡樂の巷でもなく、憧憬の情趣でもなく、實生活から來る悲哀と慰藉とであつた。多忙なる日常生活に人と人との間の矛盾を傷み、薄暮の街路にその風の黄なるを哀み、疲れた腦から沁み出づる過ぎし日の追憶を懷しむといふのが、哀果の『黄昏』である。何を描いても、自分の生活を根柢にして歌ひたいと思ふ、極めて通例の一凡人の生活が、少しでも私の歌を透して窺はれたら、私はそれに滿足したいと思ふといふのは、夕暮が『收穫』等を始としての主張であつた。

更に『南方の花』とて、近藤元といふ人の歌集がある。日本で一番の詩人らしい生活をして居ると題せる作家の自己をさながらに出したもの、頽廢し困憊せる心情を鋭敏な官能を以て歌つてゐる。されど、圓熟といふには、なほ遙に遠いものであつた。

石川啄木には『一握の砂』と『悲しき玩具』とがある。病苦に滿てる實感をそのまゝに詠み出でたのが、他に比し難い傑れた點を有してゐる。その身は病床に臥して、しかも心は一切の束縛から脫して、自由の技巧、奔放の情熱、人生の奥に徹して之を歌ふところ歌壇に一新趣を寄與したものであつた。不幸にして作家はこの二集を殘して早世し

てしまつた。

三　俳句

新體詩界、和歌界には、以上見るが如く、自然主義の影響の著しいものがあつた。俳句はもと超然として世相の外に立つもの、然るにその自然主義の影響餘波はこゝにも更に大なるものがあつた。所謂新傾向の俳風はかくして起つた。蓋し、俳句はこの自然主義の感化を受けずとも、おのづから一轉すべき狀態にあつたのである。子規は初め寫生を唱道した。寫生即ち俳句であるとも考へた。然し、それは平凡に陷ることを自覺して、配合法を唱へる樣になり、蕪村調を出す樣になつた。子規歿後の俳壇は、しばし蕪村調の眞諦を求めるに忙しかつた。そして、これを明治俳風の圓熟せるものとした。おもふに、蕪村時代は蕉風の大成した時で、しかも衰頽を兆し停滯を現はす時であつた。かくの如くにして、明治の俳句は元祿・天明の遺珠を拾つて足れりとしなければならなかつた。虛子は此に於いて俳句の境は已に盡きたものとして寫生文に轉じた。これと共に、漸く聯想の遊戲を事とするものを多く見るに至つた。かくて墮落の端が示された。此際に於いて、衰頽を救ふ唯一の策は、趣味の態度を轉回するより外はない。こ

れ實に子規の努力の補足であつた。明治の俳風はこれを得て始めて完美するものであつた。四十一年に、碧梧桐は「日本及日本人」に於いて新傾向の俳句に就いて論じた。大須賀乙字は雜誌「アカネ」によつて種々の方面から新俳句を說いた。碧梧桐は題材の個性を發揮するにありといひ、乙字は、作者が萬人と同じ目を以てせず、自分の目を以て深く見んとするは、物の個性發揮と共に自己の個性發揮であるといふのであつた。要するに、これは客觀的態度に偏したものから、主觀的趣味に移らうとするのであつた。季題に對する膠着の聯想から脫して、各人が自己の眼を以て新しい自然を見よといふのであつた。

新傾向の俳句は叙事に於いて叙景に於いて複雜な取材をなした。描寫に於いて委曲精緻のものとなつた。單純な寫生から感情の描寫に移つた。平面的・類型的のものから内面的・個性的のものとなつた。

大門を押されてはいる櫻かな　四方太

遊女町櫻植ゑしと覺えける　紗羊

前句は「春夏秋冬」の中の句、後句は碧梧桐が率ゐる「日本及日本人」の句、相比較してその差のある所が知られよう。新傾向の俳句に於いて殊に顯著なのは、實感を主とし印象

を重んじた事である。自己の經驗の上に吟詠の想を構ふる努力は、自然に我等の日常の生活に接近せしめるのであつた。生活の思慕を吟じ悲哀を吟ずる到底一茶や太祇の比ではない。これによつても自然主義の俳句に及ぼした事の多大なるが知られるこれと共に、その主張はともあれ、俳句は元來季題に囚へられる約束的の文學である、どうして生活の諸相を自由に吟ずることが出來やうか、かういふ疑問が起らざるを得なかつた。こゝに於いて季題に關する新らしい解釋は起つた。季題とは條件を附した知識的の約束ではなくて、國民性の流露と發展の上に資する先天的性質を帶びた約束である。春雨は俳人の感想が俳人のみに抽象せられたものではなくて、自然に對する感想の醇なものである。即ち俳人の季題趣味は一種の象徵である。季題趣味の象徵は我等の祖先の直覺し認識したものを、直系的に傳承し感受するにある。これが他の文學に類を見ざる特徵である。かくの如くにして、固定せる形式を破壞し、却てそれによつて新らしい趣味を發見しようとするのであつた。

碧梧桐のこの主張は、さながら颶風の如き勢を以て俳壇を席卷した。「日本俳句鈔」及び「續春夏秋冬」は皆それと步武を同じうするものであつた。もとより碧梧桐と相並んで獨特の壇場を有するものも少なくなかつた。鳴雪は終始一貫して溫雅の調を以

て『鳴雪句集』を出し、青々はまた『青々句集』を出し、傍ら雜誌「寶船」の經營に力めてゐた。虚子は俳句に疎遠となつたとはいふものゝ、その句集に『新春夏秋冬』があり、また雜誌「ホトトギス」を經營して、他日の機會を待つかの如きものがあつた。しかし碧梧桐の勢力は是等を壓するに足るものがあつた。樸天鵬の經營する「蝸牛」荻原井泉水の「層雲」乙字の「アカネ」の如きは勿論碧梧桐と全然一致するものではないが、兎に角にその一派と見ることが出來る。その俳風は地方にも廣まつた。碧梧桐が東西に俳行脚して說く所のあつたからでもある。『三千里』と題する作はその紀行と吟詠とを示したものである。

碧梧桐はそのはじめ新傾向の俳句を說き、題材の個性を探るの要を說いたが、それと共に、趣味を忘却しない事を望んだ。趣味的個性は容易に發見せられるものではない。個性を探る弊は、難解趣味に陷ることを危んだ。然るに、不幸にしてその言は自己の吟及びその一派の吟に當つべきものが少なくなかつた。即ちたゞ技巧に腐心して、何等の感激をも有しない作を出すに及んだ。これがその主張の是認せられながら、その作の非難せられる所以であつた。

とはいへ、この運動があつて、所謂俳天地に逍遙せる俳句をして始めて實人生に接觸

せしめ、新興文學と並行せしめた。季題趣味の如きも、單に自然に對する分類と見ないで、實人生の表現として見るに至つた。俳句の形式に於いていふ時鳥は國民的生活の表現としての時鳥そのものより、時鳥に對する感興を表はしてゐる。故に、この場合の時鳥をして內的經驗の表現たらしめるやうに力めるところに、俳句の技巧の根本義は存してゐるといはれた。故に俳句は實人生表現の一般藝術と比する時は、表現すべき民族精神に加へるに、技巧に、よつてその特色を發揮するものであるとせられた。かくの如くにして、俳句は國民的藝術と解せられるに至つた。

第六章　劇壇の新氣運

戰後の文壇には以上の如く種々の新しい運動が起つた。その中でいち早くも成功の實を擧げることを得たのは小説であつた。詩歌は之に次ぎ、演劇は最も遲れた。四十三年に及んで、劇の新運動は始めて活躍の狀を呈して、新興文學の最も生々潑剌の氣を具するものとなつた。これまではその機縁の熟するを待つてゐたものともいはれよう。これは演劇の刷新が他の文學に比することの出來ない幾多の困難が横つてゐるからである。すなはち演劇の刷新には、脚本も新しく、俳優も新しく、舞臺監督も新しく、俗衆を離れた新しい試演場を得ることを眞先にしなければならぬ。然るに、脚本の新樣それはともあれ、他の實際問題に至つては、中々に實現することが困難であつた。剩へ現代に相應しない舊趣味に彷徨するものゝ勢力は、實に侮るべからざるものがあつるたこれが爲に革新の旗幟は幾度か樹立せられて、また幾度か顚倒の厄を免れなかつた。かくて四十三年以前、この舊趣味と戰つて空しく敗殘の憂目を見、或はそれに同化せられることの止むなきに至つたものも少なくなかつた。

戰後の劇壇はまづ文藝協會の活動に始まつた。これは演劇に專らなるものではなかつたが、その事業の主なるものゝ一としては、劇の改善を期するにあつた。三十九年一月、その發會式の餘興に、逍遙の振事劇『新曲かぐや姫』に節付けした謠曲と永井室外の雅劇『妹山背山』、小波の喜劇『誕生日』及び逍遙の『沓手鳥孤城落月』とを演じた。これが所謂文士劇の氣運の動き始めのものであつた。五月には、演劇記者の組織せる若葉會は、杉贋阿彌の作『內海落』、石川寅彥の作『公平天狗問答』及び『熊谷陣屋』を演じた。それが動となつて『每日新聞』演劇團體の組織を見るに至つた。異なつた種々の階級から登場者を出して、演劇の品位を高め、文藝の天地を自由にし、時代の如何を論ぜず總て樣式の新しいものを研究しようとするのが、その趣旨であつた。また婦女の役は女優をして當らしめ、漸次に女優養成の標的に達しようとする抱負をも有してゐた。四十年から四十一年にかけて、それが上演したものに、岡本綺堂の『阿新丸』『月宛の吉田寅次郎』シ、レルの『イリニフ』及び『手習鑑』綺堂の『十津川戰記』山崎紫紅の『甕破柴田』栗島狹衣の喜劇『ひとり娘』及び『源平布引瀧』綺堂の『由井正雪』紫紅の『信玄最後』等があつた。されど、年と共に技巧は熟したにも拘はらず、全く舊劇の型を守るに忙しく、最初の期待を失ふに至つた。

文藝協會は文藝部第一回大會を三十九年の十月に開き、逍遙の譯『ヴェニスの商人』及びその作『桐一葉』と『常闇』とを演じた。『常闇』は新樣式によれる歌劇の如き、大いに世の耳目を驚かした。　四十年の十二月には、杉谷代水の作『大極殿』逍遙の譯『ハムレット』の一部及び『浦島』の一部を演じた。

その他、三十九年二月には川上等が明治座でマーテルリングの『モンナヴンナ』を山岸荷葉の飜譯によつて上場して、不成功に終れるがあり、三月には白星の劇詩『釋迦』を三崎座の女優が演ぜるものがあつた。　四十年には荒川重秀・澤村宗之助によつて洋劇研究會が組織せられて、原語で沙翁作『ジュリヤス・シーザー』を演じた。

四十年に於いて劇壇に一波をあげたのは脚本改作問題であつた。　さきに「都新聞」の懸賞募集の際當選した佐野天聲の作『大農』が高田・藤澤・喜多村・等によつて本郷座に上演せらるゝや、初めは原作のまゝに演じたけれども、後直ちに觀客に憚つて作者に改作を迫るに至つた。　これについては是非の論が盛に起つた。　要するに、この問題は藝術的見地に立てる作家と、一般世俗の趣味に囚へられた俳優等との相違點を明示するものであつた。　これも演劇刷新が自覺の上に企てられた事を示すものと見ることが出來よう。

脚本には天聲に『不死の誓』があつた。これも『大農』と共に社會劇の樣式を帶びるものである。紫紅の作に『たゝつ桔梗』があつた。これは『上杉謙信』『日蓮雨乞』『左具左良越』『底倉湯』等七篇の一幕物を輯めたもの、大方は戀愛の勝利を描いて新時代の傾向を示してゐるものである。かゝる中に、イブセンの脚本も飜譯せられた。橋本青雨の譯『幽靈』千葉掬香の譯『蘇生の日』の如きはそれである。『ピネロ』も譯された。春曙の『淸濁』がそれである。ハウプトマンの作も譯された。竹風及び鏡花の『沈鐘』はそれであつた。四十一年に至つては鷗外の飜譯の活動が始まつた。エデキンドの『出發前半時間』シェフエルの『父』などが相踵いで公にせられた。淺野憑虛・戸澤姑射の沙翁の譯も出でた。『リヤ王』『御意のまゝ』『シーザー』『から騷ぎ』など篇を重ねた。『モリエール全集』も草野柴二の譯によつて出でた。これ等は皆劇の新運動を鼓舞し指導しようとするものであつた。されど如何せん時機は未だ熟さなかつた。毎日派の文士劇も解散し、文藝協會もしばらく沈默を守つて起たない。市川左團次が松居松葉輔助の下に、松葉作の『袈裟と盛遠』を演じ、逍遙譯の『ヴェニスの商人』法廷の場を演じたけれど效果なく、川上音次郎が演劇革新軍を組織して明治座及び本郷座に據り、左團次・延二郎・文五郎等を糾合し、更に女優貞奴等と共に新舊の兩派から活動を始めたけれど、その努力は空しかつた。

然し、二三の脚本の見るべきものはあつた。青果の『生れざりせば』の如き、天聲の『由井正雪』の如き、紫紅の『明智光秀』の如き、或は長谷川時雨が海事協會大會開演用としての懸賞に應じた『花王丸』の如きは、記憶すべきものであらう。

この趨勢は四十二年にまで及んだ。しかしながら、こゝに一縷の光明を見るに至つた。捲土重來の策は講ぜられた。今は舊俳優に對して云々すべき時ではない、新しい劇は新しい俳優によつて實演せられねばならぬ。文藝協會はその五月に演藝研究所を開いて、演劇に關する學理と技藝を教授して、俳優の養成に努めるに至つた。これよりさきには、俳優藤澤淺次郎を主任とせる俳優養成所も起つた。俳優養成所は、もとよりその規模に於いても、目的に於いても、文藝協會のそれと比較することは出來なかつたとはいへ、兎に角時運の動く所のあつたことが知られる。その三月には薫と左團次とを主幹とした自由劇場も計畫せられた。これは佛蘭西のアントアンスのテアトル・リイブルの組織を模倣したものであつた。舊い俳優がまづ素人に還つて新しい試をなさうとするのであつた。

鷗外の『一幕物』も刊行せられた。シェフエルの『猛者』ヘルマン・バールの『短劍を持ちたる女』『奥底』ハウプトマンの『僧房夢』ホフマンスタールの『痴人と死』ワイルドの『サロメ』

マーテルリングの『奇蹟』ストリンドベルグの『債鬼』など、近代に於ける歐洲知名の戲曲家の作が載せられた。これによつて一幕物に關する興味を刺激せられ、新しい作家に之を試みるものも少なくなかつた。木下杢太郎の「南蠻寺門前」の如き、秋田雨雀の靜劇『記念會前夜』の如き、吉井勇の「午後三時」の如きが、それである。その他、脚本には多くの新しい試みがあつた。鷗外の「假面」は伊井蓉峰一座にて上演せられた。史劇「靜」は現代語を以て史劇を取り扱つた點が世を驚かした。

逍遙の沙翁『ハムレット』の飜譯も世を動かした一つであつた。逍遙は幾回か稿を改め、そして從來その三四場の譯の近代語に近きを捨てゝ、常套的の歌舞伎口調よりも寧ろ能の狂言に近い口調を取つて、ルネッサンス時代の古びを附け、更にその風味、その色、その匂を出すことに努めた。その譯筆の自由なる、地口語呂の如きも皆相應すべき邦語を當てゝゐるが如き、到底他の模倣することの出來ないものがあつた。そして、相踵いで『ロミオとジュリエット』を出さうとして、まづその一部分を發表した。

逍遙はまた『浦島』及び「かぐや」姫を追つて「新樂劇論」に於いて主張せる振事劇の詞章を出した。四十一年に出版した『金毛狐』には五篇を收めてゐる。『金毛狐』『一休禪師』「お夏狂らん」『初夢』『小袖物語』がそれである。その以前にも「俄仙人」の如きものがあ

つた。さきの『浦島』及び『かぐや姫』は所謂新樂劇に對する理想の片影とて、なか〳〵に當時上演して成功しようとは思はれなかつた。こゝに於いてか、過渡期のものとして、作曲家の手馴らし、振附の手馴らしたらしめようとして『はちかつぎ姫』以下の作をなした。卽ち固有の形式をば出來得るだけ取り入れて型の保存に資せんとし、構造修辭に伴なへる缺點を除いて將來の發展に便しようとした。卽ち狹斜趣味荒唐無稽を捨てて、夢幻隱約の間に多少の人情の機微を寓しようとした。四十二年には『和歌の浦』の作を出した。純抒情詩式、大きな海波式、そして一段一章に象徴を有たせ、音樂には西洋樂を多く用ゐようとする試作であつた。逍遙の振事劇に對する研究は年一年歩を進めて、四十四年には『寒山拾得』『お七吉三』『鍾馗』を出した。全部を畫にして、きまりきまりの位置、姿勢、態度、表情、等を悉く名畫の筆意に擬して演じようとするものであつた。四十五年にはまた別樣の試み、一種のオペラとして『墮ちたる天女』を出した。

　四十二年には、如上の運動以外に、特記せねばならぬことは、自由劇場の成功であつた。その十一月、有樂座でイプセンの『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』が薰の指導によつて左團次、宗之助、延若、等によつて演ぜられた。譯は鷗外の筆によつて成されたものである。イプセン劇の我國に於いて演ぜられたのは、これが始である。それが種々の方面に於

いて劇場に致へる所に少なくなかつた。よしやその俳優の伎倆に未だしい所はあらうが、兎に角に淋しい山のない作を豫期以上に演ずることが出來た。これが作劇家をして奮起せしめ、また舊俳優の此の擧は興行界に覺醒を促す縁となつた。

これと共に俳優養成所にも試演會が開かれた。吉井勇の『淺草觀音堂』桝本清の『非國民』小山内薫の譯「貧民院」等を演じた。

四十三年は、革新の機の熟した時である。すべての方面に於いて、何等かの新しさを印しないでは止むまいとする趣があつた。その一月には鷗外の『續一幕物』が出でた。さきの『一幕物』と共に、近代の劇を譯したものである。逍遙の沙翁譯に對して、これは近代の物を以て益するところが實に多大なりといはねばならぬ。抱月も亦イブセンの『人形の家』を早稲田文學に出した。これに次いで脚本の飜譯せられるものが甚だ多くあつた。ショーの作、マーテルリングの作、イブセンの作、ハウプトマンの作などが陸續として出で、逍遙の『ロミオとジュリエット』の全譯も亦出版せられた。

これを實演に於いて見る時、「桐一葉」は當時の舞臺に調和する色彩を以て舞臺に現はれ、青々園の『出雲の阿國』は舊俳優舊芝居に許された範圍に於いて新しさを加へた。自由劇場の活動は愈々盛んになつた。五月に、鷗外の譯エデキンドの「出發前半時間」及

でその創作「生田川」を出した。『生田川』は古代の傳説を現代語を以て脚色したものである。これについで、なほ薫の譯チェホフの『犬』を演じた。十二月には、薫の譯ゴルキーの『夜の宿』及び勇の作『夢介と僧』を演じた。

四月には新に中村吉藏によつて新社會劇團が組織せられて、春曙の舞臺監督の下に『牧師の家』が演ぜられ、十一月には[illegible]木清及び俳優井上正夫によつて新時代劇が起された。ショーの作で鷗外の譯『馬盜坊』チェガレーの作で清の飜案『秋の悲』チェホフの作で河村花菱の譯『熊』が上演せられた。その他、俳優學校生徒試演會には鼓村の作『歸農』鷗外の譯でヘルマン・バールの作『奥底』『砂時計』等が演ぜられ、荷風の史劇『平維盛』は左團次によつて演ぜられた。

かゝる狀態にあるを以て『劇と詩』『新思潮』『スバル』『早稻田文學』紙上には、多くの創作劇が載せられた。それらには吉藏・勇・杢太郎・哲郎・清・楠山正雄・雨雀・紅綠・薫・花菱・荷風・抱月・秀雄及び鷗外等の作が多くあつた。

四十四年は前年の後をうけて、新氣運は益々動いた。新社會劇團は前年に倒れたが、新時代劇は今年に入つては、ゴーゴリの作で正雄の譯『檢査官』眞山青果の作『第一人』を出し、後に更にホフマンスタールの作で鷗外の譯『痴人と死』を出したが、やがてこれも解散

の厄にあつた。然し、自由劇場の活動は之を補つて餘りがあつた。六月には長田秀雄の作『歡樂の鬼』雨雀の作『第一の曉』勇の作『河内屋與兵衞』及び鷗外の譯でマーテルリングの作『サンタントニウスの奇蹟』を出した。十月には、鷗外の譯でハウプトマンの作『寂しき人々』を出した。

その他、俳優學校の試演會にては、月ごとに新脚本の上場に力め、また北村季晴が鷗外を顧問として組織せる演藝同志會は、ハウプトマンの『エルガ』を演じた。之に加へるに、我國唯一の西洋式の劇場、全然觀客主位として從來の茶屋制度を打破した帝國劇場の建築は落成して、新しい興行法は始まつた。その初演の脚本柴紅の作『頼朝』は傑作ではなかつたが、この初興行の成行は愈劇の新たに力強い感を抱かしめた。殊に多年の準備が成つて、こゝに雄飛しようとする文藝協會の活動こそ、目ざましいものがあつた。

二月、文藝協會は從來の方針たる一般藝術の向上、及びその社會に對する交渉の進善を期した事を改めて、專ら劇界の刷新に全力を集中する事となつた。その期する所は、劇界各方面の根本的刷新であつた。新藝術は之を時代に適應せる新脚本の薦奬と識見ある新俳優の養拔とに求め、劇界の陋風は當事者が人格の向上と組織機關の改善とによつて矯正しようとするのであつた。かくて設けられた研究所に養成せられた新

俳優は、五月に至り、帝國劇場に於いて逍遙の譯『ハムレット』を演じた。日本に沙翁劇を興さうとするは、確たる自信が有つてしたのである。一には劇壇の沈滯を救ふがため、二には沙翁が世界的の詩人なればとて日本に移植する事の不可能ならぬため三には沙翁劇を日本人の解釋を以てするは世界文藝上に一の貢獻たるためであつた。上演せられた劇は成功して斯道を啓發することは實に多大なるものがあつた。九月には、その私演劇場に於て、抱月の譯でイブセンの劇『人形の家』と逍遙の作『寒山拾得』『お七吉三』『鉢かつぎ姫』を上演し、十一月には公演として帝國劇場に於いて『はちかつぎ』に代ふるに逍遙譯『ヴェニスの商人』法廷の場を以て之を再演した。この上演はまた批評壇を賑はすところが多く、單に技藝の點のみに止まらず、『人形の家』の思想に就いて、また婦人問題に就いてさへ論ぜられた。

これより先帝國劇場には松葉の作で、ウェルクマイステルの作曲せる『胡蝶の舞』が柴田環を中心として演ぜられて、こゝにも論壇はオペラ問題を以て喧しかつた。ノラの問題、また『寂しき人々』に對しての近代生活の是非の論など、皆新しい劇がいかに世間に刺戟を與へたかを示すものであつた。

この間に於いて脚本界には二つの新しい收穫があつた。一つは雨雀の『幻影と夜曲』

であつて、一つは勇の『午後三時』であつた。『幻影と夜曲』は『權三の死』『記念會の前夜』『第一の曉』『森林と犧牲』『市のマホメット』を載せたもの、『午後三時』は『午後三時』『淺草觀音堂』『夢介と僧』『河内屋與兵衛』『偶像』『戲場入口半時間』『海の子』等を收めてゐる。二者共に情調劇また氣分劇の名のもとに一括することの出來る作風である。雨雀が靜劇と稱するのも、その謂であつた。雨雀の作には之を一貫して運命觀と犧牲觀との背反竝行を見ることが出來る。そこに冥想的、哲學的靜寂の境があつた。勇の作は多くは歡樂が齎し來る頽廢的氣分が現はれてゐた。たとへば『午後三時』に於いて見る浪の音・信號の赤球・海鳥の悲鳴・の如き、すべて死の恐怖の暗示が夢幻的情調の中に出されてゐる。そして、前者の靜　さに對して、これには熱烈な憧憬がある。

吉藏の社會劇に對する努力も記憶せねばならぬ。その作の多くは思想觀念を基として、その上に立たうとするイブセンの面影があるといはれた。されど、思想と現實觀察との間の距離の存するところが、その缺點であつた。從來の新派劇から新社會劇に一歩を轉じようとする研究の道程に資するために特に作つたといはれる『血統』の如き、富める生みの父のもとに歸らずして、永く育てゝ吳れた養父母のもとを去らざる新思想の女性を描いてゐるが、未だ觀念に囚へられた跡が多くあつた。これ等はすべての

かれの作に通じていふ事が出來る。

四十五年の一月は季晴の演藝同志會に於いて、イブセンの作で鷗外の譯『幽靈』及びビヨルソンの作で同氏の譯『手套』が演ぜられた。五月には、ズーデルマンの作で抱月の譯『故鄕』が文藝協會によつて實演せられた。その思想が我が國の習慣を破り制度を毀つものがあるとして官憲の爲めに禁ぜられ、更に改訂して再び上演することゝなつた。かくて所謂マグダ問題は紛々として論ぜられた。新しい女に對する批評が、さきのノラと相俟つて起つた。六月、文藝協會は私演としてショーの作で正雄の譯『運命の人』逍遙の作、喜劇『骨董熱』及び振事劇『歌麿と北齋』とを演じた。また演劇俱樂部はボンの作で鷗外の譯『ジオゲネスの誘惑』チエホフの作で薫の譯『犬』グレゴリーの作で花菱の『ハイヤシンス・ハルベエ』を演じた。かくの如く、新脚本は續々として場に上つた。されば、創作に當るものもすべて何等かの新しい試をなさうと企て、またそれと共に舞臺上の效果を考へて、着々完成の域に入らうとするものがあつた。氣分劇また社會劇の外、新史劇とて過去の空氣の中に現代思潮の象徵を期するものも行はれて來た。鷗外の『靜』の後を襲つて現代語を以てするものも少なくなつた。

脚本の出たことも、なほ短篇の小說の如く、その數の多きがために、一々これを擧げる

事が出來ぬ。まづこゝには、杢太耶の脚本集『和泉屋染物店』を一瞥して終ることゝしよう。それは新進作家の作の中の、最も進んだ部類に屬してゐた。作の人物の與へる觀念の不徹底なる事を外にしては、自由の筆致、奔放の思想、殆ど成功といふべきものがあつた。これには「和泉屋染物店」「温室」「燈臺下」「醫師ドオバンの首」「印度王と太子」「十一人の盲」等が收められてゐる。その中でも『和泉屋染物店』と『醫師ドオパンの首』とが、特に優秀の作である。

明治文學史　終

人名索引

書名及件名索引

あ

いゐ

う

きぎ

くぐ

けげ

こ

さ

す

せ

に

ね

の

はば

昭和四年三月五日　印刷
昭和四年三月十日　發行
昭和四年六月十日　再版發行

明治文學史

定價　金壹圓八拾錢

著作者　永井一孝

發行兼印刷者　京都市下長者町油小路西入
株式會社　文獻書院
代表者　武藤欽

印刷所　京都市丸太町千本西入下ル
文獻書院印刷所

發行所
東京市神田區錦町一ノ一（振替口座東京六〇〇六一）
文獻書院
京都市下長者町油小路西（振替口座大阪六三〇九二）